
神風怪盗ジャンヌ

工藤 太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風怪盗ジャンヌ

【Nコード】

N0047R

【作者名】

工藤 太一

【あらすじ】

まろんは桃栗高校に通う16歳の少女。中学卒業後、遊園地で準天使のフィン・フィッシュと出会い、神風怪盗ジャンヌとなって、美術品に潜む悪魔を回収している。ライバル怪盗のシンドバッドの妨害を受けながら、カードキャプターのさくらと力を合わせて悪魔を次々と回収していく。

パート1 香港旅行前日（前書き）

この話はさくらちゃんとまるんちゃんが共闘する話です。まずは第一パートから始めたいと思っています。

因みにこれは24話から25話までの話でさくらの第2期から第3期までの話です。

パート1 香港旅行前日

1999年 8月2日

まろんは仲良しの都とデパートでショッピングをしていました。都の洋服選びにてんてこ舞いのまろんでした。

「ちよつと、都。落ち着いて・・・。」

「何、言ってるのよ！明日は5泊4日の香港旅行に行くのよ！男落とすためのシンプルな洋服を調達しないといけないんだから！」
デパートの前で福引をやっており都は福引券を持っていたから、福引をやって大当たりをとって、香港の旅のチケットを4枚もゲットしました。その内の3名は都一家でもう1人はまろんなのです。

「何、言ってるのよ！都には稚空がいるじゃないの！」
都は彼が引つ越して早々、一目ぼれをしてしまいました。

「バカね！稚空はアンタに夢中なのよ！少しは稚空のことを考えてあげなさいよ！」

「稚空には列記とした婚約者がいるのよ。誰があんなバカを・・・。」

「〜稚空のバカがどういふつもりよ。〜」

都は思い切つて稚空に告白をしたものあっさりとふられてしまい、稚空にまろんと託したのです。

そのまろんに自分と年の近いアルバイトの少年が洋服を進めました。

「お客様、こういうのはいかがでしょうか。」

少年が進めたのは、水色のキャミソール風の長いスカートのワンピースと薄い黄色の上着を模様したものでした。

「いえ、洋服を選んでるのは友人のほうです。」

メガネをかけたバイト仲間の少年がまろんを試着室に連れて行きました。

「でも、折角ですから付き添いの人も試着してみればいかがですか。」

「まあ、試着くらいなら・・・。」
「というわけでまるんも試着することにしました。」

数分後、まるんは試着すると胸の谷間が目立ち、スカートがちょうどまるんの膝に掛かるほどの長さでした。それを見た少年の片方が微笑みました。

「中々、お似合いです。年頃の娘さんを思わせるような服装です。」

「え、ほんとですか？」

「はい。」

「ありがとうございます。いくらですか？」

「まるんは服についている札を眺めるとワンピースは1200¥で上着は1350¥です。」

「えーっと、お小遣いは・・・90000¥だから、ワンピースと上着の値段を引くと87450¥か。」

「判りました。私、お金は大丈夫だから、この服を買います。」

「ありがとうございます。」

「こうしてまるんは服を買いました。その時、『まるん（怒り）！』と都の怒鳴り声が響きました。」

オルレアンでは、カードキャプターの木之本さくらと仲良しの大佛寺知世がまるんの部屋を訪れようと呼び鈴を鳴らしています。

「あやゝ。まるんさん、いないのかな？」

「お友達とお買い物に参ったのでしうか。」

「さくらの羽付きリュックからケロちゃんが顔を出しました。」

「さくらが昨日、買い物物の帰りにツイン・ベルの福引で当てた香港旅行3名様の手ケットがあるのにな。そのうち1人は姉ちゃんやと思つとつたのにな。」

「ケロちゃん、どうする？」

「しゃあない、別の人を探さなあかな。」

「例えば、李くんとか。」

「小僧はあかん。あの無力な小娘の所に会いに行く羽目になるからな。」

「じゃあ、雪兔さんは？」

「それは、感激や。」

「それをいうなら感動ですわ。」

ケロちゃんを知世ちゃんの漫才に誰かがエレベーターの音がします。

「まるんさんかな？」

「だとしたら、友達も一緒に違いならへん。隠れな。」

ケロちゃんはリュックの中に引っ込みました。でもエレベーターから出てきたのはまるんではなく、高校生くらいの青髪の少年でした。

「あれ、まるんさんじゃない。」

「別の人でしたか？」

少年はさくらたちを見るなり、険しい目をして睨みつけました。

「なに、やってるんだ？こんなところで。」

「まるんさんを訪ねてきました。ほえ、御兄さん、昨日の？」

確かにさくらはこの少年に見覚えがあります。昨日美術館で知り合ったまるんの隣の部屋の名古屋屋稚空と云う少年です。

「思い出した。昨日まるんと一緒にいたチビ輔だ。」

「ふち、チビ輔？」

「そのチビ輔がまるんになんのようだ。まさかまるんをからかいに来たんじゃないだろうな？」

稚空はさくらに詰め寄るうとしています。そこへ後頭部に苦痛が走りました。

「それは、稚空でしょう！」

まるんは後頭部を殴ったのです。

「まるんさん。」

「あら、さくらちゃん。知世ちゃんも。」

「ちよっと、まるん。誰なの？」

まろんの後に控えている都が尋ねます。

「そうか、都は初めてだっけ？昨日美術館で知り合った。木之本さくらちゃんと大道寺知世ちゃんよ。」

さくらちゃん達にも紹介するね。幼馴染の東大寺都と批栢町（批栢高校のある町）からうちの隣に引っ越してきた名古屋稚空。」

「「こんにちは。」」

「はい、こんにちわ。」

「ほら、稚空もあいさつしなさい。」

まろんは奨めますが稚空はそっぽ向いて。

「ふん、誰がこんなチビ輔共にあいさつするか。」

まろんに何かしたら承知しないぞ。」

稚空はさくらと知世の頭を1回ずつ拳を叩き付けました。さすがのまろんも腹が立つて稚空の右頬を左の拳で打ちました。

「いい加減にしなさい！こんな年端もいかない女の子達に手をあげなくていいでしょう！」

まろんはさくら達を部屋に入れて乱暴にドアを閉めました。

「まろん……。」

稚空大丈夫。」

稚空は頬を押えて。

「大丈夫。慣れてるから。」

部屋に入りました。

部屋では黒天使のアクセスが出迎えました。

「おかえり。稚空。」

あれ、どうしたんだ？その頬？」

「まろんに打たれたんだよ！あの餓鬼のせいだな！」

稚空は部屋に入るなり、苛立ちながら食事の準備を使用としました。

「あの餓鬼って？」

「一昨日、俺達の邪魔をした、魔法使いの餓鬼だよ。」

「魔法使い？ああ、あの時の。」
稚空は男怪盗のシンドバッドだったのです。「微笑み」の絵を封印しようとしてさくら達の妨害に遭ったのです。それが元でさくら達を嫌っています。

「そういえば、おいらも阿野子にぶっ飛ばされたな。」
アクセスは以前、オルレアンに向かおうとしているさくらに跳ね飛ばされたのです。

「あいつに関わるとろくなことがない。」
その時、隣から楽しそうな笑い声がありました。

その原因は。

「それ、このー！」

「はい、とりゃー！」

ケロちゃんと準天使のフィンが『ヴァンパイア』をしているのでした。

< さくらちゃんにとっては苦手なゲームらしいのです。 >

「ちよっと、ケロちゃん！静にしてよ！」

「フィン、近所の迷惑を考えなさい！稚空に文句言われたらどうするのー！」

さくら達はまるんと一緒に洗濯物を取り込んでいます。

「ごめんね。2人に手伝ってもらって。」

「いえ、いいんです。お願いのついでですから。」

「お願い？」

「はい、実は・・・。」

知世ちゃんにはまるんに香港行きの手ケットの事を話しました。

「実はこつちのも当たったのよ。参ったな。券1枚余ったし。」

まるんちゃん達は海を遠くから眺めています。

「綺麗だな。」

「海水浴でもしたい気分ですわ。」

「此処から海がよく見えるんだ。」

それより、2人とも大丈夫？さつき稚空に頭を叩かれたでしょう。

「もう大丈夫です。ちょっと痛かったけど。」

「酷いわね。なにも叩かなくていいのに。」

「酷いは俺がいいたい。」

隣のベランダから稚空が睨んでいます。御丁寧に右頬に絆創膏を張っています。

「なに、してんのよ！また、いやらしいことや食べ物のおねだりを言いに来たの！？」

「また？」

「いつも、人のパンツみたり、変な手紙を出したり、他にも私に言い寄ってくる変態ナンパ！婚約者がいながら。」

「弥白か。俺の方から断ったよ。」

「なんで？」

「なんとなく。」

まろんは呆れてしまいました。

「呆れた。都だけじゃなくて弥白さんまで振ったの？おじ様がみたらなんていうでしょう？」

「だから、アレはオヤジが勝手に決めた事だつてば。それより、こんなやつらと何遊んでたんだよ！」

「なんでもいいでしょう！行きましよう、知世ちゃん、さくらちやん！」

「はい。」

まろんたちは奥に引っ込みました。残された稚空は更に腹を立てました。

まろんは洗濯物を自分の部屋のベッドに叩きつけました。

「全く、稚空は！」

「まろんさん、なんか阿野人ちよつと恐いです。」

「怒鳴られたせいでしょうか？」

「うん。恐かった〜〜〜〜！」

さくらはまるんに泣きつきました。

「よしよし、可愛そうに。また稚空が苛めたら私が怒つといてあげるわよ。」

その時、またしても呼び鈴がなりました。その音に気付いたケルベロスとフィンはいそいそとゲームを片付けてまるんの部屋に隠れました。

まるんが玄関に来てみると、玄関の外に見覚えのある少年二人が立っています。

「あれ、御兄さんたち先程の。」

「あれ、ここはキミの家だったのか。」

「はい、どうぞあがってください。」

「お邪魔します。」

さくらも玄関にいこうとすると。

「お兄ちゃん、雪鬼さん。」

「さくら!?!」

なんとこの2人はさくらの御兄さんの桃矢と憧れの人の月城雪鬼さんです。

「さくらちゃんの御兄さん!?!」

桃矢と雪鬼は香港行きの子ケットをデパート内の福引で当てたのですが、生憎1枚しかなかったのでさくらと話をしようとしたこのマンションを訪ねてきました。なんとなく、雪鬼にはここだと思っただからです。

「全く、お前は。」

「ごめんなさい。」

「あまり妹さんを叱らないで下さい。」

まるんは桃矢を嗜めます。

「まあ、これでチケットが4枚も揃ったし。全員香港に行けるね。それにしてもみんな福引でチケット当てるなんて偶然ね。」

「だったら、皆さん。今夜は此処にお泊りになりません。」
「いいね。」

「そうしましょう。」
さくら一行はまるんの部屋に泊めてもらうことになりました。

まるんの部屋でケロちゃんとフィンが覗き見をしています。

「阿野人がさくらちゃんの御兄さん・・・？」

「桃矢兄ちゃんや・・・。」

フィンたちはサーツとしています。ケロちゃんはともかくフィンまで気付かれる恐れがあります。その時に雪兎が近づいて、フィンとケロちゃんはベッドの中に隠れます。雪兎は部屋に入るなり月に変身しました。

「フィン、ケルベロス。出てきていいぞ。」

月は笑顔で呼びかけました。ケロちゃん達は出てきました。

「なんや、月か。」

「驚かさないでよ。」

「すまんすまん。」

フィンたちは膨れ面です。

「本当にもう。で一体なんなの？」

「そうだったな。なにか胸騒ぎがするらしいんだ。」

「どんな？」

「判らない。ただ、嫌な気配がすることだけが確かだ。」

「もしかしたら、また悪魔の気配がするとか。」

「それともクロウやるか。」

「クロウの可能性もある。とにかく明日、香港に旅立たねば、まずはパワーの補給だな。」

「そりや、そうや。ほなワイらは隠れるデ。」

2人は隠れました。

月はまた、雪兎になりました。その壁を通して稚空が話を立ち聞きしています。アクセスはガラス窓から月の変身シーンを見ていま

した。

アクセスはすぐに稚空の部屋に引き返しました。

「あの、銀髪のがねの兄ちゃんがあの時、おいら達の邪魔をした兄ちゃんだったんだ。」

「なんて、運が悪いんだ。しかもあいつら香港に行くのかよ。もしかしたらあそこに悪魔が潜んでいるのかもしれない。」

その時、稚空の電話が鳴りました。稚空はうざったそうに電話の受話器を取りました。

「はい、もしもし。なんだ親父か？また、再婚か？え、違う？大至急実家に帰ってこい？」

稚空はどうやら実家に帰ってしまうそうです。

夜、さくらと知世、まるんはフィンやケルベロスたちとお風呂に入っています。

「なんか、このお風呂3人で入るとせまくありませんか。」

「一緒に入りたいてって言うときながら我俣いわないですよ。おまけにケルベロスまで連れ込んで。」

フィンとケルベロスは予備のティーカップ風呂に入っています。

「ええやないの。一緒に風呂に入った中やし。」

「あの時は強引に連れ込まれたんだけどね。」

「まあまあ。それにしても本当かしら月さんの言っていること。」

「ほんまや。せやからワイらが香港に行かなあかんのや。」

「苺鈴ちゃん、大丈夫かな？」

「苺鈴ちゃん？」

「私の友達の李苺鈴ちゃんです。」

「心配？」

「はい、苺鈴ちゃんはクロウさんの親戚の仲で唯一魔力がないからそれがコンプレックスで悪魔に取り付かれそうな気がするんです。」

「

「コンプレックスか。そういえば、クロウさんのお母さんは中国人だっけ？」

「せや。李家は香港に移住したって噂なんや。」

「なるほど。ん？」

さくらと知世はまるんの胸元を覗き込みました。

「ちよつと、なによ。2人して。」

「そういえば、まるんさんって案外グラマーだったなんて知らなかった。」

「なに、ませたことを言ってるのよ。稚空じゃあるまいし。」

「そういえば、こうして並べてみると・・・。」

知世はさくらとまるんを並べた。

「まるで姉妹ですわ。」

「「へ？」」

「言われてみればそうね。」

「例えば、寝坊して遅刻になりそうになったりとか。」

「まるんもそうだったわ。」

「居候に振り回されたりとか。」

「そういえばあったな。ワイら玉にさくらやまるん姉ちゃんを振り回したりとか。」

「あるある。」

「ケロちゃん！」

「フィン！」

「ねえ、みなさんで背中の中の流しっこでもしましょうか。」

「そらええな~~~~！」

「「よくな~~~~い！」」

3人と2匹はお風呂で遊んでいます。

まるんはさくらに胸を揉まれて、智代に御尻を撫でられています。

「まるんさん、胸が柔らか~~~~！」

「やめてよ！さくらちゃん！」

「それに、いいお尻ですわ~~~~！」

「知世ちゃん～～ん！」

ケロちゃんはフィンを押さえつけて背中を流そうとしています。

「背中流したるか。フィン～～～～！」

「変なところ触らないでよ！エッチ～～～～！」

さくら達は風呂で大騒ぎして逆上せてしまいました。

「大丈夫。さくらちゃん。」

「大丈夫です～～～～。」

「だから、1人ずつ入れればよかったのに～～～～。」

「たく、なにやってんだよ。マセっ子。」

「目が回りました～～～～。」

さくら達はソファーでのびています。

「コイツラとなにやってたんだ。」

桃矢はまるんの部屋を睨みつけます。

ちなみにケロちゃんとフィンはまるんの部屋のベッドの上でぐったりしています。

その夜、さくらちゃんと知世ちゃんはまるんの部屋に。桃矢お兄さん達は両親の部屋に泊めてもらいました。

翌日。さくら達は。

「ほえ～～～～～～～～！」

「ウソ～～～～～～～～！」

お約束の寝坊をしてしまいました。

「「遅刻～～～～～～～～！」」

「おほほほほ。本当に似てらっしゃいますわ。」

知世ちゃんは黙々と着替えながら楽しそうに見ています。まだ、早いというのに2人は大慌てです。

「まるん、さくらちゃん、しっかりして！」

「まだ、5時半やで！」

「ほえ？」

「言われてみればそうね。」

いつものお惚けと早とちりが始まりました。

「ほんと（ほんま）に天然だ（や）。」

さくらとまるんは本当に似たもの同士です。

パート1 香港旅行前日（後書き）

今回はさくらちゃんが苺鈴ちゃんと再会する場面が始まります。彼女は李家の者でありながら魔力がありません。そんな苺鈴ちゃんがジレンマを抱えてしまいます。もしかしたら彼女は悪魔に取り付かれてしまうかもしれません。はたして彼女たちは苺鈴ちゃんを救うことができるのでしょうか。

パート2 再会李莓鈴（前書き）

今回はカードキャプターさくらのオリジナルキャラクターの1人。李莓鈴ちゃんが再登場します。さくらちゃん達は彼女と感動の再会を果たします。

今回は協力者の1人観月歌帆先生も登場させておきます。

莓鈴ちゃんは魔法は使えないから使えるようにしておきます。

パート2 再会李尊鈴

8月3日

まろんとさくら一行は朝食を済ませて、都たちと待ち合わせをしました。

「まろん、早く早く。」

「うん、今行くー！」

まろん達は東大寺一家と香港行き空港に向かいました。さくらのリュックの中ではケロちゃんとフィンがゲームボーイをして遊んでいます。

まろん達は香港行きの飛行機に乗りました。

「（席のリストを見ながら）えっと、私の席は……。あつた、此処だ。」

あれ、さくらちゃん。」

「まろんさん、私の隣の隣ですね。」

「よかつたですわね。私の隣で。」

後から4番目の右側の窓際から行くと右からさくら、知世、まろんの順番でした。その中央には都一家で、左側では桃矢と雪兎と茶色いノースリーブの女性が座っています。因みに彼女達の後にはヘンな3人の男がいます。真ん中の男はずっとさくら達を睨んでいます。

そうとも知らないさくら達はおしゃべりをしたりトランプをしています。

「次はさくらちゃんの番よ。」

「よしジジ来るな。」

さくらは真ん中のカードを引きました。ところが。

「はう〜、またジジだ〜〜〜。」

「さくらさんはよほどジジさんに好かれてるね〜〜〜。」

「そうみたいって、この声は。」
さくらが振り向くと御父さんの藤隆が身を乗り出して微笑んでいます。

「御父さん!？」

「え!？」

「おじ様!」

「知世さんも久しぶり。」

「さくらちゃんの御父さん!？」

その時、別の男性の声がしました。

「やつほー。まるんさん。」

「おじ様!」

「稚空の御父さん!」

彼は稚空のお父さんの名古屋海生医師です。

「おや、名古屋くん。この可愛いお嬢さんとお知り合いですか。」

「はい、この人の不良息子の日下部まるんと云います。」

「誰が不良だ。」

海生先生の横で居眠りしていた稚空が寝起きが悪そうな顔で起き上がりました。

「げげ、稚空?」

「おや、息子さんとお知り合いですか?」

「ええ、まあ。この人酷いんです。貴方の娘さんと知世ちゃんに手を上げたんですよ。」

「なんだって、ダメだよ。稚空くん。」

さくらちゃんと知世ちゃんだっけ?本当にごめんね。」

「いえ、いいんです。まるんさんが庇ってくれて助かりました。」

「なんかこの稚空さんとかいう人。初対面なのに、睨まれている……。」

「あら、木之元さん達、お久しぶりね。」

左側の窓際の方から聞きなれた女性の声がありました。桃矢と雪兎が振り向くとさくら達の産休の代理教師かつクラスの前期担任の観

「たんと見なさい。さくらの兄の顔を。」

稚空は桃矢とさくらの顔を見比べました。

「あんだ、この天然怪獣の飼い主か。」

まるんはブチっと切れた。

「いや、遅刻怪獣の兄だ。」

さくらもブチっと切れた。

「お兄ちゃん！」

「稚空！」

数時間後、桃矢はさくらにお尻を抓られて、稚空はまるんの鉄拳を鼻で受け止めて痛々しい表情をしています。さくらとまるんはぶりぶりしています。

「稚空くんダメじゃないか。小さな女の子を怪獣呼ばわりしちゃ。

桃矢くんだっけ？キミも可愛い妹さんを怪獣呼ばわりしちゃいけないよ。」

「いいじゃないか。仲良しさんだから。」

一行の賑やかな会話は続くのでした。

一行はバスでホテルに着きました。

「今日から此処に泊まるんだね。」

「楽しみですわ。」

藤高さんは予約を済ませました。

「僕達は4階の空き部屋使えるんだって。」

「よかったね、さくらちゃん。」

「はい（両目をハート）！はにゃ~~~~ん！」

雪兎の笑顔でさくらははにゃ~~~~んな気分になりました。

さくら達は4階で寝ることにしました。さくら達女の子が部屋に入ります。さくらは大喜びでリュックを抱えながらベッドにダイブします。

「ムギユウ

「！」

「ほええ。」

さくらは大慌てでリュックを開けるとフィンとケルベロスが素顔で怒鳴り込んできました。

「コラ　　！」

「私達のことを忘れてるでしょう！」

「ごめんごめん。でも、素敵な部屋でしょう。」

「ほんまや。前に比べていい部屋や。」

「だから、あまりに嬉しくてつい。」

「フィンたちを潰そうとしたでしょう。」

「本当にごめん。」

謝るさくらにまるんが割り込みます。

「まあまあ。」

「そういえば、前は魔術師の御姉さんと戦ったことあったよね。」

「そうなの。」

「そうなんや。あの姉ちゃんと最後は和解したけどな。」

「すごい迫力だったんだ。」

「そうだ。気晴らしにお散歩でもいこうか。」

「それは、ありがたいけど。ワイには仕事があんねん。」

ケロちゃんはケルベロスになりました。

「ワイ、これからパトロールに行ってくる。悪魔やシンドバッド

つちゅう兄ちゃんがまた、なんか企んどるかもしれへんし。」

「フィンは、まるん達の守備でもしてるわ。」

「そういうと思ったわ。」

その時、コンコンとノックがしました。ケルベロスは羽をしまつてフィンを連れてシャワー室に隠れました。ドアを開けると雪兎さんが顔を出しました。

「雪兎さん。」

「こんにちわ。さくらちゃん、これから苺鈴ちゃんの所に会いに行かないか。」

「苺鈴ちゃんに？」

「いいわね。案内してくれる。」

「はい、喜んで。」

「それじゃ、李家に参りましょうか。」

「あの小娘か。パトロールのついでによつたらろつかなく〜。」

さくら達（何故か桃矢も）は香港の観光（散歩）にいきました。

ピークトラムにハッピー・ヴァレー競馬場、そしてジャンボキングダムなどを見学していました。

「前に来た時と全然風景画変わってないね。」

「さくらちゃん達、前にも来たことがあるの？」

「ああ。あの時は父さん来られなくて俺とさくらと雪（雪兎）と知世ちゃんの4人出来たんだ。」

「それで他には？」

「いなかったよ。ただ、どついう訳かさくらちゃんの友達の子が一時帰国したことがあつたんだ。」

「帰国？」

「李君と苺鈴ちゃんは元々香港の出身だつたんだ。」

「え〜。あんな小さい子がこの友枝町に引つ越してきたの？」

「はい。李君は1年と2ヶ月も前に、苺鈴ちゃんはその3ヶ月後に転校致しましたわ。」

「従姉妹の方はともかく、あの餓鬼はスンゲーム力つくぜ。事あるごとにさくらに突っかかりやがって。おまけに雪に付きまとうし。

困つた奴だぜ。」

「随分と仲が悪いのね。」

「そうなんだ。」

「まあ、あの餓鬼が帰ってきてなくて精々したぜ。」

「強気だな。（くすくす）」

「うるへー。」

桃矢は雪兎の頭を小突きました。

「雪、さくら達と一緒に苺鈴とかいう子の実家に行ってくれ。俺は、お土産やでも見てくるから。」

「（不思議に思いつつ）判った。行こうかさくらちゃん。」

雪兎はさくらに手を差し出しました。さくらは嬉しそうにその手を取りました。

「はい。」　　「ふはにや~~~~ん　　」

さくら達とまろんは苺鈴ちゃんの家に向かいました。

さくら・知世・雪兎・まろんは苺鈴の家に着きました。小狼の家と違ってとても明るい感じがするのです。まるで豪邸の家のようでさくらたちが迷子になってしまうような広さかもしれませぬ。

「此処が、苺鈴ちゃんの家か。ほえ　　。李君家と違って中々の豪邸らしい家だな。」

「おまけに向こうに李君の家があるなんて本当に隣ですわ。」

「阿野子のお姉さん達元気かな？」

「木之本さ　　ん。」

後から聞き覚えのある叫び声が聞こえてきます。さくらは振り返ると白い振袖風のチャイナ服を着た黒髪シニヨン付きのツインテールの女の子が駆けてきました。

「あ、苺鈴ちゃんだ！苺鈴ちゃーん！」

さくらも夢中で駆け出しました。その間に雪兎は月に変身しました。

「あらら、月さん？こんなところで変身を解いてもいいんですか？」

「いいだろう。一度でいいからあの少女にこの姿で自己紹介して驚かしてあげたかったんだ。」

月は白い羽を羽ばたかせて苺鈴のところへ飛びました。知世もまろんも後を追うように駆け出しました。

「苺鈴ちゃん、久しぶり！」

「暫くね。今回はその白い羽の妖精さんを連れただお姉さんを連れてきたの？」

「白い羽の妖精さん？」

「私？」

いつの間にか追いついたまるんの右肩の上でフィンが浮いていました。

「そうよ。貴方以外の妖精さんは他にいないでしょう。この小人サイズがなによりの証拠よ。」

確かにフィンは小人のようなサイズと背中に羽を生やしていました。

「私が見えるの？」

「（むっとして）見えないわけがないでしょう。」

「だよ。私は妖精じゃなくて準天使のフィン・フィッシュ。フィンって呼んで。」

「フィンていうのだ。」

「私は日下部まるん。フィンの頼みで悪魔を退治しているの。」

「私は月。」

いつの間にか月がさくら達後に立っていたです。勿論知世ちゃんもいます。

「月？ていうか。貴方何時の間に？」

「まあ、話せば長くはなりますけど、立ち話もなんですから、家でじっくりお話致しましょうよ。」

「いいでしょう。ささ、家にどうぞ。」

『お邪魔します。』

さくらは苺鈴も家に招いてもらいました。

さくらちゃんは月のこととクロウカードは今自分が持っていることをまるんは悪魔が苺鈴ちゃんの部屋で説明しました。

「え〜〜！この人が貴方が好意を抱いていた人の本当の姿

！」

「（片手の人差し指を口にあてて）し　　！ 苺鈴ちゃん声大きいよ。」

「心配無用。仮の姿の時は私の記憶がないんだから。」

「はう。そうでした。（ペロを出す）」

「ごめんなさい。それで小狼のクロウカードは今は貴方が持っているの？」

「そういうことだよ。」

「なるほど、理由は知らないけど小狼はドジね。」

「それを聞いたら李君は怒り出すでしょう。」

「本当にもう。所でまるんさんは悪魔が何処かに潜んでいるって言うてましたね？」

「ええそうよ。」

「途中で黒天使のアクセスやシンドバットの妨害を受けてるけど、今はさくらちゃんという頼もしい仲間がいるのですもの。」

それより、苺鈴ちゃんは天使の私が見えるってことはよほど、凄い魔力を持っているってことじゃない。」

月を除いたさくら達はそのことに驚きます。

「苺鈴ちゃんが！？でも、李君が持っているクロウカードを探すアイテムは苺鈴ちゃんが持っても反応はしなかったよ。」

「それは、彼女が魔力に目覚めていなかったらしいからだ。私も彼女を見たとき、凄い魔力を持っていると確信したんだ。」

「天使か聖女の生まれ変わりっていう可能性だってあるよ。」

「彼女は李家の中では一番魔力の覚醒が遅かったから、彼女は魔法が使えなかった。」

「私が魔力に目覚めたのは今日なの？」

「そういうことになるわね。貴方がどんな能力を持っているかは知らないけど、凄い魔術師なのかは確かよ。」

「本当に？」

「間違いないわよ。」

「そうですね。試しに李くんの羅針盤でさくらちゃんのクロウカ

ードが何処にあるか探して見ればよろしいですわ。」

「なるほど、ちょうど今小狼が忘れた羅針盤が台所のテーブルにあっただわ！取ってくる！」

苺鈴は羅針盤を取りに台所に向かいました。取り残されたさくら・月・フィン・まるん・知世はぽつんと呆気に取られています。

「李くん・・・来てたの？」

「そうよう・・・ですわね。」

「しかもクロウの作った羅針盤を忘れたな。」

「随分と間抜けな子ね。」

「雪兎さんの時はね。あは。あははははは。なんか嫌な予感がある・・・。李君がこっちに向かっているような・・・。」

「となるとフィンちゃんは隠れていた方が良さそうですね。クロウさんが悪魔さんと関係があるかどうか確定はしていませんし。」

「となると私も仮の姿に戻った方がいいな。」

フィンは大急ぎでさくらのリュックに身を隠すと月も雪兎に戻ろうとしました。

その頃苺鈴は羅針盤を取りに台所に向かいました。

「えっと、羅針盤は・・・。あつた。ここだ。」

その時、小狼が台所に入ってきました。夏休みで香港に帰国しました。

「苺鈴。此処に俺の羅針盤忘れてないか・・・。（気配を感じ陰しい表情に変えて）むっ！この気配・・・!？」

苺鈴が羅針盤に触ろうとした時、羅針盤の中央から黒いオーラが出てきて苺鈴を包み込みました。

「いやー、何これー！ー！」

「苺鈴！」

小狼が駆け寄ろうとしましたが、既に手遅れです。目つきが悪くなった苺鈴は衝撃波で小狼を弾き飛ばしました。小狼は外に飛び出して気を失いました。

「邪魔しないでよ。私はやっと魔力が得られたのよ……。」

その頃、苺鈴の部屋ではフィンが何かを感じるように頭を痛めています。

「いたたた……。」

「フィ、フィン。如何したの？」

「早速、悪魔の登場か。」

「もうこんな近くにいるの!？」

その時、窓ガラスの割れる音がしました。

「何?この音？」

「苺鈴ちゃんに何かあったのではないのでしょうか？」

「まさか彼女に悪魔が取り付いたのでは。」

「フィン見てくる！」

と、その前に！」

フィンはまるんのロザリオに聖なる力を注ぎました。

「これでよし!まるん何かあったらジャンヌに変身するのよ!いいわね!」

そういい残すとフィンは台所に向かいました。

「まさか、小狼つて子の羅針盤に取り付いたんじゃないのかしら?」

「もし、そうなら。チェック・メイトした時に羅針盤そのものが消えるんじゃないでしょうか？」

「そんなことはないわよ。この前ピアノに悪魔が取り付いたときにチェック・メイトしてもピアノそのものじゃなくて音色だけがチェス駒になったのよ。羅針盤の場合は魔力だけが消えるかもしれないじゃないかしら。」

「なんか尚更いけないような気がするんだけど……。」

その時、プティクレアに反応が生じました。

「フィン!」

大変よ!阿野羅針盤に悪魔が取り付いちゃった!

「なんですって！」

「やっぱり、そうだったんですか。」

「今回は予告状出す必要はないらしいな。魔法使いのアイテムなどと言っても誰も信じないだろうし。」

これはこのまま封印する以外手段はないわ。

「判った！すぐに台所に直行するわ！」

まろんはロザリオを持って、台所に向かいました。彼女のあとを追うようにさくら・知世・月も台所に向かいます。まろんはロザリオを握り締めて祈ります。

「ジャンヌ・ダルクよ。力を貸して。」

まろんの体は翼を生やした桃色のジャンヌ・ダルクを表すような聖騎士の形をした光に包まれています。その光から和洋折衷の衣装を纏った金髪の少女が姿を表しました。

「強気に本気！無敵に素敵！元気に勇氣！」

まろんは神風怪盗ジャンヌに変身しました。

パート2 再会李莓鈴（後書き）

莓鈴ちゃんは悪魔に取り付かれてしまい大パニックです。よりによつてクロウ・リードの作った羅針盤に悪魔が取り付いてしまったら小狼君はクロウカードを探すことができなくなってしまいます、じやなくてまるんちゃんの幼馴染の都ちゃんに予告状を出せません。もはやこのまま封印する以外の手段はないようです。

莓鈴ちゃんの運命はいかに。

パート3 治癒魔法（前書き）

いよいよ、莓鈴ちゃんの魔法の能力が明かされます。そして、フィンの秘密が明かされます。

さくらちゃん達は彼女を無事に悪魔の魔の手から救い出せるのでしょうか。

今回は観月先生、藤隆パパ、海生パパを登場させました。

桃矢兄ちゃんはケロちゃんだけじゃなくてフィンのことにも気付いています。

パート3 治癒魔法

ジャン又たちは台所の入り口まで来ています。フィンは内の窓枠で待機しています。何時シンドバッドが妨害するか判らないからです。

「本当に苺鈴ちゃんが悪魔に取り付いている。」

「しかもクロウの羅針盤に……。」

「一体如何しましょう？」

「とにかくシンドバッドに気付かれる前に封印しないと！」

ジャン又！

プテイクレアからフィンの反応がしました。

「如何したの！？また、シンドバッドが邪魔しに来たの！？」

そうみたい！アクセスに気付かれたわ！

「どのカードを使おうかな！？サイレンホリューション静？幻？それとも迷？メイズ ロック錠の方が入り憎いんだけど。ループ輪もいいかも。」

さくら達は遂に苺鈴に見つかってしまいました。

「誰？そこにいるのは。」

「ちつ、見つかったわ。」

その時、銀髪の青年が入ろうとしました。シンドバッドは片手にピンを構えています。

「アクセス、あの子がジャン又達に気を取られている内に封印し

よづけ。」

「頼むぜ、シンドバッド！」

シンドバッドは封印しようとしています。

「しまった。シンドバッドだ！」

「ほえええ！どど、如何しよう！は、そうだ！」

さくらは波のカードを取り出しました。ウェイブ

「波よ！邪魔者を外部に運び出せ！ウェイブ波！」

広くも狭くもない幅の波がシンドバッドとアクセスに襲い掛かる

うとしています。シンドバッドとアクセスは強い波にさらわれてしまいました。もう1人の侵入者も一緒に。

<さくらちゃんは小狼が来ていることを知りませんでした。

なお、小狼君は苺鈴ちゃんの魔力で失神しています。>

小狼とシンドバッドは中庭まで流されてしまい。

「まるん！何処なの！？私を差し置いてさくらちゃん達と散歩するとはどういう了見よ！」

「まあまあ、都ちゃん。そう怒らないで。」

「だつて〜。」

「あら？」

「どうした？」

アレレ 「！」

波はたまたままるんを探しに李家（苺鈴の家）を訪れた東大寺一家と観月先生と鉢合わせしてしまいました。波は丁度一行の4m以上で止まりました。シンドバッド達は伸びています。

「かかかか・・・怪盗シンドバッド!？」

「なんだか知らないけど、探す手間が省けたじゃない。ほほほ。」

「お母さん、笑い事じゃないよ！なによこれ、子供を人質にしようとしてるじゃない！」

「それは、大変だわ。早く救急車と警察を呼ばなくちゃ。」

「そうだな。」

都と都ママは小狼を介抱して、観月先生はこっそりとアクセスを自分のバックに入れてご丁寧に鍵をかけてシンドバッドの手足を自分のマフラーとスカーフで縛めました。東大寺刑事は警察と救急車を呼びました。

「待てよ。シンドバッドがいるってことは、まさかジャンヌもいるってことじゃないの？」

都は苺鈴の家に行こうとしました。

「都何処に行くの？」

「ジャンヌを探してくる！シンドバッドがいるってことはジャンヌもいるってことじゃない。」

「それはそうだけど、シンドバッドだけの場合だってあるだろう。」

「見てくる！」

「都は駆け出しました。」

「都！」

そんな彼女の行く手を先生が立ちはだかりました。先生は都の前に来ると片手の人差し指で都の眉間を突くと都は気を失うように倒れこみました。

「おや、どうしたんだ？」

「（笑顔で）ちよつと眠くなりました。」

東大寺夫婦はきよとんとしました。

「頑張つてね。さくらちゃん。まるんちゃん。」

葛鈴は波のクローカードの餌食になりかけてしまいました。でも、強い結界を出して難を逃れたのです。

「やつてくれるじゃないの。木之元さん。」

「葛鈴ちゃん！目を覚まして貴方は悪魔に心を奪われているわ！」

「李家に生まれながら無力の貴方を利用してしているのよ！」

さくらとフィンは抗議しようとするも彼女は聞く耳を持つとしくてくれません。

「煩い！私は魔法が使えるようになったのよ！そんな判らずやはこつよ！」

葛鈴は両手から光弾を召還して。

「食らいなさい！」

さくらたちに投げつけようとしてました。

「^{スルー}抜！」

光弾は^{スルー}抜の魔力でさくらたちをすり抜けました。変わりに知世ちゃんに当たりそうになります。そこに月の光の矢が光弾を打ち消し

ました。それでも、苺鈴は再び光弾を発射しようとしています。賺
さずさくらは盾シールドで防ぎました。

「危なかった　　！」

「でも、あの光球は強烈よ！」

「判ってるじゃない。」

今度は得意の中国拳法で二人に襲い掛かってきました。

「ほええ！」

「何この子！中国拳法習ってるなんて聞いてないわよ！」

「ほえ　　！言うのを忘れてました　　！ごめんなさ

い！」

2人は苺鈴の拳法を避けています。

「月さん！知世ちゃんをお願いします！」

「判った！」

「フインは下がってて！」

「オツケー！」

「さくらちゃん、ジャンヌさん！頑張ってください！」

さくらとジャンヌ又は苺鈴の憲法を避けるのに精一杯です。例えば
跳ジャンプでかわしたり、持ち前の新体操能力でかわしたりで苺鈴ちゃんに
近づくことはさすがに不可能です。その内にさくらとジャンヌの頬
や手足に掠り傷が付いてしまいます。遂に二人は壁に蹴り飛ばされ
てしまいました。

「いたたた、さくらちゃん平気？」

「はい。でも、苺鈴ちゃん拳法が得意だから、近づくことは無

理です。」

その内に苺鈴が二人に襲い掛かろうとしています。

「貴方達の力ってこんなものなの？たわいもないわね。」

「やめて、苺鈴ちゃん。」

「私たちは貴方達と戦いたくはないのよ。」

「貴方達にその気はなくてもこっちにはあるのよ。」

苺鈴は拳を突きつけようとしてました。さくらは時のカードタイムを取り

出しました。

「時！」^{タイム}

さくらは時の魔力で時間を止めてジャンヌと逃げようとしたが、既に魔力が目覚めていた苺鈴の時間は止められませんでした。それどころか避けた場所に移動して。

「お生憎様。さつきもいったけど私は魔法が使えるようになったのよ。」

拳でさくらたちを殴り飛ばしてしまいました。すると時の魔力が解けてしまいました。幸い短時間だから魔力は少しも消費はしなかったから未だ戦えますが、その代わりに傷だらけになってしまいました。

「これじゃ、苺鈴ちゃんを止められないわ。せめて読心術で止められたらいいんだけど。」

「読心術？そうだ！」

さくらは秤のカードを取り出しました。

「我が友の心を通せ！秤！」^{ライブラ}

巨大な天秤が現れて空間が変わり、天秤は苺鈴とさくらを片方ずつ受け皿に乗せました。二人は丁度重さのバランスがぴったりです。

「ちよつと、何の真似よ！」

「真似じゃないわ。苺鈴ちゃん、落ち着いて。」
さくらは苺鈴の方に杖を翳します。

「（後ずさりして）な、何よ？」

「苺鈴ちゃん、聞こえる？」

「聞こえるわ。木之元さん、大丈夫？なんだか私は知らないうちに魔法を使ったり木之元さんたちを攻撃しているようなことをしているけどどうなってるの？」

「それはね、悪魔が苺鈴ちゃんの人格を変えようとしているのよ。」

「なんですって。悪魔って人の美しくて弱い心を漬け込んで人を

操ろうとしているの？

まさか、私が魔力がほしいなんて願ったからこうなったの？

私は、ただ小狼のために役に立てたかったのに。私って本当に疫病神だわ……。」

「莓鈴ちゃんは疫病神なんかじゃないよ！」

「ちよつと、貴方を言ってるの？頭がおかしくなったんじゃない？」

「莓鈴ちゃんはいつも李君を助けてあげたり、支えてあげたりしていたじゃない！李君だけじゃない！私のことだって助けてくれたじゃない！いつもぼーっとしている私を引っ張ったりもした。恋の相談に乗ってくれた事だつてあるし、李君と一緒に双のカードを捕まえてくれたことあるじゃない！」

「煩い……。煩い、煩い、煩い！！！！」

莓鈴は光弾を放とうとしたが天秤の片方が傾いてしまったために足元を崩して尻餅をついてしまいました。その時、空間が元に戻りました。尻餅をついたまま、莓鈴はさくらを睨みつけました。

「莓鈴ちゃん。今から貴方を助けてあげる。」

「……黙れ！」

莓鈴は再び光弾を放とうとしたところに、ジャンヌのリバンドポールが彼女の両手首を戒めます。

「何！？」

「ごめんね。莓鈴ちゃん、貴方を悪魔の呪縛から解放してあげる。」

「えーい！放せ！」

莓鈴はジャンヌに光弾を放とうとします。さくらは泡のクローウカードを取り出して杖に掲げます。

「泡よ！全視界を遮れ！泡！」

泡を操る人魚の少女は大量の泡を召喚して目晦ましをしました。

「何よこれ！？動けないじゃない！」

さすがの莓鈴も苦戦してしまい、ジャンヌは紐の引いて莓鈴を倒

しました。その表紙に羅針盤が離れてしまい、ジャンヌはプティクレアを構えません。

「神の名の元に、闇より生まれし悪しき者、此処に封印せん！チエック・メイト！」

プティクレアからピンを投げ出して、ピンは羅針盤の中央に命中して中央に取り付いている悪魔が苦しみだした。悪魔が消えてピンはチエス駒になり泡は駒を包んでジャンヌの元に運びました。駒は見事にジャンヌの手に納まりました。同時に泡は消えてしまいました。

「回収完了！」

「凄いですわ！」

知世はいつの間にかさくらの背後にいました。どうやらこっそり泡の中で撮影していたのでした。

後に残ったのは気を失った苺鈴と羅針盤です。

数分後。苺鈴はまるんの膝枕の上で目を覚ましました。

「う……。」

「ああ、気がついた。」

「あれ、まるんさん。フィンも。」

「フィンはほっとしました。」

「よかった。魔力は消えていなくて……。」

「私、今まで何していたの？」

（傷だらけのさくらとまるんを見るなりぎよっとした表情で）如何したの2人ともその傷は！？」

「大丈夫よ。」

「ただの掠り傷だもん。」

「どこがただよ。2人とも動かないで。私が付けた傷だもん。私が見てあげる。」

苺鈴は両手でさくらとまるんの顔にある傷口を当てました。すると苺鈴の手が光りました。見る見るうちに2人の顔の傷口が消えま

した。

「あれ。（自分の手を見て）今、回復魔法使ってなかった？」

「使っていたみたい。」

「本当に苺鈴ちゃんにこんな力があるんだ。」

「まるで聖女か天使のようですね。」

「ひよつとしたら、苺鈴ちゃんは人の傷を治す能力を持っているんじゃないかしら。」

「私が？癒しの術を？」

「そうだよ。貴方は治癒魔法の使い手だよ。貴方はやっぱりすごい魔力の持ち主だよ。」

「私が、だとしたら木之元さんとまるんさんの手足も治せるんじゃないかしら。」

苺鈴はさくらとまるんの手足に手を翳します。

「天子光臨。」

両手から光を出して二人の手足も癒しました。

「すごい。これなら木之元さんや小狼をサポートできるわ！」

「よかったね。苺鈴ちゃん！」

「これで李家の特例もなくなったようだな。」

「ええ、そういえば羅針盤はどうなったかしら。」

「そういえば、そうね。」

フィンが羅針盤を苺鈴に見せました。

「此処よ。」

苺鈴は羅針盤を受け取りました。試しに羅針盤に念じを込めますが、無反応です。

「どうやら、この羅針盤の魔力をチェック・メイトしたわけね。窓から聞きなれた女性の声がありました。声の主は観月先生です。」

「観月先生。」

「そうか、阿野人もクロウさんの関係者だったのね。」

「ええそうなの？」

「ああ、彼女はクロウの依頼であるアイテムを渡しに友枝町に来

たらしいんだ。」

「それって、阿野鈴じゃ。」

「そうですね。その鈴と一体化してさくらちゃんの杖は成長したんですね。」

「そうですね、木之元さん。いつもとは違う杖を持っていたものね。」

観月先生は窓からこっそり入ってきて。

「お邪魔します。」

よかったわね。李さん、貴方の魔力が目覚めて。」

母鈴ちゃんは嬉しそうに照れました。

「そうだ。まるんちゃんとフィンちゃんにいい知らせがあるのよ。」

「「いい知らせ？」」

歌穂先生はバツクをそつと開けました。なんとアクセスが簞巻になつて縛られています。」

「あ　！アクセス！」

「や、やあ、フィンちゃん……。ははははは……。」

「さつき庭で捕まえたのよ。これから家に帰って悪魔のことを聞き出すから。」

「「（目を輝かせて）本当！」」

「（汗たらたら）ヤッベ　。」

「ええ。それとも一つ。例のシンドバッドが東大寺刑事に捕まったのよ。」

「シンドバッドが。」

「ええ。」

「よかったじゃない。これで邪魔されないわね。」

「ちよつと、待っておじ様がいるってことは……。」

外から『まる

ん！』と怒り声が台所まで響いてき

ました。声の主は都です。

「あら、起きちゃったのね。」

まるんは『やつぱり』と思いました。月は素早く雪兔に戻り、さくらは杖を隠しました。その後、まるんは都からこっ酷くお説教をされてしまいました。

数分後。小狼は救急車とパトカーのサイレンの音で目を覚ましました。

「あら、気がついた？」

小狼は起き上がりました。

「あれ、此処家の庭だ。」

東大寺刑事が都ママの横に来て。

「此処はキミン家か？」

「はい。」

「今、救急車が来てるんだけど・・・。」

刑事は目を覚ました少年になんて説明したらいいのか判らないのです。その近くで簀巻にされて数人の警官達に担ぎこまれてじたばた暴れているシンドバットの姿がありました。

「放せ！放せ！俺には黒髪の美少女を助けてあげなきゃいけないんだー！ー！ー！」

「言訳無用！大人しくしろ！」

パトカーに入れられそうになったシンドバットはなお暴れ続けています。

「あの、阿野人は？」

「ああ、こいつか。怪盗シンドバットっていつて桃栗町に潜んでいる美術品を根こそぎ盗もつとする噂の怪盗ジャンヌっていう女怪盗よりせこい怪盗なんだ。」

しかし、中国にも現れていたなんて信じられないぜ。しかもこんな予告状を出すなんてよう。」

刑事は懐から手紙のようなはがきを取り出しました。小狼はそれを手にして読んでみました。

『本日の正午

李家に代々伝わる羅針盤の美しさを頂に上がります。
怪盗シンドバッド』

この予告状ははがきで縦書きです。

「羅針盤？」

「（腕組して）ったくどういふつもりだ・・・。」

小狼は決心するかのように刑事達から立ち去りました。

「ちよつと、貴方大丈夫。シンドバッドに暴力を振るわれてまだ動けないでしょう。」

「大丈夫です。俺はこの人と会ったばかりで何もされていませんから。」

小狼の姿が見えなくなると、二人は？と思いました。そこへ、都とまるん・さくらと知世と苺鈴・雪兎と観月先生が来ました。

「あら、都、みんなお帰りなさい。」

「こんちにわ。初めまして李苺鈴です。」

「こんにちわ。」

「只今。」

あれ、茶髪のチャイニーズボーイは如何したの？

救急車に乗っていた人が”元気になって何処かに行った”と言いました。

「もう元気になったの？」

「そうなんだよ。ところで都ジャン又はいたか。」

「とつくに逃げたわよ。今回に限って予告状もなしに羅針盤を盗むなんて。」

「羅針盤なら、無事です。」

苺鈴は羅針盤を都たちに見せました。

「よかった。無事だったのね。」

「はい。ところであちらで暴れているへんてこりんな人は。」

「怪盗シンドバッド。ジャン又よりせこい怪盗。」

「私よりって都~~~~。」

そのとき、木の陰から小狼が見ています。

「苺鈴を助ける為に羅針盤を盗むってどういうことだろう。この人、あんまり悪い人じゃなさそうだ。とりあえず話だけでも聞こう。あの嫌な気配の正体も気になるだろうし。」

小狼はポケットから一枚の札を出すと”風華招来”と小声で呪文を唱えて突風を起こしました。

庭では都たちが突風の餌食にあってしまいました。

「いや　　！何これ　　！」

「キエ　　！スツゴイ風だ　　！」

一行が大騒ぎをしているうちにアクセスは自力で戒めを解き鍵を聖力で抉じ開けてカバンから脱出してシンドバッドも自力でロープを解いて、苺鈴から羅針盤を奪って脱出を図りました。小狼は”早く、こつちに”というように手招きしてシンドバッドとアクセスを連れて自宅に逃げ込みました。

ようやく風がやんだ頃には。

「も~~~~、やな風。髪の毛が台無しだよ。」

「あらま。あら、羅針盤がなくなってる。」

「え　　！」

苺鈴の手には確かに羅針盤が無くなっています。おまけにのびている警官の集団のところにはシンドバッドが消えていました。

「シンドバッドもいない。（カバンを見て）あら。」

「如何したんですか!？」

まろん達はかけよると、歌帆先生は耳打ちして。

「アクセスが脱走した？」

確かに歌帆先生のバックの中でロープが残っているのです。

シンドバッドとアクセスを助けた小狼は2人を自分の部屋に匿い

ました。外では警官たちがシンドバッドを探しています。

「助かったよ。」

「危うく、警察に連行されるところでしたね。」

「ああ。でもどうして俺達のことを助けてくれたんだ。俺は泥棒なのに。」

「泥棒って言っても従姉妹の苺鈴を助けるために俺の羅針盤を盗もうとしてくれてたんですよね。」

「それは、そうだけ。あれ、お前のだったのか？」

「はい、実はあいつの家に忘れてきちゃったんですよ……。」

「なんだ納得。それより、お前はおいらの姿が見えるのか？魔法使いだから？」

「まあ、そんなところだよ。それより苺鈴を助けるために羅針盤を奪うってどういうことですか？それに家に代々伝わるこれの美しさを頂くってどういう意味ですか？」

「まあ、話せば長くなることだけど、まずはお互いにお互いの素性を話したほうが解決するぜ。」

「そうだな。オイラ、アクセス。黒天使のアクセス・タイム。コイツは相棒かつ理解者の名古屋稚空様だ。」

「『様』は取ってくれ……。」

「俺はこの家の長男の李小狼です。魔法使いクロウ・リードの遠縁です。」

「クロウ・リード？思い出した、昔悪魔と戦った大英雄だ。」

「アクセス、知ってるのか。」

「まあな。オイラその人の大ファンなんだ。そういえば、クロウ・リードってずっと前に死んだんだよな。」

「そういうことだ。クロウ・リードはイギリス人の父と中国人の母のハーフだから、西洋・東洋両方の魔法が使える凄い人なんだ。

でもその人が悪魔に関わってるなんて知らなかったよ。」

「オイラ、大感動の大感激だぜ。英雄の親戚さんに会えるなんて、仕事が終わって準天使になったら、お前のサイン貰っちゃおうかな

。」「
アクセスは小狼の部屋をくると回り始めた。

「おいおい……。」

「そういえば、その人はかなりの個性豊かで個性的なカード・クロウ・カードを作ったな。」

「まあ、そういうことだ。」「アクセスの言うとおり。クロウ・カードにだって個性とかはあるぞ。」

「そういえば、そのクロウ・カードとか云うカードは今何処にあるんだ？」

「（ため息をついて）木之本が持つてるよ。」

「木之本？あの木之本桜っていうチビが？」

「そうですね。何故かあいつの家の地下室の本棚にあったんですよ。阿野バカは封印を解いた上にカードをあちこちに散らばせましたよ。俺はクロウ一族の1人だからそれを集めに香港から友枝町にやってきたんですけど、カードは全部あいつの手に渡ったんですよ。」

「そういえば、阿野魔法に掛かった時に何か強い気配を感じたんだ。あれがクロウ・カードの気配だったんだ。」

「全く、とんでもないことになったぜ。早くあの餓鬼からカードを取り上げないと。」

「無理ですよ。カード全てにあいつの名前が書いてありますよ。」

カードに名前が書かれると書いた人の言うことだけを聞くようになってるんですよ。」

「あらま……。」

「つまりカードの新しい保持者及び守護獣のケルベロスと守護者の月の新しい主はあいつになったんですよ。」

「そういえば、ケルベロスと月はクロウが作り出した精霊だったな。阿野人が死ぬ前にクロウ・カードのケースの本の表と裏の表紙に封印されたんだってな。今は、封印が解かれて阿野子を主にしているんだな。」

「それですか。あの餓鬼の傍に狼みたいな獣やろつと銀髪キザがいるのは。」

「ところで、アクセスは今どんな仕事をしているんだ。」

「仕事？うゝゝん、実はさ……。」

アクセスは天使の中でもかなりの好奇心旺盛で人間界の世界に憧れています。ある日、アクセスはフィンと一緒に人間界に行こうとしました。

「フィンちゃ　ん！」

「（アクセスに振り向く）アクセス、着いてきちゃダメよゝゝ。」

（背を向けて）神様の大切な用事なんだから。」

アクセスはつまらなそうに口を尖らせました。

「ちええ。オイラだって人間界に……。」

その時、フィンの前にブラック・ホールのようなものが出現してフィンを捕えました。

「フィンちゃー！ーん！」

「アクセス！ー！助けて！ー！ー！」

「フィンちゃー！ーん！」

フィンはブラック・ホールに連れ去られました。アクセスは哀しそうに見守りました。

「フィンちゃんは魔王に襲われて洗脳されて墮天使フィンになっちゃったんだ。」

フィンはブラック・ホールの中で黒い衣装を纏った緑の長髪の白い羽の人間サイズの女性になりました。

「魔王様……。信じられるのは魔王様の御心だけ……。」

後に元のサイズの準天使になりました。

ブラック・ホールの中から準天使のフィンが気絶した状態で人間界に落ちていきました。

「フィンちゃん……。」「魔王は墮天使フィンを再び準天使に戻したんだ。まろんに警戒されずに近づけるために。だから、今のフィンちゃんは天使の心を持つてるんだ。」

「フィンって、あの緑の髪の女の子か？そういえばあいつから嫌な気配を感じたんだ。苺鈴の部屋に入った時から。」

「フィンの気配も感じていたのか？姿や心は隠せても気配までは隠せなかったな。」

「ええ。」

「おいら、フィンちゃんのことを急いで神様に報告した！」

「神様はオイラにまろんを守るように命令したんだ。それで人間界に来ただけだ。そうしたらいいのか全く判らなかつた……。」
アクセスはまろんを探すために人間界に降りたものの降りたところは批栢町でした。その時に知り合ったのが稚空だったので。稚空はアクセスが見えるから片手で捕まえました。稚空には珍しい生物ですから。

「なんだ、変な生き物だな？」

「放せ！放せつたらー！（じたばた）」

「お前、話が出るのか？」

「オイラの姿が見えるのか？（落ち着いた目）」

「当たり前じゃないか。見えなかつたら捕まえたりするものか。」

「その時、ビビーって感じたんだ。コイツならオイラを手助けしてくれるに違いないって。」

「それで事情を説明して協力してくれるように頼んだんだ。」

「その時の映画の看板を見て、『シンドバッド』って怪盗名にしたのか。」

「稚空には悪魔をチェック・メイトする力を与えてるんだ。」

「フィンや悪魔との接触を絶つために俺は怪盗シンドバッドにな

ってジャンヌの邪魔をしてるん……だけど……。全くとんでもない邪魔者が入ったぜ。」

「それで、その悪魔は美術品に取り付いて人間の綺麗な心を奪おうとしてるんですね。」

「そういうことだ。だから羅針盤に取り付いている悪魔を封印しようとしてるんだ。」

「でも、実際に小狼君が操られてなくてよかったよ。」

「そういう問題じゃないだろう。」

お前の従姉妹が元に戻ったことは既に封印されていたのか。」

「でも、羅針盤は無事ですよ。」

「確かに。そういえばこの羅針盤は家に代々伝わるものだって云ってたっけ？」

「ああ、これはクロウ・カードを探すアイテムだから持ち主が何処にいるか判りますよ。」

でも、ジャンヌは羅針盤の何を封印したんだろう。」

試しに小狼は羅針盤を手に追跡術を行おうとしましたが無反応です。

「魔力を封印されたのか。」

「ジャンヌが予告状を出さないわけだ……。」

3人はため息を着きました。

「とにかく、これ以上あの餓鬼に邪魔されるわけには行かない。

早いところ悪魔を封印しないと魔王の力が強くなり、世界が闇に覆われしまう。そうなれば、お前の大切なものまで消えてしまうぞ。」

「それは嫌です。だったらクロウ一族として俺も協力します。稚空さんお手伝いさせてください！」

「よし判った。」

2人は握手を交わしました。こうして名古屋稚空ことシンドバッドは二人目のパートナーを手に入れました。

その時、警察が駆け込んできました。シンドバッドは素早く稚空に戻りました。

「シンドバッドは何処!?」

「いえ、知りません……。 (首を左右に振る) 警察は部屋の前を去りました。」

外ではまるん達が話をしています。

「あああ、シンドバッドとアクセスが逃げちゃった。」

「阿野風、一体なんだったの?」

「判らないわ。とにかく私もイギリスに帰って悪魔に関する情報を集めるわ。」

「だったら、私の悪魔とクロウ・リードに関する情報を香港で集める。ついでだから魔法の勉強でもしておく。」

窓際で稚空・アクセス・小狼がずっとこけます。

「だって、私の魔力が今日たった今目覚めたんですもの。いろいろな魔法を身につけて、貴方達のサポートをするわ!」

「頑張ってるね。苺鈴ちゃん。」

「うん。」

「苺鈴のやつ、なんで魔力に目覚めたんだ。しかもこの日に。」

「さあな。とにかく、俺はホテルに帰る。」

「オイラも……。」

「「じゃあな……。」」

「さようなら……。」

2人はまるんたちの所に行きました。

「あれ、稚空?」

「……じゃないだろう。また、こんなやつと。」

「いいじゃない。私達も一緒だから、ね?」

観月先生に笑顔を前に地空はそっぽ向きました。

「あああ、照れてる　！」
「煩い！」

まろんと稚空の言い争いは桃矢が来るまで続いています。さくらたちはその様子を見て笑っています。

< なお、さくらと雪兎は仲良く並んでいますから。小狼に睨まれていることには気づいていません >

< 勿論桃矢を見たときにも睨んでいました。 >

その時、苺鈴が彼の部屋に入ってきました。

「ニイハオ。小狼。」

「苺鈴。」

「あら、小狼如何したの？御凸に擦り傷があるわ。」

確かに小狼の額に擦り傷があります。多分、苺鈴の衝撃波を額で受け止めたからです。

「いいよ。こんなの。」

「ダメよ。私折角、魔法が使えるようになったから、癒してあげるわ。第一小狼は治癒魔法は使えないでしょう。」

「だからって……。」

「ダメ！」

あら、水がついてる。これはいいわ。」

「これは汗だ。」

「どっちでもいいじゃない。」

小狼と揉み合う苺鈴は額の汗に左手の人差し指をつけて呪文を唱えます。

「水脩将来。」

先ほどより淡い光で小狼の擦り傷を癒しました。

「ほら、治った。（部屋中をクルクル回る）」

「おい、苺鈴。」

「そうだ、偉い？」

「下にいるよ……。」

「偉がいる間に魔法を覚えてもらおうと偉
母鈴は下に降りて小狼も後を追うように下に降りました。」

パート3 治癒魔法（後書き）

次回はさくらちゃんが星の杖でクロウカードが使いこなせなくなっ
てしまいます。

彼女は、シンドバッドにどうも敵視されています。

さくらカード編には観月先生はイギリスに帰ってしまいます。そし
て、莓鈴ちゃんはクロウカードの真実を中編で知ることになります。
もう少しでフィンの別れが来ると思います。

前編さくら、敗れる（前書き）

今回はまるんちゃん、風邪を引いてしまう場面から始まります。ついでにいうと今年の夏祭りはケロちゃんも同行します。

今回は李家の執事の偉さんも登場させておきたいと思えます。ちなみにこの話は25話と26話の間の話です。

前編さくら、敗れる

1999年8月11日

さくらちゃんは夏風邪を引いてしまいケロちゃんに看病してもらってます。さくらちゃんはとても元気な女の子ですが、玉に風邪を引いてしまいます。

「大丈夫かいな、さくら？」

「ありがとう。ケロちゃん。ごほつごほつ。」

「幸い、クロウカード探しを終えたところやし、悪魔はこのところ全然出てこうへんし、静やわ。」

「本当だね。苺鈴ちゃんも今、魔法の勉強に励んでいるし。」

「しかし、あの小生意気な小娘に魔力があつたなんて信じられへんわ。」

「でも、ちゃんとフィンちゃんが見えていたんだもん。」

「うーん、せやけどな。あいつはまだまだ未熟やし。治癒系の魔法しか使われへんわ。」

その時、さくらの窓ガラスを御菓子の箱を持ったフィンが叩いています。

「ほいほい。ちよつとまつとり。」

ケロちゃんは窓を開けました。フィンには疲れきった表情でさくらの部屋に入りました。彼女にはお菓子が入った箱が持たれています。

「はひひひ、重かった。」

「大丈夫か。フィン。」

「平気平気。」

全くまるんたら人使い荒いんだから。いくら部活だからってフィンにこんな重いもの持たせなくてもいいでしょう。」

「ありがとう。フィンちゃん。」

「いいのよ。それより、まるんの手作りのマドレーヌ食べる。」

「うん。」

箱の中は数個のマドレーヌが入っています。3人はまるんの手作りマドレーヌを食べました。

「おいしいね。このマドレーヌ。」

「ええ。そういえば、此処に来る途中で電柱に張ってあったポスター見たけど、神社で阿野巫女さんに聞いた話だと明日の夜に月峰神社でお祭りがあるらしいのよ。なんでも巫女の先生が……。」

「観月先生。」

「そうそう。その観月先生がもうすぐイギリスに行っちゃうんですって。」

「そうか、あの姉ちゃんはイギリスからクロウの用事で態々友枝町に来たんか。それにさくらの算数の先生の産休もそろそろ終わる頃やし。」

「だから、その思い出に祭りに行こうってその観月先生が言ったのよ。」

「明日か。それやったらさくらの風邪も治ってる頃や。さくら、元気になったら、お祭りに行こうや。」

「ダメ。今年もケロちゃんは留守番。」

その時、部屋のノックが聞こえました。

「さくらさくさん。」

「はい　　！ちょっと待って　　！」「2人とも机の引き出しに隠れて！」

「「おう（判った）……。」」

ケロちゃんとフィンが机の左の一番下の引き出しに隠れました。因みに此処はケロちゃん部屋の部屋になっている。

「アンタ、いつも此処で寝てるの？」

「そういうこっちゃ。」

入ってきたのはお父さんの藤隆パパです。

「具合はどうですか？」

「大丈夫。もういいみたい。」

その時、”さくらちゃん”と聞き覚えのある声がしました。声の主はドアから顔を出した雪兎です。

「ああ、雪兎さん・・・と李・・・くん。」

雪兎の傍らで不機嫌オーラを発している小狼がいます。

「この2人はさくらさんのお見舞いに来てくれたんだ・・・。」

「因みに李さんとさつき門の前でばったりあったんだ。」

「ほえ・・・そうなの？」

なんかさくらは気まずい雰囲気です。

それはフィンでも同じです。月（雪兎の2つ目の人格）の時はともかく小狼は悪魔や自分のことは知らされていないから出ることは出来ません。

暫くして藤隆。パパは”じゃあ、ごゆっくり”と退散して地下室の書齋に向かいました。

パパが消えた後は雪兎は月にケロちゃんは机の引き出しから出てきてケルベロスになりました。幸い羽が大きかったからフィンはこっそりと部屋の窓から抜け出せたのでした。

「じゃあね。さくらちゃん。」

「またね。フィンちゃん。」

フィンはまるんのマンションに帰りました。

その頃小狼がさくらたちと話をしている時に、小狼のフードからアクセスが飛び出しました。小狼は香港での1件でシンドバッドと名古屋稚空とクロウ・リードのファンの黒天使アクセスと出会い、互いに事情を知りジャンヌの怪盗の妨害を手伝うことになりました。ただ、まるん及びさくら達にはこのことを秘密にしています。まるんが真実を知れば簡単に傷つき、さくら達に話せばまるんに話して

しまう恐れがあるからです。

アクセスはさくらの封印の鍵を探しています。封印の杖は普段はさくらのペンダントの鍵になっていることを小狼に聞いていたからです。

「全く、これ以上悪魔が出てきた時に阿野子の魔法でジャンヌの手助けされちゃ困るぜ。早く、ジャンヌに怪盗を辞めてもらわないとおっかないことが起きるぜ。ああ、それにしても更に邪魔が増えちまったぜ。あの中国少女とか巫女さんとか、これは厄介だぜ。」

（さくらの真ん中の大きな引き出しを探って）、お、あった。これが小狼の言っていた鍵か？」

さくらの鍵は前の鍵と少し違っています。先端は鳥の顔のような形をしていたのですが、今は中央に星の入った輪の形をしています。

「よし、このままこっちで預かるうと・・・。」

アクセスは鍵をもって稚空の部屋に行こうとしましたが・・・ふと面白いことを思い浮かべました。

「待てよ。そうだ、カードの魔法が効かなくなるようにしておくうと。」

アクセスは杖に聖力を入れて鍵を机の引き出しにしまって小狼のフードに戻り、さくらに謝罪するかのようにウィンクしました。

「へへへ・・・。ごめんよ、さくらちゃん。」

その頃、まるんは部活を済ませてオルレアンに帰ってきました。

「只今。」

「お帰りまるん。」

あのね・・・。」

「ダメよ。」

まるんはきぱりと答えるとフィンはずっこけてしまいます。

「まだ、何も言っていないいいい！」

まるんは制服から胸元の谷間が目立つ仙女のようなドレスに着替えながら文句をいいました。

「どうせ、また怪盗の仕事でしょう。」

「そうじゃないいい！例の観月先生がもうすぐイギリスに帰っちゃうのよー！」

「イギリスに？そいえば、イギリスに帰って悪魔に関する情報を集めるって言うってたわね。」

「そうなのよ。」

明日の夜その思い出として実家の月峰神社でお祭りをするんだって。

「月峰神社って、確か友枝町にある神社でしょう。」

「そうだよ。まるん、明日友枝町のお祭りにいこうよ。」

「そうね、明後日の夜は桃栗町の広場で夏祭りをやるから、行きましようか。ついでにさくらちゃん達を誘ってあげなくちゃ。」

「互いに互いの町でお祭りを楽しむんだね。判った。」

フィンはまるんの携帯電話（知世に貰った）でさくらに電話しました。

まるんはさくらの元気な声を聞いて微笑んでいます。

翌日。さくらの風邪も治り、さくらは夕ご飯（献立は冷麦）の材料を買いに商店街に出かけました。

「今日は観月先生の神社でお祭り。そして明日は桃栗町の広場で夏祭り。なんかはにゃんの連続だよ〜〜〜。」

後は悪魔が来ないことを祈るだけだね。」

さくらはいつものようにローラーブレードを走らせて商店街に行きました。

さくらはスーパーで麺つゆと卵2パックを買いました。麺類といえば大抵は卵です。さくらは買い物リストを見て確認しました。

「えーっと、卵2パックは買ったし、麺つゆは買った。後は・・・。」

その時、聞き覚えのある女性の声がありました。

「さくらちゃん、こんにちわ。」

「観月先生。こんにちわ。」

「風邪は治ったのね。あら、買い物してるの？」

「はい、今夜は冷麦なんです。よかつたら神社によってもいいですか。」

「ええ、いいでしょう。さくらちゃんは家に来たことがなかったものね。」

さくらは観月先生の家へ寄ることにしました。

さくらは観月先生の神社の拝殿に招いてもらいました。さくらは神社に何度も行ったことはありますが、中に入ったことはありませんでした。中はどうなっているかは判りませんでした。特に迷^{メイスイ}の時は中に入ったことはありませんが、わからなかったのです。

「此処が観月先生の神社の拝殿ですか。これならクロウさんと連絡が取れますね。」

「まあ。ふふふ。」

さて、今回の悪魔の情報をキャッチしなくちゃ。」

「ほえ？」

観月先生は片手に鈴と扇を持って舞を舞いました。拝殿の神棚には鏡があり、鏡からは不気味な影が笑っています。舞を終えた先生はくるりとさくらに向き直りました。

「判ったわ。悪魔の今回の狙いは家に代々伝わる家宝だわ。」

「家宝？」

「そうよ。悪魔はクロウ・リードに恨みを持っているのよ。」

「クロウさんが？」

友枝町に行く準備を整えたまるんは浴衣を着て都と水無月委員長・稚空を誘って電車で友枝町に行こうとすると、携帯電話がかかりました。

「はいはいはいはい。」

まろんは急いで電話に出ました。

「はい。こちらまろん。如何したの？さくらちゃん。風邪は治ったの？そうよかった。」

「・・・悪魔とクロウさんの関係が判った？」

はいそうなんです。

さくらは自分の部屋から携帯にかけました。

「観月先生とケロちゃんの情報によるとクロウさんとケロちゃんと月さんは昔悪魔と戦っていたんです。」

クロウさんとケロちゃん達が悪魔と？

「せや、今やっと思いついたとこなんや。昔悪魔が地上に現れたときにワイらは悪魔を封印したんや。しかし、その悪魔はワイらに復讐するためにクロウに近い強い魔力の持ち主を操ってクロウに関わる魔術師と・・・。」

・・・戦わせようとしてるんや。

「そんな。」

しかも今度の狙いは月峰神社の家宝なんです。

「それって、魔法道具の1つ？」

いえ、そうとは限りません。李君の羅針盤のように。

「ということは次に狙われるのは先生じゃない？」

「それって、尚更封印しないといけないじゃない。」

まろんの近くにいたフィンは黙って聞いていました。

「判った。なんとか隙を見て誤魔化して封印するわ。」

その時、玄関の呼び鈴が鳴りました。鳴らしたのは。

「日下部さん！」

水無月委員長でした。

「はーいいい！」

それじゃ、月峰神社で落ち合いましょう。」

はい。

まるんは電話を切って玄関を出ました。

玄関の外では浴衣姿の委員長・都・稚空の3名が出迎えています。
「お待たせ。」

「何やってたんですか？遅いですよ。（膨れ面）」
「ごめんなさい。」

「珍しいわね。委員長が怒るなんて。」
「そんなことより、いつもよりちょっと遅かったぞ。まさか、例
のチビ輔と電話してたんじゃないだろうな。」

「（ギクツ！）そ、そんなことはないわよ。浴衣の着付けに手間
取っただけよ。」

「ああ、言えば手伝ってやるのによ〜〜。」
稚空のからかい言葉に怒ったまるんは稚空の片足を踏みつけまし
た。

「イテ
！」
稚空は踏まれた足をおさえてピョンピョンと跳ね上がりました。

「変態。」

「まるん……。」

「こんなのほつといて友枝町に行きましょう。」
まるん達は電車に乗って友枝町に向かいました。

日暮れになり、月峰神社に明かりが灯りました。さくら・知世・
雪兎・桃矢（とさくらの着物の袖に隠れているケロちゃん）は月峰
神社に集合しました。

「お兄ちゃん、よかったね。今日は観月先生のデートなんですよ
っ？」

「どこでそんな言葉覚えてきたんだ。マセっ子。」

「それに。李君いないんだから。」

「そういう問題じゃないだろう。」

「今からでも先生に会いに行く？」

「話を進めるな。
つたく雪まで。」

桃矢は中学3年生の時に観月先生に数学を教えてもらったことがあります。だから、月峰神社に時々行っているのです。特にお祭りや大晦日やお正月に先生に会っています。

「全く、歌帆のやつ、最後の思い出としてお祭りなんてどういうことだ。」

今年のお祭りは友枝小学校の生徒とその保護者がいっぱい逸れてしまいそうです。

神社に到着したまるん達はもう吃驚仰天です。

「なんか、人が多いな。」

「特に子供が多いです。」

「みんな観月先生に世話になったから最後の思い出にお祭りに来たかったのよ。」

「そうか、観月先生は友枝小の算数の受け持ちの先生が産休だったから、みんなも阿野人に世話になったんだ。」

「その先生の産休も終わったから、もうすぐイギリスに行ってしまうんですか？ねえ、みんなでその観月っていう人に会ってみませんか？」

「委員長は観月先生に会ったことがなかったんだ。どうする、まるん？」

「いいじゃない。委員長も先生がどんな人か知りたいんだから。」

「言っておくけど、俺は反対だぞ。あんなおつとりに二度と会いたくないぞ。」

稚空は香港旅行の時に彼女に縛られたことがあったために顔を見ただけで腹が立ちます。

「阿野人に意識してるんだ。」

「煩い。そもそもなんで俺が此処に来なければいけないんだよ。」

「いいじゃない。小狼君とは大の仲良しなんですよ。」

「まあ、確かに。」

「あれ、阿野子？」

委員長が指を指すと紳士風の服を来たおじいさんと一緒にお祭りに来た男の子がいます。

「小狼だ。」

「あれ、ほんとだ。この間シンドバッドに誘拐された少年だ。」

「誘拐してねえよ……。」

「ええ！シンドバッドが香港に出現したんですか！？」

「そういうことよ。」

「阿野子大丈夫かな？」

まるんは人ごみの中に入ろうとします。都たちも後を追おうとしましたが稚空だけはうまく歩けません。

「大丈夫ですか？名古屋くん。」

「大丈夫だ。」
「へくそう。まるんの奴、思い切り足を踏みつけやがって。」

まるんは人ごみの中に入って小狼を探そうとしましたが、小狼の姿は見当たりません。

「もう何処にいるのかしら？」

まるんの着物の袖の中からフィンが顔を出しました。

「その子は、もう御爺さんと一緒にお祭りの楽しんでいるのだと思っわ。」

「そうかなあ。」

「それより、今は悪魔の封印することだけを考えないといけないわ。」

「判った。でも、その前にさくらちゃん達と合流しなきゃ。」

まるんは小狼からさくらを探しに行きました。その様子を黒天使のアクセスが見ています。

「また、この町に悪魔が出現したのかよ。でも、もう今までみたにいかないからな。」

ウシシ。」

さくらと知世は観月先生を探しています。観月先生の案内で悪魔を封印することになりました。ただ、どうやって桃矢を誤魔化すのが問題です。

そこでさくらは何かアイデアを閃きました。

一方桃矢と雪兎は。

「雪、今日はどれが食いたいんだ？」

「うゝゝゝん、どれにしようか迷っちゃうよゝゝゝ。」

「迷うなよ……。」

その時、2人の背後から巫女姿の観月先生の声がしました。

「あら、桃矢に月城くん。」

「（振り向いて）歌帆（観月先生）。」「」

「こんばんわ。2人とも元気そうね。」

「まあな。」

その時、さくらが前方からひよっこり姿を表しました。

「お兄ちゃん。」

びつくりした桃矢は腰を抜かしてしまいました。

「なんだよ、さくら！？（ゼーゼー）」

「あら、こんばんわ。木之元さん。」

「こんばんわ。観月先生。（はにゃん）」

幸せなさくらに桃矢は割り込むなり、さくらを背後から仁王立ちして睨み付けました。

「なんの用だ？」

「あ、そうだった。お兄ちゃんにお願いがあるの？」

さくらちゃんは桃矢御兄ちゃんを射的場まで連行しました。

射的場では偉さんの付き添いで射的をしています。

「小狼様、慌てずに落ち着いてよく標的を睨みつけて撃つので

すよ。」

「有難う。」

小狼は偉さんの言うとおりにして銃口を狐のぬいぐるみに向けて撃とうとしたその時に、さくら達が姿を表しました。

「ねえねえ、御兄ちゃん、あの又イグルミ欲しい。」

あの又イグルミとは猫の又イグルミです。

「あれか？」

「そうだよ。」

「判ったよ。その代わりに、俺の写生の宿題のモデルになれよ。」

「例えば、さくらちゃんの又ードとか？」

「（赤面）ちがわい。」

2人の会話に台に頭を打ち付ける小狼でした。

「あれ、李君と偉さん。」

「おや、さくらさん。知世さん達までお揃いで。」

「こんばんわ。今年は李君は保護者連れですか？」

「まあな。」

「凄いな。それで、今何回目？」

「まだ、1回です。」

「何を狙っているの？」

「狐の又イグルミです。」

「アレか？なんか僕にはぴったりだな。」

雪兎の言葉にムキになった小狼は改めて銃口を狐に向けます。小狼に気付いた桃矢も負けてはいられません。すぐさま銃口を猫に向けます。

またしても2人のバトルは始まりました。

さくらの着物の袖の中から声がしました。

「こら、長引きそうやで・・・。」

「ホントだよ。って・・・!？」

なんとケルベロスがさくらの着物の袖に入っていました。

「（着物の袖を確認して）ケロちゃん、何してるのよ!？エッチ

！」

「誰がエツチャ！？失敬やなあ！」

「（面白そうに割り込んで）さくらちゃん肌心地はいかがでしたか？」

「滑り台がしたいほどすべすべしとつたわ。」

「知世ちゃ　ん！」

さくらちゃん達の漫才に観月先生が割り込む。

「まあまあ。今のうちに拝殿に向かいましょう。」

「「はい（おう）。」「」

「（雪兔に向き直って）月城くん。ちょっといいかしら？」

「はい。」

一行は桃矢と小狼が戦っている間に拝殿に向かいました。途中でまろんを探している左足を彼女に踏まれて捻挫してしまった稚空に肩を貸している都と水無月委員長と遭遇するもさくら達は大慌てのために横切ったために都と委員長は体制を立て直し踏みとどまるも稚空は派手に転んでしまい手を地面についたために左手まで捻挫してしまいました。

「イテ　。」

「大丈夫ですか？名古屋くん。」

「全くなんなのかしら？阿野子達は？」

まろんはさくらを探すためにとりあえず、拝殿まで来ました。するとちょうどさくら達が到着しました。雪兔はすぐに月に変身してケロちゃんはケルベロスに変身しました。

「お待たせしました。」

「ジャスト、8時！」

「それじゃあ、行動開始！」

フィンハ聖なる力をロザリオに注ぎました。

その時、拝殿の置くの鏡から黒いオーラを発して提灯を次々に壊していきました。

「何、これ!？」

「悪魔が行動を取ったのよ!」

「大変、早く封印しないと!」

ジャンヌ・ダルクよ。力を貸して。」

まるんはジャンヌに変身しました。

「強気に本気。無敵に素敵。元気に勇氣。」

さくらは杖を取り出して灯のカードを掲げます。

「灯!」

灯の精霊は淡い光を出して屋台中を照らします。

「これでよし。」

「さくら、ジャンヌ。念の為にワイと月で邪魔者から拝殿を守つとるさかい。」

「悪魔の封印を。」

「はい。」

「参りましょう。」

ビデオを持った知世はさくら達と拝殿に入りました。

店中では一応灯で町は明るくなったもの。

「なに、これ?」

「この時期雪ですか?」

「それにしても光ってるわ。でもキミ悪いわ。あれ、なにか落ちて
ている。」

都は拾ってみると。

『予告状

今宵8時に月峰神社に代々伝わる鏡の美しさを頂に上がります。

怪盗ジャンヌ』

「怪盗ジャンヌの挑戦状ですね!それでは捕獲に参りましょう!
東大寺さんは一応警察に知らせてくださいね!では、行きます!」

委員長は猛スピードで神社に向かいました。
灯は本来は幻想的なカードですが、今回に限って嫌な感じがします。

「ほんともう。あれ、稚空は？」
都の傍らには稚空の姿は見えません。

射的場で桃矢は小狼と射的で交戦中です。その時淡い光が現れました。桃矢はそれを手にとつて。

「さくらか……。それにしても今回は偉く不気味だな……。」「あれ、灯だ。それにしてもあまり人を幸せにする気分じゃないな。」

屋台中では灯の光景で人々の気持ちが嫌になっているのです。

月とケルベロスは拝殿の前で見張りをしています。

さくら達は拝殿に入りこめました。

「これがその鏡ですね？」

ジャン又はプティクレアの反応を伺います。

「すごい反応ね。これは封印しないといけないわね。」

「ええ。」

その時、鏡から悪魔が出現して観月先生に襲い掛かってきます。ジャン又は前に立つとピンを構えます。

「神の名の元に、闇より生まれし悪しき者を、此処に封印せん！
チエック・メイト！」

ピンを鏡に向かって投げつけます。ピンは鏡に刺さりチエス駒になりリバンド・ボールで駒を引き寄せました。

「回収完了！」

「やりましたわ！」

「今回は意外と早く片付きましたね。」

「ええ！」

「さすがジャンヌ！」

その時、外から月たちの悲鳴が聞こえました。

「ケロちゃん！月さん！」

さくらは外に飛び出しました。

外に出ると怪盗シンドバッドがいてケロちゃんと雪兎さんが横たわっています。

「変身が解けている……。」

「あつけない奴等だな……。」

シンドバッドがさくらを睨み付けました。

「シンドバッド！ケロちゃん達に何をしたの！」

「ちよつと、眠らせてやっただけだ。」

「許さない！」

ウオーテイ

さくらは水のカードを取り出して呪文を唱えようとしますがそれより先にシンドバッドがカードのようなものを取り出してさくらに投げつけました。カードはさくらの溝に辺り気を失いました。

「……さくらちゃん！」「……」

ジャンヌたちは彼女に駆け寄りうとしました。賺さずシンドバッドが入りました。

「へへへ。さくらちゃんには悪いけど、これで邪魔はされないな。」

「あのグロウってカードは俺がブーメランをぶつけた時にすぐにカードに戻っちったけどな。えつと、鏡は……。あれ、ないや。」

「既に封印されたぜ。」

「だよな。いてて……。今日は左手足を捻挫しちまったからな。」

シンドバッドは戸を閉めます。

そこへ委員長がやってきました。

「日下部さん！」

「委員長どうしたの？」

「どうしたもこうしたもありませんよ！またジャンヌからの予告状が来たんですよ！」

いつの間にかまるんの後に稚空がいます。

「ジャンヌならもう逃げたよ。」

「名古屋くん！何時の間に！」

それより、手足怪我してるんですからあまり動かないでくださいよー！」

「別にいいだろう。」

「よくないわよ。それより如何するのよ！？この子達！」

まるんの膝にはさくらで観月先生の腕に雪兎がいます。

「あれ、そういえばどうしてこの子たちがいるでしょうか？」

「判らない。委員長手伝ってくれないかしら。」

「はい。喜んでお手伝いします。」

「ありがとうございます。委員長。」

「いやあ。」ふよかった。この人の役に立てて。」

まるんと委員長は到着した警察と一緒にさくら達を自宅まで送り届けました。因みにケロちゃんは知世ちゃんの家で預けられることになりました。

「全く、何をやってんだ。さくらは。」

「どうやら、さくらちゃんに大変なことが起きたみたいなの？」

「そういうことだ。」

「さくらちゃんの力が弱くなったみたいなの。」

「なんだって。誰だよ、こんな真似しやがったのは？」

「例の怪盗のシンドバッドよ。」

「あいつか、そういえば何か引っかけることがあるんだ。」

香港旅行の時に桃矢は商店街でシンドバッドを見かけたようです。それとさつきは屋台からシンドバッドを見かけたのです。

そのシンドバッドの肩に黒い生き物が付いています。

「あいつの傍に黒い翼の小人みたいな坊主がついているんだ。そうだ、阿野稚空ってやつにもそれと似たような奴がいたんだ。」

桃矢は飛行機の中や屋台の近くで稚空とそれと同じ黒い生き物を見かけました。

「どうやら彼はある悪人の手下に利用されたそうよ。」

「あの黒い奴か。くそ。」

桃矢は猫のヌイグルミを抱きしめています。ようやく射的で当たったのでしょうか。

その様子を狐のヌイグルミを持った小狼が遠くから睨んでいます。これもようやく射的で当たったものでしょうか。

「知らないくせに……。」

稚空は執事の偉さんに魔法で傷を治してもらっています。

「すいません。偉さん。」

「何の此れしき。いつも小狼様がお世話になっておられます。」

「大丈夫ですか？」

「まあな。これで阿野チビもクロウ・カードが使いこなせなくなっただよっだ。」

「阿野子には悪いけど、これはフィンちゃんやまるんの為だからな。」

小狼達はその光景を見届けていました。

前編さくら、敗れる（後書き）

ジャンヌは無事に悪魔を封印したものの、さくらちゃんはクロウカードを使いこなせなくなり、シンドバッドに敗れてしまいました。さらにケロちゃんと月さんまで敗れてしまいました。さて次回は桃栗町の夏祭り編に入ります。

後編友情（前書き）

さくらちゃんはアクセスによってクrouカードのコントロールを失い、シンドバッドにケロちゃんたち共々敗北してしまいました。

疲れを取り戻したさくらちゃんたちは桃栗町のお祭りに向かいました。

さくらちゃんたちの友情がさらに深まります。

後編友情

1999年8月12日

その晩小狼は雪兎の家に先回りしました。同時に雪兎を乗せた警察の車が立ち止まりました。パトカーから降りた東大寺刑事は。

「あれ、如何した？親と逸れてしまったのか？」

「（首を振って）いいえ。その人に渡しておきたいものがあるんです。」

小狼はオズオズと射的場で当たった狐をヌイグルミを刑事にだしました。

「なんだ？これを阿野人に渡してもらいたいのか？」

「（こくこく）。直接渡すわけには行きませんから。」

「（？）と思いつつ）判った・・・。」

小狼は”お願いします”と言うようにお辞儀をすると猛スピードで帰宅しました。

一方さくらは警察に送り届けられて自宅の自室で静養を取りました。まろんはさくらのことが心配なものでフィンにさくらの傍にいるように奨めたのです。何しろ、ケロちゃんは知世の家で預けられることになったのですから。当然フィンは渋々ながらさくらの様子を見に行きました。

当のさくらはベッドの上でまだ横たわっています。そこに桃矢が景品の猫のヌイグルミを持って部屋に入ると枕元にそっと置きました。桃矢が部屋出た後、フィンが開きっぱなしの窓から入ってきました。

「さくらちゃん、どうしてるかな？」

フィンはさくらの寝顔を覗き込みました。さくらの顔は平和そうです。その顔を見てフィンはほっとしました。

勉強机の上にクロウカードを置きます。灯グロウと水のカードです。多分シンドバッドがさくらに投げつけたカードが灯グロウのクロウカードらしいのです。

「それにしてもあのさくらちゃん達が負けるなんてどうなってるのかしら?」

さくらちゃんは朝まで眠り続けるのでしょうか?それとももう目覚めないのでしょうか?

翌日さくらちゃんはよじやく目を覚ましました。

「ウミユウ。よく寝た〜」。ほえ?」

さくらは目覚まし時計を見ると午前6時丁度です。

「あやや、今日は早起きだね。」

「ふあ。」

「ほえ、ケロちゃん?」

机の引き出しからあくびが聞こえます。引き出しから出るとケロちゃんではなくてフィンでした。

「あれ、フィンちゃん。」

「あらあ。(明るくなり)グッド・モーニング!さくらちゃん!」

「おはよう、フィンちゃん。」

「よかったあ。元気になって。まろんが心配になって私を超越したのよ!」

「ほえ、まろんさんが?」

フィンはさくらが寝ている間の出来事を話しました。

「そうだったの?」

「そうなのよ。一応クロウカードは私が回収しておいたけど、悪魔より強いさくらちゃん達がシンドバッドに負けるなんてどうもおかしいのよ!」

「確かにそうだよ。なんとなく思うけど灯グロウカードが効いてなかったよ。うな気がするのよ?」

さくらは着替えながらカードを本に戻しました。

「あれ？そういえばケロちゃんと雪兎さんは？」

「ケルベロスは知世ちゃんが預かってる。後雪兎さんは都ちゃんのお父さんがちゃんと自宅まで届けてくれたわ。」

「それを聞いて安心したよ。（枕元の又イグルミに気付く）ほえ？これ、私が頼んだ又イグルミだ。」

ほええ。本当に取ってきてくれてたんだあ。」

「妹思いのいい御兄ちゃんね。」

「あれ、いけないそろそろ朝ごはんの支度しなきゃ。フィンちゃん、待っててね。」

さくらは1階に駆け下りました。

「（さくらを見送る）元気になってよかった。」

それにしてもどうして、カードが聞かなくなったのかしら。ひよっとして風邪がまだ完全に治りきっていなかったかしら？そうよ、きつとそうよ。さくらちゃんが元気になればまたカードが効くのよ。」

（頷くフィン）

その様子を黒い服を着た男の子を乗せた蝶の羽を生やした黒豹と同じく蝶の羽を生やした人間が見ています。

夕方、さくらは昨日と違う浴衣を身につけて、観月先生・知世と一緒に桃栗町の広場でやっている夏祭りに来ました。フィンは体力を回復させたケルベロスと月と悪魔の情報を探しています。

「はにやにやんにやんにや〜ん。今日はまるんさんと観月先生とお祭りに行けるなんて幸せ。」

「よかったですわ。さくらちゃんが完全に元気になられて。」

「本当に心配したのよ。さくらちゃん、このまま目覚めないかも shouldn't と思ったわ。」

「ありがとございます。フィンちゃんを寄越してくださって。」

「いいのよ。さくらちゃんが元気でほっとしたわ。」

「でも、いいの。李君呼ばなくて。」

「呼んだら、悪魔が出た時に李君を巻き込みますから。」

「そのほうがいいですね。クロウ・リードさんが悪魔に操られたという証拠もないのに話すと帰って親戚同士の戦いになるのが目に見えてますわ。」

「そうだね。」

「よし、今回はさくらちゃんが元気になった記念に屋台を見回るぞ！」

「「「オー！」」」

さくらとまるん一行は屋台を見回り捲りました。

時計台からフィンたちが覗いています。

「こないな綺麗な町に綺麗な心を持った人間がいるとはさすがに悪魔も綺麗な心を持つ人間に取り付くのに無理はないわな〜」。

「全くだ。この町はあまりにも美しすぎる。訪問者や移住者だって悪魔に取り付かれてしまふ。」

「例えば、稚空つちゆう怖い兄ちゃんとか。」

「あんた、香港旅行前日にさくらちゃんが稚空に怒られているところを見てたの？」

「まあな。昨日やって横切ったさくら達を睨んでたで。」

昨日稚空は転んだ後さくら達の後姿を睨んでいるところをケロちゃんは見てしまいました。

「あの兄ちゃんはほんま恐いで。」

「まあ、さくらちゃん達に対してはね。それより今はパトロールが先だよ。」

「せやな。アクセスやか×やかなんか知らんが悪魔が出てきたらあいつらに先に封印されてまうで。」

「ケルベロスの言うとおりだ。昨日は我々は彼と交戦時に・・・」

ケルベロスと月は昨日は月峰神社の拝殿の前で見張りをしていました。その時に、人々がザワザワとしていました。

「なんや？」

「なんか人がザワザワしているぞ。」

「どうやら灯のカードに多少問題があるのです。」

「灯グロウはそんなに威力は高くはないから人に危害は与えないから人々を幸せにするはずだが、なんだか今回に限って人を不幸にするはずがない。」

その時、拝殿の近くの木の陰にブーメランが通り過ぎました。木からカードが落ちました。同時に灯グロウの魔力が消えました。

「カードに戻った!？」

「あつけないやつだな。」

「誰や!」

木からカードを右手で拾ったシンドバッドとアクセスが表れました。

「シンドバッド!」

「アクセスもいまーす!」

「おい……。」

<アンタはドキンちゃんのもりか>

「何しにきたんや!鏡は渡さへんぞ!」

「だつたら腕うでずくでも……。」

シンドバッドは、月やケルベロスに立ち向かおうとするも手足をまるんによって捻挫させられたために自由に動かせません。

「なんや、今日は偉いあつけないな。」

「勝負ありだな。」

月とケルベロスは攻撃をしようしますが、上空から眠りの粉が降りかかりました。

「なんだ?眠スリープか……?」

「それにしてはその姿が見当たらへんで……。」

その時シンドバッドのブーメランが飛んできました。それが当たって彼等は気を失いました。

「全くアクセスは……。今度会ったら取っちめてやるんだから……！」

「どうやら2人はアクセスの出した眠りの粉でケルベロスたちを眠らせたのです。」

「なんでもかんでもアクセスかいな……。」

「当たり前でしょう！^{ターゲット}標的を手に入れるためなら、どんな手段だって選ばないんだもん！」

「フィンはアクセスに腹を立てています。」

「そういえば私もケルベロスもさくらも見たことがないのだが、シンドバッドも悪魔を封印する力を持っているのだろうか？」

「そうよ。」

「なんや月？何が言いたいん？」

「これは私の勘だがそのシンドバッドは本来は人間かもしれない。」

「せやから？」

「もしかしたら何か心の何処かに大きな弱みがあるらしい。」

「その弱みをアクセスに付け込まれたっちゆうことか？」

「（頷く月）」

「だとしたら許せないわ！とっ捕まえて、シンドバッドがどの男性なのか聞きだしてやるんだからあ！」

その様子をアクセスが見ていたのです。アクセスはこそそと逃げようとしてはますがフィンに見つかりました。

「こら、アクセス！早速見つけたわよ！」

3人はアクセスを囲みました。

「もう逃がさへんで！」

「観念しろ！もはやお前の逃げ場などない！」

「あわわわわ……。」

「シンドバッドって一体何者か今日こそ薄情させてもらっわよ！」

「シンドバッドってどうせまるん姉ちゃんみたいに元は人間なんやろっつ？」

「(ギク!)なんでそれを!」

「その反応はやっぱり知っているようだな? さあ、白状してもらおうか?」

詰め寄る3人にアクセスは浮上して3人は追いかけました。

アクセスとフィンたちの鬼ごっこが続く中。

「アクセスー! 一体何処にいんのよー!」

「出てこんかい!」

「お前のやっていることはすべてお見通しだー!」

3人は口々に叫ぶ中アクセスはある家の屋根の陰で震えています。そこにさわやかな花吹雪が舞い降りて3人はその光景に見とれます。その隙にアクセスは逃走しました。そして広場の屋台の陰で札を左手にお面で素顔を隠した式服姿の小狼と浴衣姿の稚空が微笑んでいます。アクセスは稚空の元に飛んできて。

「危なかったな。アクセス。」

「ああ、有難う小狼君。」

「いや。無事で何よりだよ。」

昨日の祭りの眠りの粉は小狼でした。

「全く、阿野月つてやつ。俺が本当は人間だっただけを気付きやがったのか。」

でも、俺はアクセスに利用されていないぜ。」

「全くだ。アクセスはフィンを助けたかっただけだ。」

アクセスたちの疑いは益々深まるばかりです。

さくら達は屋台を見て回りました。さくらとまるんの髪にはさくらとくりの實の簪が掛かっています。

「2人とも、よく似合っているわ。」

「こっとうしてみると益々姉妹に見えますわ。(ビデオカメラを2人に回す)」

「あ、あのね・・・。」

「はうっん。」

これはとても恥ずかしい雰囲気です。

その様子をまるんの幼馴染の都が見ています。

「ん〜、なんかこうしてみると本当の姉妹だね。」

それにしても稚空のバカチンは何をしているのよ。」

都の背後で子供の笑い声がかすくすと聞こえました。都はキツと振り向くと黒い服を着た男の子を乗せた黒豹とツーサイドシニヨンの人間が立っています。

「ちよつと、アンタ達！何がそんなに可笑しいのよ!？」

「失礼。これはあまりにも面白かったもので。」

「ホントに!」

「まあ、そんなに怒らないで。別に貴方に危害を加える気はないから。」

「どういうことよ?」

「お前には力があるのだよ。明宮・リード。」

「明宮・・・リード?」

「貴方の前世ですよ。東大寺都さん。」

「誰よ。その明宮・リードって?おまけになんでアタシの名前を知ってるのよ?」

戸惑う都に男の子が近づくと。

「魔術師・クロウ・リードの娘だよ。」

「魔術師・・・クロウ・リード?」

「私の前世だよ。現世は柊沢エリオル。」

「こちらはスピネル・サンとルビー・ムーンだ。彼等は私が創ったものだ。」

「どういうこと?」

「お前には力がある。友人の真実を知った時に試練が起こり、その試練に勝てばおまえもさくらさんのような魔力が目覚める?」

「さくらちゃん?魔力?」

「木之本さくらさんは内に秘めた星の魔力を持っている。今の彼

女は私を超える魔力を発揮するだろう。」

「じゃあ、あの子は。」

「時期に私の跡継ぎになるのである。」

そういつとエリオル・スピネル・ルビーは背を向けて都の元を去りました。

跡に残された都は呆然と立ち尽くしました。

日暮れになった時。お祭りも終わりさくらたちは友枝町に帰ろうとします。

「今日はありがとうございました。」

「いいえ、こちらこそ昨日はお祭りに招待してくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか。」

「そうね。早く私もイギリスに帰る支度をしないといけないわ。」

「そうですね。」

「まるんさん、今日はありがとうございました。」

さくらはお辞儀をすると電車に乗ろうとしました。そこをまるんがさくらの片袖を引いて引き止めました。

「待って。」

「（振り向く）ほえ？」

「さくらちゃんにまだお話があるの。」

「なんででしょうか？」

「さあ？」

「わからない。二人とも先に帰ってて。」

「判ったわ。」

さくらはまるんに連れられていきました。

まるんはさくらを遊園地のメリーゴーランドの近くに連れて行きました。ここは嘗てまるんの両親が出会った場所です。まるんは離

婚後もよく個々に来ています。

「ほええ。素敵なお遊園地〜〜。」

「私のお父さんとお母さんが出会った場所なんだ。ここをさくらちゃんに見てほしくて。」

「本当だ。此処に何度も来てみたくなるところです。」

「ついでにいうと此処でフィンと出会った場所でもあるんだ。」

「え？フィンちゃんど？」

「（頷くまるん）」

5ヶ月前、まるんは中学の卒業後遊園地のベンチに座っていました。そのとき、フィンがユリの花を持ってまるんの前に現れました。「初めましてまるん。貴方に告げることがあるの。」

「それからなの。私が怪盗ジャンヌとなつて美術品に潜む悪魔を回収するようになったのは。最初は嫌だった。どうしてかという泥棒は私の嫌いな仕事だから。おまけに夜は怖いし。」

「まるんさん……。」

「でも、何度もフィンに励まされて、シンドバッドに邪魔されながらもだんだん自覚を持つようになってきたの。」

「誰も失いたくなんかないから。家族も、友達も……。」

「……。」

「まるんの目に涙が出てきた。さくらはまるんの手を引いて”メリーゴランドに乗りましょう”と誘いました。」

「まるんとさくらは遊園地で遊び回りました。」

「さくらとまるんは観覧車で下を眺めていました。」

「うわー。高いいいい。」

「さくらちゃんは観覧車初めてだっけ？」

「いえ、去年のクリスマスに雪兎さんと友枝町の遊園地の観覧車に乗ったことがあります。」

「え、そうなの？」

「まるんは呆気に取られました。」

「はい。」

「なんだ。」

「あそうそう。折角だからもう1つ見て行かない？」

「ほえ？」

もう1つというのはさくらちゃんの苦手なゴーストハウスと云うところですよ。

「はう~~~~。私、お化けだけはダメなんだ~~~~。」

「いいじゃない。誘ってくれた御礼よ。怖かったらいつでも私に泣きついていいから。」

「はうううう。 (まるんに引きづられるさくら) 」

「まるんは怖がってしがみつくさくらをお化け屋敷に案内しました。」

「さくらちゃんは女の子だからこうというのが苦手だったんだ。」

「はうう。悪魔やクロウカードと戦う勇氣はともかくお化けと戦う勇氣だけはあります~~~~ん。」

「あらら。」

「そういえば此処で委員長が悪魔に取り付かれたときに此処で悪魔を封印したことがあるわ。その時にシンドバッドに飯を作っちゃったけどね。」

「ほええ。」

「後、悪魔のせいで稚空のばかに抱きついちゃったわ。」

「あやや。」

「もしかしたら此処に本当のお化けがいたりして。」

「ほえええええ！」

「嘘よ。ごめんごめん。」

「とりあえずさくらとまるんのゴーストハウスの体験は終了しました。そのときはさくらは目を回してしまいました。」

最後は光栄の花火大会です。

「うわー、きれい！」

「この遊園地の花火は最高で誰でも喜びそうな場面なのよ。」

「そうか、まるんさんはこれが見せたかったんだ。」

「そういうこと。さくらちゃんの元気にするためにこれを見せたかったんだ。」

「ありがとう。まるんさん。」

「いいえ。こちらこそ。」

再びまるんの目に涙がこぼれました。

「まるんさん……。」

「あのね、さくらちゃん。私の両親が離婚したこと話したことあるでしょう。」

「はい。」

「そのことを知ったのは1・2ヶ月前だったの。私はどうしたらいいか判らず此处に来てしまったの。」

両親は私が幼稚園の時に不仲になってそれぞれの国に旅立ってしまったの。私は都の家に世話になりながら一人で生きていたの。誰にも頼らずに強くなるうと思っていた……。」

「偉いですね。まるんさんは。」

「え？」

「どんな困難も1人で掻い潜ろうとするまるんさんはとても強いです。」

「私もまるんさんみたいに強くなりたいです。」

「さくらちゃん……。（涙を拭って）ありがとう、さくらちゃんにそういつてもらえてほっとしたわ。貴方達に出会うまでは1人でガンバロウツと思ってたけど。」

「ハロー！フィンだよー！」

お元気ですか？

新学期に柀沢エリオル君という子が転校してきました。その子はとてもやさしい雰囲気です。初対面じゃない気がしました。なんか誰かに似てるような気がしました。

それより大変なのはなんか異様な現象が次々と起こりました。大雨が来たり、ピアノが勝手に動き出したりで踏んだり蹴ったりです。そんな時に私の中の星の力が目覚めてクロウカードがさくらカードに変わりました。そして異常な現象はクロウさんのせいだと判明しました。やっぱりクロウさんと関係があると思います。

私もまだ、未熟ですがクロウさんの現象がもし桃栗町で起こったらずくに飛んできます。

まるんさんもシンドバッドや悪魔に負けないでください。

まるんさんなら絶対なんとかなる。絶対大丈夫ですよ。

お元気で

強気に本気。無敵に素敵。元気に勇気のさくらより』

「私の元気の呪文を覚えていてくれたんだ。」

「よかったね。まるん。」

「ええ、そうだ。私もさくらちゃんに手紙を書いておこうかな。まるんは大喜びです。」

離れていて住んでも二人の友情までは離れません。

数日後。そのまるんから手紙が来ています。

「まるんさんからの手紙だ。」

「なんて書いてあるん？」

「ちよつと待ってね。ええつと。」

『さくらちゃんへ』

悪魔退治の仕事がやっと終わりました。封印したチェス駒が全部揃い、私もこれで平和な生活が送れます。フィンは仕事が終わって正天使になるまで1週間天界の帰還をすることになりました。

ただ、シンドバッドとアクセスには注意しろといたしました。どう
いうことが判らないけど。油断はできないと思います。

それでも私はフィンを待っています。今度、フィンが帰ってきた
らみんなでパーーとやりたいと思います。もうジャンヌには変身は
できませんがもしさくらちゃんが桃栗町で危険な目にあつたらすぐ
に助けます。

強気に本気。無敵に素敵。元気に勇気のまるんは絶対なんとかな
る。絶対大丈夫です。

さくらちゃんも体には気をつけてください。

まるんより。』

だって、フィンちゃん帰ったんだ。」

「わいらにさよならもなしにか。ま、いいか。そやさくら元気に
なつたらその魔法でシンドバッドの正体を探ろうやないか。」

「うん！」

悪魔はいなくなったしシンドバッドとアクセスを捕まえてクロウ
さんの関係を暴くぞ！」

さくらは新たな決意を固めました。

後編友情（後書き）

その後さくらちゃんとまるんちゃんは新たな事件に足を踏み入れます。

さくらちゃんはクロウさんの召喚する異常現象に立ち向かい、まるんちゃんは新たな悪魔に立ち向かいます。

互いに手紙や電話で励ましあい、困難を乗り越えます。

そしてまるんちゃんと稚空くん、さくらちゃんと小狼君の恋の行方も気になります。

パート1さくらの訪問（前書き）

この話はccさくらの54話と55話の間でジャンヌの34話から35話までの間の話です。まるんちゃんは怪盗シンドバットの正体が稚空くんだと知り、一人ぼっちになってしまいました。そんな彼女にさくらちゃん達が訪問します。果たして……。

パート1 さくらの訪問

1999年11月5日

さくらは翔フライのさくらカードでまるんのマンションに向かいます。

さくらカード以降は背中に天使みたいに生やして飛んでいます。勿論付き添いのケルベロスや月も一緒です。

「ご機嫌やなさくら。」

「久しぶりにまるんに会えるのだから当然だ。」

「それに、明日観月先生が帰って来るんだよ。もう最高だよ。」

彼女達はお互いに電話や手紙で連絡を取り合い、それぞれの困難に立ち向かっています。

「にしても悪魔がまた現れるなんて大変やなあ。まるん姉ちゃん。」

「やはり、クロウと何か関係があるらしい。」

「あのシンドバッドちゅう兄ちゃんは何者なんやろう。多分本当は人間やっちゅうことは確かや。」

「やはり、アクセスに取り付かれたのだろうか。」

「ほえ、なんの話？」

どうやらさくらは何も知らなかったらしいのです。

「こつちの話やけど、それは姉ちゃんのマンションに着いたら教えたるさかい。」

「とりあえず、オルレアンに急ごう。」

3人はオルレアンに向かいました。

さくらはまるんの部屋のベランダに着きました。当然ケルベロスと月は羽をしまいました。丁度、その時にまるんが帰ってきました。さくらは無邪気にガラスを軽く叩きました。その音に気がつくともるんは戸を開けました。

「さくらちゃん。ケロちゃん達も。」

「暫くだな。」

「うん。さあ、みんな上がって。」

まるんはさくら達を部屋に招き入れました。その様子を隣のベランダから入ってきたシンドバッドに見られました。

「久々にまるんにちよつかい出しにきやがったか。」

まるんは「昨日の出来事をさくら達に報告しました。実はシンドバッドの正体はお隣の部屋の名古屋稚空だったのです。一昨日、悪魔を封印した後シンドバッドの素顔を見てしまいました。そのことがシヨックでまるんは自暴自棄になってしまいました。」

「そんな、阿野人がシンドバッドさんだったの・・・？」

「ええ。稚空は何が目的で私に近づいてきたの？私を苦しめるため・・・？」

「だから、私のことを気付いて睨んでいたのか。」

「その稚空つちゅう兄ちゃんは人間やる？」

「そうだけど・・・。」

「もしそうなら、ひよつとしたらその兄ちゃんアクセスに操られてるで。」

「どういうこと？」

「これはあくまで私の勘だがそのシンドバッドいや、名古屋稚空は心のどこかに大きな弱みがある。」

「大きな心の弱み。例えばおじ様の不仲とか。でも、今はちゃんと和解してるし。」

「なんや。じゃあなんでアクセスに協力したん？」

「とにかくアクセスって云う天使さんにあつたらクロウさんのことを聞いてみましょうよ。」

「どうやって？」

「あの黒天使さんはいつもシンドバッドさんの傍にいます。その人がアクセスを連れて出てくるからそこをケロちゃんが捕まえ

るのよ。」

「なるほどな……。ってワイ!？」

「そうよ。私は天使は見えるけど、背低いから下半身からならともかく上半身からじゃ捕まえることはできないんだよ。」

「せやからワイにどうせいっちゅんじゃ。」

「ケロちゃんは仮の姿なら空飛んで捕獲はできるでしょう。」

「確かにそうだな。問題はどうかやって捕まえるかだな。」

「私、恐くて稚空と話ができないし……。」

「そうや。メールボックスに手紙を入れてベランダに誘き出して、その背後からワイが連れ出すっちゅんはどうか?」

「確かにいい考えだわ。でもどうやって私の部屋に連れて来るの?」

「壁抜けの抜スルを使えばばっちしや。」

「そうか。それならちゃんとクロウさんのことを聞き出せるかもしれないわ。」

「念の為に錠ロックのカードでアクセスが逃げられないようにしておけ。もしこのままアクセスが話をしてくれなかったらその時は秤ライブラだ。」

「はい。」

「じゃあ、私は稚空に手紙を書くね。」

「まるんは髪と筆記用具をもって。」

「稚空へ」

「この間のことで話がしたいからアクセスとベランダまで来てね。」

「まるん」

「うん、これでよし。」

「まるんは家中の鍵をかけて、稚空の部屋の前に手紙を置いて部屋に引き返しました。」

「部屋ではさくらが。」

「星の力に示し鍵よ。真の姿を私の前に示せ。契約の元さくらが」

命じる。封印解除！」

さくらは鍵を杖に変えました。続いて

「錠！」

部屋に錠の魔法をかけて自分達4名以外が入れないようにしました。

「これがさくらちゃんの本当の魔力か。さて、これから始まるぞ。」

その時、バシユツと激しい音がしました。よく見るとシンドバッドがブーメランでガラス戸を叩いています。

「げげ、シンドバッド？もう来たの？」

「こんなに早く上手くいくとは思わなかった。」

「でも、黒天使さんがいないよ。」

確かに黒天使のアクセスの姿がありません。

「そやな。とにかくそうや、このまま秤使^{ライブラ}うて阿野兄ちゃんの心を読むんや。」

「いいの？」

「それ以外の方法はないだろう。」

「それがいいわ。」

「私がなんとかするわ。あくまで私だけと話がしたいし。」

まるんはマーカーで紙に『落ち着いて』と書いてその紙を稚空に見せましたが落ち着くどころか更に興奮しました。さらに玄関のチャイムが鳴りました。

「はい。さくらちゃん魔法を解いて。」

「はい。」

さくらは魔法を解除しました。シンドバッドは悔しくなって家に帰りました。

訪問客は紫界堂聖という教育実習生の青年です。まるんのお父さんとは知り合いましたよ。

「聖先生。」

「こんにちはわ。日下部さん。おや（玄関にさくらの靴がある）先客がいらしてたんですか？」

「はい。」

「ほえ、私はいいとして月さん達はまずいよ～～～～。」

「確かにそうや～～。」

「しょうがない……。こうなれば我々が稚空とアクセスに話をせねば。」

月とケルベロスは壁を通して隣に向かいました。

その時、紫界堂先生が入ってきました。

「こ、こんにちわ。」

「おや、可愛いお嬢さん。貴方の妹さんですか？」

「いえ、友人です。ちょっと前に美術館で知り合っただけが縁で仲良しになっただんです。」

「随分と中のよろしいこと。（チヨコンとさくらの前に座ってお嬢さんのお名前は？私は日下部さんの学校の教育実習生の紫界堂聖と申します。」

「初めまして、木之本さくら小学5年生です。」

「さくらさんというのですか？可愛いお名前。『まろんとさくら』果物のような名前ですね。」

「ほええ。」

まろんもチヨコンと正座しました。

「そういえば聖先生は今日はどんな御用件で参ったのでしょうか。」

「そうですね。明日、月峰神社で秋祭りがあるらしいから一緒に行くかと思って。」

「月峰神社ですか？まろんさん行きましょうよ。実は明日観月先生が帰ってくるんですよ。」

「観月先生？」

「私達の数学の先生です。巫女さんだっただけです。」

「巫女さんですか？」

「それなら感激。よし、明日の昼ごろに友枝町に行きましょう。」

「なんでしたら私の車で向かいましょう。」

「はい。お願いします。」

その時、ガツンと隣の部屋から激しい音が響いた。

「なんの音でしょう。」

「多分、稚空です……。あはははは……。」

「元氣ですね。」

「……………」

「それでは、失礼します。」

紫界堂先生はまるんの部屋を後にしました。

「ねえ。さくらちゃん。あの音は……………」

「うん、想像はつく……………」

気になったさくらはベランダから稚空の部屋に行きました。

＜因みに念のために逃げられるように翔フライを身につけてあります。＞

「気をつけてね。」

「はい、お邪魔しました。あ、そうだ。これ。」

さくらはポケットから新品の携帯電話を取り出してまるんに差し出しました。

「これは？」

「知世ちゃんのお母さんの会社の新しい携帯電話。何かあったらこれで連絡を。ただ、李くんの電話番号やメールアドレスだけははいつていません。」

「阿野子も持つてるの？」

「はい。でもまるんさんのことは黙っています。それじゃ。」

さくらは隣のベランダに行き、恐る恐る稚空の部屋の戸を開けます。なんと月とケルベロスが横たわっていました。その上、稚空は拳を震わせて2人を睨んでいます。大慌てで風ウィンディで回収して友枝町に

逃げ帰りました。

「さよならあ。」

まるんは笑顔で3人を見送りました。

「なにが『さよならあ』だ。」

いつの間にか稚空がベランダに来ています。

「なんでもいいしよう。」

まるんはそつぽ抜くと部屋に帰りました。稚空の近くにアクセスが飛んできました。

「全く、嫌になるぜ。いきなり壁からお化けみたいにぬ〜っと出現して『一体、何が目的でこんなことをしたのか』と聞いて。『教えてくれないなら帰らない』なんていつて。」

「いい迷惑だぜ。全く本当にさくらつて餓鬼はムカつくぜ。何が星の力だ、さくらカードだ。今度会ったらただじゃおかないぜ。」

稚空は益々さくらに気に入らなくなりました。

「あいつがいたんじゃまるんとろくに話ができないぜ。」

その夜まるんはさくらと連絡を取っています。

紫界堂聖つていう先生とても優しく綺麗だった。私の怪獣呼ばわりする御兄ちゃんとは正反対でした。

「ちよつと、さくらちゃん。いくら御兄さんが意地悪いところが玉にあるからつてそれはないんじゃない。むしろそれを言うなら『稚空と正反対』つて言ったほうがいいじゃない。」

ほえ、確かに・・・。

確かに稚空はかつこつけでお調子者であった。その上、紫界堂先生が来てから彼は冷たくなっていた。

「それより、ケロちゃん達の容態は如何？」

どうも、こつもめつちや痛かつたがな。ちよつと聞いただけで殴り飛ばすことはないやろつ。

「結局話し合いは失敗だったの？」

「ああ。」
ケロちゃんの体には何mもある包帯が何本も巻かれていました。
「これは物凄く怒っていました。後でどんな仕返しが来るか判りません。」

確かに、稚空いえシンドバッドは何回もさくらちゃんに怪盗の邪魔をされたからさくらちゃんに逆恨みを持っているのよ。

そんな・・・。

あ、そうだ。阿野人に頼もうよ。

「阿野人？」

だれか知らないけどそれがいいわ。」

「さくらさん、ご飯ですよー！」

「はい。」

じゃあ、まるんさんまた後で電話します。」

「はいはい。夕食の後で、電話するわね。」

まるんは電話を切りました。

「阿野人か？ひよつとして観月先生だったりして・・・。」
明日は彼女が帰ってくるから当然です。

まるんは明日は月峰神社に行くことになりました。

パート1さくらの訪問（後書き）

まろんちゃんは1人ではありません。さくらちゃん達がいるのです。そのことを忘れないで下さい。

さて次回は観月先生が登場します。果たして先生はシンドバッドの正体は暴けるのでしょうか。

パート2ノインとミスト（前書き）

まるんちゃんと紫界堂先生と月峰神社に行く前にちよこつとだけ友情のエピソードを描かせておきます。

フィンちゃんが魔界に行っていることを知らないでフィンを待ち続けているまるんちゃんですがさくらちゃん達に支えられて悪魔に立ち向かいます。

パート2ノインとミスト

さくらの向かいの家の屋根の上で赤髪の少女と赤毛の青年が浮いています。2人はさくらの部屋を覗いています。

ベッドの上でさくらは桃栗町のまろんと電話しています。

「あれが、ジャンヌの仲間ね。顔立ちは天使か仙女のような明るさだわ。こんなやつ嫌い。」

「クロウ・リードの元配下の選定者のケルベロスが選んだ次期主か。彼女はなかなかの強い魔力をもっている。まるでジャンヌの部下のようだ。」

「でも、まだあいつ魔力が足りないみたい。そうだ、クロウの関係者としてコイツとジャンヌを叩かせようっと。」

「何処に行く、ミスト。」

「やーね。ノイン。あいつの所持品のどれかにキャンディを染み込ませるのよ。」

ミストという少女はノインと名乗る青年の制止を振り切って誰もいなくなつたさくらの部屋に飛び込みました。

「つたく。やれやれ・・・。」

この2人はフィンの天界帰還（実は魔界帰還）の後に桃栗町に降り立ってジャンヌの抹殺を隔てています。少女ミストは色とりどりのキャンディで人間の美しい心を蝕み、強力な悪魔を作り。ノインは人間の姿（それが紫界堂聖先生）になり。ジャンヌを苦しめます。

稚空は紫界堂聖先生の正体にうすうす気付いていたが、そのことでまろんに邪険されるのもしばしばです。

ミストはさくらの部屋に入るなり。

「えっと、どれにしようかしら？」

さくらの机の上の腕時計に目が付きました。

「これにしよう。」

ミストはキャンディボックスからキャンディを1つ出すとさくらの腕時計に染み込ませて退散した。

< 因みにケロちゃんはベッドの上で就寝しています。 >
入浴を済ませたさくらは部屋に入るとまるんの携帯に電話をしました。
した。

” リリリリリ ”

風呂場の洗濯籠の上で携帯の電話が鳴りまるんはバスタオル1枚で電話に出ました。

「はーいいい！」

あれ、さくらちゃん？

え、万が一携帯が繋がらないときに自分の家と知世ちゃんの家電話番号を伝えておく？」

まるんは風呂場から出ると電話の下から紙を取り出して筆記用具を手にメモをしました。

「これでよしっ。」

ありがとう。さくらちゃん。

「どういたしまして。」

よかった。稚空が悪魔だって判った時はまた私1人ぼっちになったのかと思っちゃったわ。

「フインはいないし、長いことさくらちゃん達に会ってなかったし不安で一杯だったわ。」

また、まるんさんに会えてよかった。こっちも気になることが一杯でどうしようかと思っただんです。

「クロウさんはどうして私達にこんなことをするのか判らなかつたんです。」

「さくらちゃん。」

「でも、まるさんと話が出来てよかった。私には仲間がいるし、知世ちゃんやケロちゃん、月さん。」

それにまるさんがいる。

「さくらちゃん。ありがとう。私はもう1人じゃない。みんながいる離れていても仲間だもんね。」

はい。絶対何とかなる、絶対大丈夫です。

あ、いつけな〜いい。もうこんな時間。じゃあ、まるさんおやすみなさい。

「おやすみなさい。明日神社で。」
電話が切れました。

「そうよ。私には仲間がいる。1人じゃない。
強気に本気。無敵に素敵。元気に勇気……。」

眠りについたさくらをよそに、机の上の腕時計が怪しく光っていました。

パート2ノインとミスト（後書き）

さくらちゃんは5年生の進級祝いに雪兎さんにもらった時計に悪魔を取り付けられました。果たしてさくらちゃんは悪魔に支配されてしまうでしょうか。

それはパート3をご覧ください。

パート3 月峰神社に行こう（前書き）

まろんちゃんは紫界堂聖（ノイン）の車で友枝町に来ました。さくらちゃんは観月先生に相談して稚空くんの正体を暴こうとします。それにしても、さくらちゃんは強い魔力を持っていたから悪魔には取り付かれませんでしたね。

さておき、『阿野人』とは一体何者でしょうか？

パート3 月峰神社に行こう

翌日の昼ごろ。まるんは東京の地図を片手に外で待ち合わせをしている紫界堂先生の車に向かいました。そこに稚空が立ちはだかりました。

「何処に行くんだまるん。」

「何処でもいいでしょう。」

まるんは稚空から擦り抜けてエレベーターに乗り1階に降りました。

外では先生が車を止めて待っています。

「お待たせしました。」

「早かったですね。いつもは遅刻をするのに・・・。」

まあいいでしょう。では参りましょうか。」

「はい、お願いします。」

まるんは車に乗ろうとするとところをギリギリのタイミングで稚空に見られてしまいました。

「あのやるーーーー。」

4時間後二人は地図を頼りに友枝町に着いて先生は車を大きな屋敷に止めた。

「先生？」

「なんかさくらさんがある屋敷に入ろうとしているので。」

「え？」

聖先生の言うとおりさくらは大きな屋敷に入ろうとしました。

「さくらちゃん？」

まるんは車を降りました。

「さくらちゃん。」

まるんの声に反応したさくらは門の前で止まりました。

「まるんさん。こんにちわ。」

聖先生も車から降りて。

「こんにちわ。さくらさん、この屋敷の人と何か。」

「ここは知世ちゃんの家です。」

「ええ?」

確かにこの屋敷は大道寺家の豪邸です。

「貴方のお友達の家でしたか?」

「はい。神社に行く前に知世ちゃんが衣装合わせをしようって。」

「衣装合わせ?」

「そういうことでしたら、まだ時間があります。」

再び車に戻る聖先生は”月峰神社で落ち合いました。”と言い残して神社まで車を走らせました。

「ほえ、行っちゃった・・・。」

呆然とするさくらちゃんとまるんちゃんでした。

さくらは呼び鈴を鳴らします。

はい、何方?

「私、さくらだよ。」

「まるんも一緒です。」

まあ、まるんさんもいらしてたんですか?

「いえ、私はたまたま此処に来ただけなの。」

まあまあ。ではまるんさんの衣装も用意いたしますから、二人ともどうぞ。

「はああ。」

がつくりと肩を落とす二人でした。また彼女の衣装合わせに付き合わされるつもりです。

さくらとまるんはメイドの案内で知世の部屋に着きました。

「いらっしやいませ。」

「こんにちわ。」

「久しぶり。」
「暫くでしたねまるんさん。」
「では、お嬢様ごゆっくり。」
メイドは部屋を退出しました。

残されたさくらとまるんは衣装合わせに付き合わされています。
「さくらちゃん達から大体のお話は伺いましたわ。私やさくらちゃんを怒鳴りつけていた男の人が怪盗シンドバッドだなんてびっくりしました。」

「そうなのよ。それでさくらちゃんがあの人に頼むのはどうかなんて……。」

「さくらちゃん、考えましたね。」

「ほえ、何が。」

「あの人に相談するなんて。」

「だから、その人って?」

「会えば、判りますわ。ささ、着替えて着替えて。」

二人は知世のお手製の衣装に身を包みました。今度の衣装に関して。まるんの法は桃色丈の長い振袖のドレスで、さくらのほうは水色の膝までかかる丈のワンピースです。

「ほええええ。」

「なんか動きづらいわ。」

「お祭りですもの。当然ですわ。」

「はづつづつ。」

「ま、この前の衣装よりはましか……。」
「この子も大分コーデイナーの勉強してるし。」

「では、お祭りに参りましょう。」

知世も着替えを開始しました。

「ほづつづつ。こんなの雪鬼さんに見られたら恥ずかしいしお兄ちゃんだとからかわれるし。」

「稚空が来ないことを祈りましょう。」

その時、さくらの左手の腕時計があやしく光っています。その様子を庭の木の上からミストが見ています。

「何、あいつ。美しい心を持っているのに全然反応しない。これじゃジャンヌと戦いなんて無理だわ。」

ミストは悔しそうにキャンディを噛み砕きました。

知世は浴衣に着替えて、さくらとまろんを連れて月峰神社に行きました。鳥居の前では紫界堂先生が立っています。

「お待ちしていました。おや、可愛い衣装ですね。まるで女優さんのようです。」

「ほえ？」

「あら？」

「まあ、よかったですわね。衣装を褒めてもらって。」

「そ、それは……。」

「おや、そちらのお嬢さんは？」

「大道寺知世です。2人の衣装は私が御作り致しました。」

「なかなかいい腕してますね。」

「それは、どうも。」

その時、背後から聞き覚えのある女性の声がしました。

「まろんちゃん！さくらちゃん！」

「観月先生だ。」

そうです。今日彼女・観月歌帆先生はこの神社に帰ってきたのです。

「観月先生って云うんですか？」

「はい。私達の学校の算数の先生が産休になったからその代理として私達に算数を教えていたんです。」

「なるほど……。」

紫界堂先生は観月先生をじっとみつめる。

「この人ですか？綺麗な人ですね。」

判りました。その人に何か占ってもらいましょう。私はその間に屋台でも見て回りますから。」

「そうですか（残念そうに）判りました。」

3人は紫界堂先生から離れて観月先生の所に行きました。

その様子を2人の人影と蝶々の羽を生やした1匹の猫が見ています。1人はさくらのクラスの転校生の柊沢エリオルという少年。猛1人はさくらの兄・桃矢のクラスの転校生の秋月奈久留という少女（?）。もう1人は猛獣の小さな姿スピネルです。

「あれが、ジャンヌ・ダルクの転生者の日下部まるんさんですか。」

「やけに素直そうな子ね。フィンに騙されるのも無理はないわ。」

「今の彼女は完全に心に傷を受けている。信じていた人がライバルだと。しかし彼はまるんさんのためを思って怪盗の邪魔をしていました。」

「それなのに、まるんちゃんは稚空くんって子を避けているわ。」

「まるんさんの為にも私も人肌脱がなくては・・・。」

「まずはさくらさんとまるんさんを引き離すことですな。さくらさんはさくらさんのことを、まるんさんはまるんさんのことをしなければなりませんから。互いに互いの手伝いしたら試練にはなりませんからね。」

エリオル一行はさくら一行を尾行しました。

さくら達は拝殿に入りました。拝殿では月とケルベロスが待っていました。

「月さん、ケロちゃん。」

「待っていたぞ。」

「いらつしゃい。まるん姉ちゃん。」

「今日はちよつと遊びにイギリスから戻ってきたのよ。さて。」

さくらは錠ロックで戸を封印しました。

「(まるんの前に立って)話はすべてさくらちゃんから聞いたわ。貴方が信じていた人が悪魔なんてシヨックだったわね。」

まるんは俯いてしまいました。

「そうなんです。稚空はどうして私を傷つけて怪盗をやめさせようとしたのか判らないんです。」

「それで、さくらちゃんは私に相談することを決めたのね。」

「はい。」

「あの人って観月先生のことだったんだ。よかった。先生、稚空はどうして人間なのにアクセスに協力したか占ってください。」

まるんは観月先生に頼みます。

「判ったわ……。クロウの事だっけ知りたいし……。」
「一本当に阿野子はさくらちゃんを鍛えるためにやっているのかしら……?なんか信じられないわ。」

「ありがとうございます。観月先生。」

まるんは頭を下げました。

その時、神社の拝殿に異変が起こりました。

「なに、これ?」

その時、まるんのプティクレアに反応しました。

「これは、悪魔?この近くに悪魔がいるわ。」

「それじゃ、この歪みは阿野子なの?」

空間が揺れてしまい邪悪な空間に変わりました。

「嘘、此処何処?」

「判らない。とにかく今は悪魔を探すんだ。」

「はい。」

まるんはプティクレアで反応を追います。反応は。

「ん。ねえ、さくらちゃん。その時計……。」

さくらは左手を上げてまるんに見せます。

「これですか?これは雪兎さんに貰った腕時計ですけど……。」

まさか、これに……?」

「悪魔が……?」

「取り付いとんのか・・・？」

「でも、さくらちゃんには何の反応もないわ・・・。」

「確かに。さくらちゃんは、無敵の呪文で守られていますから。

悪魔さんには手出しはできないのでしょうか。」

「そうみたいね。とにかくその時計をなんとかしなくちゃ。」

観月先生はさくらの腕時計に手を伸ばした時に黒いオーラが先生に掛かってしまいました。途端に彼女の目は釣りあがりさくらの首を包むように首を締め上げました。

「ううううう、観月・・・先生・・・？」

「・・・さくら（ちゃん）！」「」

「死ね！木之本さくら！我等を封印したクロウ・リードの後継者！」

まろんは観月先生の頬を叩いてさくらを救い出します。

「ケホケホ・・・。」

「大丈夫さくらちゃん？」

まろんが駆け寄ったその時にさくらの腕時計が悪魔になり、同時に観月先生が倒れた。

「悪魔！？どうして私の時計に！？これは雪兎さんに貰った時計だよ！」

「その男を愛する美しい心を狙ってお前の時計に取り付いたが強力な魔力に守られて取り付くことができなかった。代わりにその時計に触った奴を操ることにしたのだ。」

「だからって、何も先生に・・・。」

「黙れ、小娘！クロウの次期主のお前には消えてもらう！」

悪魔はさくらを襲おうとしました。賺さずまろんは懐から新品のロザリオを取り出しました。

このロザリオは嘗て悪魔の回収のあとに一旦天使の羽に変わりましたが、まろんとシンドバッドの強い気持が1つになった時、シンドバッドが今まで封印したチェス駒が羽と融合して新しいロザリ

才となつたのですが、まるんはその真意に気付いてはいません。

まるんはそのロザリオに祈りを込めます。

「フィン、力を貸して。ジャンヌ・ダルクに私の声を届けて。」
ロザリオが輝きまるんは新品のコスチュームを纏ったジャンヌに変身しました。片手には杖付きの赤いリボンが握られています。

「強気に本気。無敵に素敵。元気に勇氣。怪盗ジャンヌ、神に使わされ只今参上！」

「これがジャンヌさんの新しいコスチューム。」

「素敵ですわー！（ビデオを構える）」

「ははは……。」

「ふん、随分と賑やかな仲間だな。」

「私はさくらちゃん達に会うまでは1人ぼっちだった！でも、今は違う！ここには仲間がいるのだもの！知世ちゃんが、月さんが、ケロちゃんが、香港の苺鈴ちゃんが、今帰ってきた観月先生が、そして……。さくらに強気の表情を向けて）さくらちゃんが！」

「……まるんさん……。」

「いい仲間だ。だったらそいつ等と一緒に死ねー！」

悪魔は腕を振ってさくら達を押しつぶそうとしました。

さくらは跳でジャンプかわしました。ジャンヌもかわしました。

「ケロちゃん、月さん！先生と知世ちゃんをお願い！」

「「判った！」」

ケルベロスは知世のもとに行き、月は観月先生を横抱きにして知世のもとに行きました。

「よくも、観月先生を！」

「許さない！」

2人は悪魔と退治をするのでした。

「言っておくがな！この空間は私を倒さん限り出られんのだぞ！」

「だったら貴方を倒せば此処を出られるってわけね！」

「覚悟しなさい！これまでの礼は返させてもらっわ！」

ジャンヌとさくらはそれぞれの武器を構えます。悪魔は再び彼女達を潰そうとします。さくらはポケットからダッシュのカードを取り出しました。

「ダッシュ！」

さくらはジャンヌを抱えて超高速でかわしました。

それでも、悪魔は執拗に彼女達を狙い続けます。そうしているうちに2人は悪魔に地面を叩きつけられました。

「ジャンヌ！」

「さくら！」

「「ううう……。」」

悪魔はさくら達に歩み寄ってきました。

「2人係でもこの程度か？」

ジャンヌたちは起き上がって悪魔を睨みつけました。

「私達の力はまだ、こんなものじゃない……。」

「もつともつと凄い力がある……。」

「このくらいの傷でもまだ戦えるというのか。小娘共が……。」

「見た目は小娘でも……ただの小娘じゃないもん。それに身代わりとはいえ観月先生に手を出すなんて酷いよ。この前の苺鈴ちゃんのことだって、2人とも私にとつてかけがいのない大切な存在だよ。そんな貴方達を私は許さない！」

悪魔の片腕がさくらの体を締め上げました。

「さくらちゃん！」

「そんなだと！？戯けた小娘が！我々はその中国の小娘に取り付くはずはなかった。本来ならば羅針盤の持ち主である小僧を操るはずだったが身代わりにして取り付いてしまったわ！」

「どつちでも一緒よ！貴方達悪魔は残酷よ！私達は絶対に負けない！絶対大丈夫だもん！」

さくらは剣のソートカードで悪魔の腕を刺しました。その痛みにさくらを振り落としてしまいました。さくらはフライのカードで無事地面に降り立ちました。

「私は負けない。どんなことがあってもまるんさんいいえ、ジャン又さんを守ってみせる！」

「小生意気な小娘が！」

悪魔はさくらに衝撃波を放ちました。その衝撃波をジャン又がりボンを前に突き出して阻みました。すると彼女達の周りに強大な結界が張られました。

「神の・・・バリアー・・・？」

衝撃波は一瞬で消えてしまいました。バリアーの中でジャン又は叫びました。

「私はもう負けはしない。大切な仲間を守るためにも、人間界の住人の笑顔のためにもそして・・・。友枝町や桃栗町の人々のためにも私は戦う。」

ジャン又はりボンで悪魔を捕獲しました。

「神の名の元に、闇より生まれし悪しき者を、此処に封印せん！
チエック・メイト！」

「ぐわあああああ！」

悪魔は白いナイトのチエス駒になりジャン又はりボンで回収しました。

「回収完了！」

「すごい、これがまるんさんの新しい力・・・。」

拝殿の屋根の上ではミストが他のキャンディからまるんたちの様子を見ていました。

「なんてやつ。美しい心を持っていながら強い心で悪魔をしりぞけるなんて・・・。」

彼女の隣に紫界堂先生がいます。

「やはり、この子は強力な魔力で悪魔から守られているのか・・・。」

「こうなったら、クロウの一族の魔術師の綺麗な心を蝕んでジャン又と取っちめてやる！」

その後、一行は元の神社の拝殿に戻ってきました。
「帰れた……。」

観月先生はようやく意識を取り戻しました。

「う……ん？」

「気が付かれましたわ。」

「「本当！」」

「よかったな。2人とも。」

「さすが光の黄金コンビや。」

その時、乱暴に拝殿の戸が開きました。その音に2人はびっくりとしました。

「「か、神主さん……。」」

「誰がだよ。」

開いたのはまるんの着替えの入ったりリュックを持ったシンドバッドでした。シンドバッドは今はスカーフで顔の下半分を隠してはいません。

「ち、稚空……。」

「お前が心配で此処に来たんだよ。」

「なんでよ。大きなお世話よ。」

2人の揉め事に先生が割り込みました。

「名古屋稚空くん。貴方のことは全てさくらちゃんから聞いたわ。貴方が本当は普通の人間でしかもアクセスに利用されているって。」

シンドバッドはさくらを睨みつけ、次第にコスチュームの胸倉を掴もうとしました。そこへ観月先生が戸を再び閉め、月がさくらの前に立ちます。

「主に手を出すな。主は間違っただけではない。」

「じゃあ、俺達が悪いって言うのかよ。」

「そうは言っていない。貴方が何が目的でアクセスに手を貸してまるんを傷つけようとしたか今から占っておくから。」

急にシンドバッドはかっとなってジャンヌの手首を掴むと。

「大きなお世話だ！お前達がいたんじや話が出来ない！二度とま
るんには近づくな！後、俺達の前に絶対に姿を見せるな！じゃない
と容赦なく殺すぞ！」

シンドバッドは、ジャンヌを引きずって神社を後にしました。

戸の前には錠ロックのカードが落ちています。

「まるんさん……。」

さくらは哀しい表情で彼女達を見送りました。

パート3 月峰神社に行こう（後書き）

さくらちゃんは結局は稚空くんの正体をつかめませんでした。まろんちゃんはどんな仕打ちを受けるのでしょうか。

パート4引き裂かれた友情（前書き）

さくらちゃん達は結局稚空くんの正体を探ることは出来ませんでした。

おまけにせつかくさくらちゃんにもらった携帯電話はエリオル君の手の中に落ちてしまいました。

これでは、もつとつすることもできません。

パート4引き裂かれた友情

まろんと稚空が立ち去った後に外の戸の近くに1個の携帯電話が落ちていました。エリオルはそれを拾いました。

「なるほど、まろんさんはこれで連絡を取っていたのか。これは私が預かっておこう。」

エリオルは茂みに身を隠しました。そこでルビーと大きなスピネルが待っていました。

「これさえ、なければ二度とまろんさんはさくらさんと連絡が取れません。」

「でも、壊すわけにはいかないし。いつそ電源切っちゃえば。」
「それは、いい考えだ。」

エリオルはすぐに携帯の電話を切りました。

「これでよし。さくらさんの魔力も大分強くなったみたいだ。魔力だけじゃない。心まで強くなっている。」

「だから、悪魔さんはさくらちゃんの美しい心を奪えなかったのね。」

「いつの間にか観月先生が傍にいました。」

「おや、歌帆聞いていたのか？」

「ええ、結局は稚空くんいえシンドバッドの目的は判らなかつたわ。」

「歌帆はいいとして彼女達は知らない方がいいだろう。」

「どういうこと？」

エリオルはシンドバッドの真実を語りました。

「それじゃ、フィンちゃんは魔王に今も操られているの？」

「そういうことだ。今まで集めたチエス駒は全て魔王の手に渡ってしまった。だから、魔王の力は強くなり強大な悪魔が人間界に攻め込んできたのだ。」

「そんな。」

「念のために神様はまるんちゃんに新しい力を与えたのよ。まるんちゃんを想う稚空くんの気持ちが今まで集めたチエス駒をまるんちゃんに与えたのよ。」

「そのことを知れば彼女は傷つき、神のバリアーも弱くなってしまう。」

「そんな、可愛そうに……。」

「さくらさんが知ればいずれまるんさんに知られる恐れがあります。」

「暫く、さくらさんはさくらさんの試練を受けてもらう。」

「そういうことならまるんちゃんたちには黙っておくわ。」

「ありがとう。歌帆。」

一方まるんは稚空に引きずられてオルレアンの屋上に来ました。

「何するのよ！稚空！」

「まるん、暫くはあいつには関わるな！かえってお前を傷つけてしまおう！」

「何言ってるのよ！さくらちゃんはそんな子じゃないわ！私の大切な仲間よ！どんなに離れていても！」

「仲間じゃない！あいつはまるんを不幸にしてしまおう！」

なあ、まるん。あんなチビ輔のことなんかほっといて、俺の傍にいようよ。俺の方がまるんを守るし。」

稚空はまるんに口付けしようとする、まるんは頬を打ちます。

「バカ！どうしていつもさくらちゃんを逆恨みするの！さくらちゃんだけじゃない！知世ちゃんも、ケロちゃんも、月さんも、そして観月先生も！貴方が私達の邪魔したり人の弱みに付け込もうとしたんでしよう！」

「違う！これにはわけが……。」

「もういい！」

まるんは泣きながら屋上を飛び出しました。稚空は頬を押さえて

1人その場に取り残されました。

部屋のベッドでまろんは泣きじゃくっています。

「さくらちゃんはそんな子じゃない。何時だって私のことを助けてくれているじゃない。今日だって私のことを。」

そういえばさくらちゃん、どうしてるんだろう。」

まろんは携帯電話で連絡を取ろうとしましたが……。

「(ポケットを探る) あれ、ない。どうしよう。そうだ、さくらちゃん達の家電話番号なら……。」

まろんは部屋の壁紙のメモに手を伸ばそうとしましたが。

「メモがない！如何しよう！さくらちゃん達に家の電話番号言っていないのに……。」

まろんは益々落ち込んでしまいます。

「これから、どうしよう？もうさくらちゃんと連絡できないわ……。」

実は……。

「はひー、これでよし。」

「全く、念のために自分家の電話番号を教えるなんてセコイ餓鬼だ。」

なんとアクセスがメモを盗んでいたのです。稚空はメモをゴミ箱に捨てました。

「あいつには悪いがこの方が本人のためになるさ。」

まろんとさくらちゃんは完全に友情を引き裂かれました。

パート4引き裂かれた友情（後書き）

後にまるんちゃんはさくらちゃんに会いに友枝町を訪れます。

そこでまた彼女と共闘しますがそれでも大喧嘩です。

次回はまるんちゃん達がドラえもんズと再会します。いよいよ、魔王との最終決戦です。

果たして、この勝負の行方はいかに。

パート1再会。ドラえもんズ。（前書き）

ようやく今回はドラえもんズとの再会が果たされます。

結局都ちゃんは、悪魔との戦い及びクロウリードとの戦いに巻き込まれてしまいました。ただ、彼女はクロウ（エリオル）の事情は知っていて、そのことはまるんちゃんには告げませんでした。まるんちゃんは無事に悪魔と戦えるのでしょうか。

因みに言っておきますけどこれはジャンヌのその後及びさくらの6話と68話の話です。

パート1再会。ドラえもんズ。

ブイーン。月峰神社の拝殿の中に穴が開きました。そこから9匹の猫の集団が飛び出しました。

「あいててて・・・。」

「もう、御兄ちゃん。気をつけてよ。」

「しょうがないだろう。この穴狭いんだから。」

「貴方がぶつちよいの間違いでしょう。」

「なんだとっ。」

「まあまあ、喧嘩はやめて。早くさくらちゃん達のところに行こうよ。」

「がっ。」

「元気かなあ？あのセニヨリータ達。」

「マタドローのスケベえ。」

「こらこら、喧嘩はやめるである。」

「そうだよ。さくらやまるんに知らせなきゃいけないことがあるんだから。」

一方神社のお祭りは賑わっています。実は先月エリオルの悪戯でお祭りが駄目になったために今月でやり直しになってしまいました。集団のなかにまるん、フィン、稚空、アクセスがいます。

「これは、灯グロウのカードだ。」

「今度はかなり幻想的だな。前はとても気持ち悪かったのに。」

「さくらカードになったから綺麗に輝いているじゃない。」

「まあな。あの時は帰って人々の機嫌を悪くしちゃったしな。」

この前はアクセスが二度とさくらの魔法が使えなくしちゃったのです。でも、今は違います。さくらカードが誕生してから使えるようになったのです。

「あれから一週間。フィンが墮天使から準天使に戻ってから我が

家はドタバタとしているわ。」

「なによ。それ。」

またまたフィンと喧嘩が始まりました。

フィンは悪魔に捕えられて墮天使になってしまい、まろんは神の力を奪う仕事をしてしまい魔王の力を強めてしまいました。しかし、稚空、アクセスの和解で魔王からフィンを奪い返し準天使に戻しました。後は、魔王を倒すだけです。

「とにかく、今までまろんが集めたナイトのチエス駒は神様に渡したわ。阿野強い力なら神様のパワーも大分増したから。」

「でも、結局都にはばれたんだろ。」

「確かに……。帰ってきた途端にフィンやアクセスと仲良しになちやつて。何で見えるのかしら？」

「さあな。」

「あれ、都ちゃんは？」

「そういえばいないわね。さっきまで一緒だったのに。」

まろん達は都を探すことになりました。

都はエリオルに呼ばれました。エリオルの他にスピネルと奈久留がいます。

「なに、エリオル君。」

「すまない。急に呼び出して。どうかな、お前の目覚めた魔力は？」

「どうって、まだフィンたち天使が見えただけだけど……。」

「他の魔力はどんなのか？ なにも焦る必要はありません。クロウの娘の生まれ変わりとはいえまだ不完全ですから。」

「全く、それにしてもこの光の粉は？ なんだろう。これがさくらちゃんの魔法？」

「これは、灯よ。」

「グロウ？」

「淡く光るカードだ。人に危害を与えるほど強くはないから、心配を感じられたら捕まってしまうんだ。」

「へええ。」

その時、ガサガサと物音がしました。

「ん？なに今の？」

「狸じゃない？」

はたしてそうでしょうか。

さくらは灯のカードで人々を幸せにしようとします。実はエリオルが騒ぎを起こしたために電気がいかれてしまったためにカードで明るく灯したというわけです。

「お祭りが終わるまでこうしていたいな。」

その時。聞き覚えのある囁きを耳にしました。

「さくらちゃん。さくらちゃん。」

「その声は？」

茂みから9匹のネコ型ロボットが出てきました。

「ドラちゃん。みんな。」

「暫くだね。さくらちゃん。」

「みんな元気そうだね。」

その時、背後からメガネをかけた短い銀髪の青年とまるんが現れました。

「雪兎さん。まるんさん。」

「さくらちゃん。よかった。」

「何か物音がしたんで襲われるのかと思ったんだ。」

「失礼だな。俺達はんなことしねえぞ。」

「ごめんごめん。」

「あれ、貴方達は？」

「元気であるか？まるん殿？」

「ねえ、まるん。このロボットさんたちは？」

「ほえ、フィンちゃん帰ってたの？」

「うん。」

さくらは悲しい顔をしました。

「フィンちゃん。話は小狼君から聞いたよ。フィンちゃん、本当は魔王に操られていたんだね。」

「ええ。」

「そうか。」

雪兎は自分から月に戻りました。実は月はさくらの魔力がまだ足りなかったので、消えそうになったところを桃矢の魔力を貰って保てるようにしたのですが、桃矢は無力になってしまいました。

「実はこの町でも異常気象が発生した上に悪魔達が襲ってきたもので我々は一応退治はしておいたが、まさか我々も魔王に協力していたとは知らなかった。」

「ごめんね。巻き添えを食わせて。」

「いいのよ。」

所でドラちゃん達、どうして此处に？」

「そうでした。例の魔王の居所が判ったのですよ。」

「なんですって。」

「それは何処に？」

「立ち話もなんだが、話は雪兎の家で聞こう。」

「それがいいわ。」

「念のためにケルベロスも呼んでおきましょう。」

さくら達は頷きました。

パート1再会。ドラえもんズ。(後書き)

このお祭りにケロちゃんはお留守番です。相変わらずケチですね。さくらちゃんも。

まあ、いいでしょう。今回はフィンちゃんと月さんも一緒です。

ドラえもんズの共闘も久々に始まりました。もしかしたら知世ちゃんも一緒かもしれませんね。

パート2 雪兔の家に（前書き）

大変長らくお待たせしました。

ちよつと、他の事に気を取られてしまいました。

皆様に大変迷惑をかけてしまいました。

早いところ急がせておきます。

パート2 雪兔の家に

ケロちゃんは今回のお祭りでお留守番をする羽目になってしまいました。なにしろ人に見られたら大騒ぎになってしまうかもしれせん。暇なものだから、テレビゲームをすることになりました。

「おら、この、ホイ！」

その時、携帯の電話が鳴り響きました。ケロちゃんは一旦ポーズして出ました。

「もしもし、おおさくらか。え、雪兔ゆきとの家うちに来てくれ？よし、判った。」

ケロちゃんは支度をして雪兔ゆきとの家に向かいました。

雪兔ゆきとの家はかなりの和風系でした。さくらの兄・桃矢はめつたに此処には来ませんが、時折彼の家の前に来ることもあります。さらは時々此処に来ることがあります。

雪兔ゆきとの部屋に来たケロちゃんは・・・。

「ドラえもんズ！元気しとったか？」

「ケルベロスじゃねえか。久しぶりだな。」

「マタドローラやないけ。久しぶりやでー！」

マタドローラの感動の再会を果たしました。

「ジエドローラお手製のたこ焼きだよ　　！」

「食うか？」

「食う食う！」

ケルベロスはジエドローラのお手製のたこ焼きをマグマグ食べてます。

「本当に食い意地はってるんだから・・・。」

「キッドとマタドローラを足して2で割ったような性質ですね。」

「「こんなのと俺を足すなー！」」

キッドとマタドローラはハモツタ調子で否定しました。やがて互い

に睨みあい、大喧嘩になりました。

「こらこら、喧嘩はやめるである。」

「ほんとにもう!」

「がうがう。」

「喧嘩するほど仲良しだね〜〜。」

シミジミとしているドラリーニヨと対象にドラえもんが仲裁します。

「こんな時に喧嘩してる場合じゃないでしょう。」

「あ、そうだった。」

喧嘩はどうか収まりました。

まるん達は本題に入りました。

「それでね。魔王は今の東京にある東京タワーの地下を本拠地としているのよ。」

「東京タワー言うたら、月や地と戦った場所やろう。」

「そういうこと。私たちもフィンちゃんも魔王に騙されて魔王のパワーを拡大させちゃった。」

「一応私を助けた日まで集めたまるんたちのチェス駒は神様の元に行つてちよつとは力は増したけど、このくらいじゃ諦める魔王じゃないわ。」

「だから、一刻も早く魔王を退治せねばいカンのだ。」

「僕達でなんとかしないと未来まで消えてしまうよ。」

ドラえもん達も同意した。

「せやったら、なんで小僧や稚空の兄ちゃんがおらんのや?」

確かに此処にいるのはドラえもんズ・ドラミ・ジエドーラとまるん・さくら・フィン・月と自分だけだった。

「本当は、稚空達にも話しておきたいんだけど、心配だけはかけたくはないのよ。」

「私は、これ以上小狼君に心配はかけたくはないの。後、知世ちゃんにも。」

「私は自分の蹴りをつけなくちゃいけない。だから、都や稚空にも迷惑なんかかけられない。」

「まるん姉ちゃん、さくら……。」「

「まるんやさくらちゃんの言う通りよ。私も今までの罪滅ぼしに魔王を退治していくわ。」「

「私もだ。まるん・さくら。私はどんなことがあってもけして負けはしない。」「

「せやったら、ワイも行くで。フィンを苦しめた魔王に仕返しをくらわしたる!」「

「私達だつて!」「

「魔王を滅ぼさない限り、僕達の未来にまで異変が起こるかも知れない!ね!やろうね!」「

『もちろん!』

みんなの意見が同意しました。

「みんな……。ありがとう。」「

「こうなったら、かくなる上は、明日の朝、魔王の懐に潜り込みましょう!」「

『オー!』

まるん一行は魔王のいる東京に向かうことになりました。そこで今夜は雪兎ゆめうさぎの家に泊まることになりました。

翌日。

まるん達は、戦いの準備を整えて空を飛んで東京に向かいました。

「なんで空飛んでいかなあかんねん?」「

「だって、電車だとお金が掛かるし、それにこの方が手っ取り早い。」「

「そつそつ。」「

お、見えてきたぞ。あれが東京タワーだ!」「

「よかったな。キッド。高いところじゃなくて。(ニヤニヤ)」「
マタドローラのからかいにキッドはそつぽ向きました。まるん達は

思わずに嘔出してしまいました。

一行はタワーの足元に降り立ち、中に入りました。

「此処に魔王が・・・？」

「ああ。」

「タイムテレビで探しあてたかいはありませんでした。」

「そうか。その手があったんか。」

「ええ。ありましたよ。」

「とにかく急ぎましょう。」

『オー。』

一行は地下の階段を探し当てようとしています。ドラニコフが鼻で探し当てました。

「がう。」

「どうしました？ドラニコフ。」

ドラニコフが手を指すと大きなマンホールのようなものがありました。

「なるほど、ここが入り口であるか？」

「よし、入ってみようぜ。」

その時、かたかたと音がしたと思うと、蓋が開いてしまいました。

「開いたよ。」

「どうぞって言っているのかな？」

「多分、そうよ。」

「よし、行ってみましょう。」

一行はその穴に飛び込み、魔王のいる部屋に入り込みました。

パート2 雪兔の家に（後書き）

今回はちょっと時間が掛かりました。

出来るだけ急がせておきます。

申し訳ありませんでした。

パート3神（前書き）

いよいよ魔王との最終決戦に突入しました。何とか次話まで間に合いました。

さくらちゃんとまるんちゃんの戦いがもうすぐ終わると思います。

ちょっとでも、割り込ませておきます。

パート3 神

小狼は凄い気配を感じたので東京に来ました。シンドバッドはまるんがいなくなつたので、アクセスと此処に来ました。因みに知世はいつも通り撮影で都はまるんが心配で来たのです。

「まるんのバカが、アタシたちを差し置いて何処にいったのよ。」

「全くだぜ。フィンちゃん達がいるからって危険すぎるぜ。」

「さくらちゃんとまるんさん、大丈夫でしょうか？」

「判らないよ。俺だつて心配してるんだから。」

「全く、昨日はやつと都を探し出したと思つたら今度は自分がいなくなつちまつたなんてどういうことだ。」

「本当に、見つけたらとことんお説教してやるんだから。」

都はかなりプリプリしています。彼女とは伊達に幼馴染をしていないので、まるんを大事にしていたのです。前にも急にいなくなつたことがあります。彼女の両親の離婚が決まつた時もオルレアンを飛び出したことがあつたのですから、そこは稚空がすっかり回収して一件落着でした。

「さて、それはそれとしてまるんやあのチビ輔は何処にいったのかな？」

そんな一行の前に悪魔の集団が立ちふさがりました。

「悪魔のお出ましか・・・。」

「そのようだな。アクセス、お前はまるんたちを探し出せ。俺達はコイツラを食い止める。」

「それで知世ちゃんや都ちゃんはどつするんだ。」

確かに都と知世は元々巻き添えを食つた足手まといです。（なんか酷い気がする・・・。）

「私もさくらちゃん達をお探しに参ります。」

「アタシだつて、まるんの笑顔を守らなくちゃいけないんだから。」

言っても聞かない二人（特に知世ちゃん）です。

「だろうと思いました。判ったよ。でも、絶対に無茶はすんなよ。」

「それは承知いたしています。」

アクセス・都・知世はまるん達を探しに行きました。小狼とシンドバッドが悪魔の集団に立ち塞ぎます。

「さあ！」「掛かって来い！」

2人は悪魔の集団に挑みかかりました。

ドラえもんズとまるん達はマンホールのような穴に無事に入り込みました。

「此処が悪魔の巣か？」

「なんだか、キミが悪いわね。」

「はうう……。フィンちゃん、逃げ出すようなこと言わないですよ。」

「何、ビビってんねん。唯一のカードキャプターが……。」

「此処まで来たのだから、恐がっても仕方がないだろう。」

一行は更に奥まで進もうとしました。

「ねえ、魔王さんってどんな人？黒い服を着て角や翼を生やして

『がはは』と笑うおじさん。」

「そんなんじゃないわよ。」

「じゃあ、どんな人？」

「そうねえ……。」

「しい！」

「如何したのキッド？」

「誰か来るぜ……。」

「なぬ！？」

確かに凄い足跡が聞こえます。

「魔物かな？」

「それ言うなら悪魔。」

「似たようなものでしょう。」

「全然違う。」

その凄い足音はこっちにだんだんと近づいてきます。まろんたちはそつと構えます。

「来るである。」

「がうう。」

果たして凄い足跡の正体は。

「グアハハハハハハ！」

なんと巨大な悪魔でした。

「ち、悪魔だったんだ！」

「これが!？」

「そうよ!それもかなりの強敵だわ!まろん、油断しないで!」

「判つてる!」

まろんは両手を胸に当てて祈る。まろんの体は光に包まれて。

「強気に本気。無敵に素敵。元気に勇氣。」

まろんはジャンヌに変身しました。ロザリオはフィンとの決戦に壊れてしまいました。しかし、聖なる力が目覚めてからは自身で変身できるようになりました。

「ほえ。ロザリオなしで変身した。」

「凄いで姉ちゃん。」

その時、悪魔が襲い掛かりました。賺さず、キッドが空気砲を放ちます。悪魔はその弾に押されてしまいました。

「へ、なんでえ。結構弱いぜ!」

しかし、次々と悪魔がわんさか出てきました。

「ホアチャー!」

王ドラの回し蹴りが炸裂してドミノのように倒れていく悪魔。ドラメツドの魔法で悪魔は消えていきました。でも、どんどんと悪魔が増えていきます。続いてマタドーラの得意の怪力で悪魔達を投げ飛ばしていきます。

「へへ、どんなもんだい。」

「はい、シュート!」

ドラリーニヨのサッカーボールが悪魔の1人に命中しました。ジエドラーのフォークが悪魔に突き刺さります。

「皆凄い!」

「へへ。」

その時、別の悪魔がジャンヌたちに襲い掛かります。月は結晶の集団で振り返りにします。

「月さん。」

「ジャンヌ、さくら。此処は我々が食い止めるから。お前達は魔王のところに行け。」

「でも・・・」

その時、また別の悪魔が攻撃してきます。ケロちゃんはケルベロスになって炎で一掃しました。

「大丈夫や。あんた等なら出来る。」

「そうよ。絶対大丈夫よ。さくらちゃん。」

「ジャンヌさん・・・。」

「絶対大丈夫だよ。」

「フィンちゃん・・・。」

その時、別の悪魔が2人を攻撃しようとしています。ドラニコフは自分の手を見て狼に変身して悪魔に噛み付きました。

「ガウガウ（急げ）!」

「判った!」

「（2人の手を取って）急ごう!」

「ええ!」

ジャンヌ・さくら・ドラえもん・フィン・ドラミは魔王の元に向かおうとしました。

「月さん、ケロちゃん、みんな。私は負けない。自分の償いは自分でしなくちゃ。」

一行は魔王の元に向かいました。

ジャンヌ達は螺旋階段に登ろうとしています。途中で悪魔の軍団もありましたが……。

「チエック・メイト!」^{アイシー}「地!」^{アイシー}「シヨックガン!」

次々と攻撃して突破します。そして遂に一行は魔王のいる部屋の扉の前に辿り着きます。

「此処に魔王が?」

「ええ、間違いないわ。此処にあいつがいるのよ。」

「魔王を倒せばお母さんもお父さんも元に戻るんだわ。」

「まるんさん、いえジャンヌさん。頑張りましたね。後一步です。」

「そうよ。ジャンヌ、今まで一人でいえ皆で互いに頑張ってきたじゃない。」

「そうだよ。魔王がいなくなれば世界に平和が訪れるんだから。」

「ケルベロスさんや月さんだって頑張ってくれてたように、貴方ももう少し頑張らなくちゃ。」

「ええ。」

その時、上空から巨大な球体が表れてドラミを包み込みました。

「きゃあ!」

「ドラミ!」

『ドラミちゃん!』

「お兄ちゃん、皆! 助けて!」

球体はドラミを包んだまま開いた扉の向こうに飛び込んだ。まるんいやジャンヌたちも後から追いかけます。

「待て!」

ジャンヌ達は球体を追っているうちに球体は黒い服を纏った美少年の頭上の上空で止まりました。

「お前は!」

「よく来たな。怪盗ジャンヌ。」

「魔王!？」

フィンは美少年を睨み付けました。彼自身が魔王だったのです。

「この人がフィンちゃんやジャンヌさんを騙した魔王!？」

「そういうことだよ。おや、もう1・2匹虫がいたのか？」

「誰が虫よ！」

「魔王!今までよくも私の仕事の邪魔をしてくれたわね!お陰でジャンヌの生まれ変わりのまるんを泣かしちゃったじゃないの!？」

「騙されるほうが悪いんだよ！」

ジャンヌ、よく前世の時のように僅かな仲間を連れてよく此処まで来たな。」

「そういえば、ジャンヌ・ダルクがイギリス兵に捕まった解きも僅かな兵を連れていたわね。」

「そういうことだな。」

「だからといって、こんなことでへこたれたりはいしないわ。私にはさくらちゃんやケロちゃん、月さん、ドラえもんズの皆、そしてフィンがいる。たとえばらばらになったとしても必ずみんなは来てくれる！」

「ほう、皆とは？」

魔王が”パチン”と指を鳴らすと幾つもの球体が舞い降りてきました。

その中にはドラミと同じようにケルベロスたちが一体ずつ閉じ込められていました。おまけに。

「さくらちゃん！」

「まるん！」

「フィンちゃん！」

「都たちまで閉じ込められています。」

「都！」

「アクセス！」

「知世ちゃん、ケロちゃん、月さん！」

「皆！」

『ドラえもん、ごめん!』

「ワイら、ドジを踏んでもうた!」

「私はさくらちゃんが心配なもので。此処に来てみたらこの通り捕えられてしまいました。」

「こら、まるん! アンタって子はー! 急にいなくなってみんなが心配するじゃないの! 稚空やアクセスだっているのよー!」

「(ドキンとして) 稚空が!」

「後、李くんも。」

「(ドキンとして) 小狼君も。」

「2人は今は悪魔と戦っているんだぜ!」

「そんな!」

魔王はニヤリと唇を動かしてジャン又たちに攻撃を仕掛けました。ジャン又は神のバリヤーで自分達3人を防ぎましたが、すぐに破れてしまい吹き飛ばされて地面に叩きつけられました。

『ドラえもん(御兄ちゃん)!』

「『さくら(ちゃん)!』」

「『まるん!』」

3人は床に伏せた状態です。

「皆! 魔王、アンタねー!」

フィンはカンカンになって魔王に突進しようとしたが、魔王は片手で受け止めました。

「イヤー!」

「フィン!」

「フィンちゃん!」

「今まで、よくジャン又とそのちっばけな仲間を連れて来たな。そのお礼に盾にしてあげるよ!」

「(内側から球体をどンドン叩いて) 卑怯だぞ!」

「まる!」

「フィン!」

フィンは人質にされて手も足も出ません。

「酷いよ！何もフィンちゃんまで！」

「フィンや皆を返して！」

ジャン又はリボンを伸ばしてフィンを取り返そうとします。しかし、魔王はそれを結界で跳ね返します。当然リボンは下に落ちました。

「えーい！これでもか！空気ピストル！」

ドラえもんはピストルを放ちますが、これも跳ね返されてしまいます。さくらは風のカードを出しますが

「邪魔だよ。」

重力をかけて3人を押し潰そうとしました。

『ドラえもん（御兄ちゃん）！』

『さくら（ちゃん）！』

『まるん！』

3人は大ピンチです。魔王はフィンを捕まえたまま歩み寄りました。

「どうした。もう終わりか？」

ジャン又は顔をあげて魔王を睨み付けました。

「終わりじゃ……ないわ！フィンと……両親を……か・返して！」

さくらは諦めずに顔をあげます。

「貴方がクロウ……さんを……操ってないことは全部、フィンちゃんや……小狼君たちから聞いたわ！」

ドラえもんも

「これ以上……、まるんちゃんや……さくらちゃんの……世界や僕達の時代を崩壊させてみる！只じゃおかないぞ！」

「減らず口の叩く奴らめ！」

魔王は重力を更に倍増しました。3人は苦しみだします。それでも未だ諦めません。

「絶対大丈夫よ！強気に本気。無敵に素敵。元気に勇氣。」

ジャン又はさくらに教えてもらった呪文と自分の呪文を唱えまし

た。その時、扉が開いて。

「ジャンヌ！」

「さくら！」

小狼とシンドバッドが飛び込んできた。シンドバッドはその光景を見て、ブーメランを投げつけてフィンを回収します。小狼は

「雷帝招来！」

雷を落として3人を助けます。

「小狼君！」

「シンドバッド！」

「2人とも知り合い？」

ドラえもんの方に2人は頷きました。2人は彼女達それぞれに駆け寄りました。フィンも駆け寄ります。

「ジャンヌ、ドラえもん、さくらちゃん。大丈夫？」

「大丈夫だよ。」

「このくらい平気さ。この人達もつと早く来てくれなかったら僕達はぺしゃんこだったよ。」

「全くだ。どうして俺に知らせてくれなかった。」

「どんなことでもお前を守るって言ったじゃないか。」

「まるんたちを責めないで。貴方達にこれ以上迷惑をかけたくなかったのよ。アクセスたちもお願ひ。」

フィンは懇願します。そこで雷とブーメランでボロボロになった魔王が現れます。

「よくもやってくれたな！まとめて殺してくれる！」

魔王が片手を翳そうとした時に光が上空から表れました。光と共に白い衣を纏った美青年が舞い降りました。

「「神様！」」

「「この人が？」」

神と呼ばれた青年はまるんたちに微笑みました。

「ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりの日下部まるん、共に悪魔と戦ったクロウ・リードの後継者の木之本桜、よくぞ、私が来るまで

強い思いでいてくれました。

「さあ、みなさん。私と共に祈るのです。」

神の言うようにジャンヌ達は祈りを捧げます。するとさくらの杖とジャンヌのリボンが輝きます。

神は彼女達と共に魔王の前に立ちはだかろうとしています。

「魔王、よくも私の可愛い天使たちを苛めてくれましたね。」

「おまけにさくら達をよくも騙してくれたな。」

「もう、許さない！」

さくらは杖をジャンヌはリボンを、そして神を両手を前に翳します。

「己！はああああ！」

魔王は衝撃波を放とうとします。

「神の名の元に！」

さくらは杖を突きつけます。その先から桜色の光が出ます。

「闇より生まれし悪しき者！」

ジャンヌはリボンを突きつけその先から白い光を出します。

「此処に封印せん！」

二つの光が神に集中します。手から光弾が出ようとしています。

「チエック・メイト！」

光弾が発射して魔王に命中します。魔王は叫び声を残して消滅しました。

「お、己　　！神め

！私が滅んでもはぐれ悪魔が

うろついていることを忘れるな——！」

魔王が消滅するとチエス駒が降りてきて髪の毛の胸元に納まりました。

同時に球体が舞い降りて消滅してドラミ達は救助されました。

「皆！」

『イヤッター——！』

一行は大喜びで駆け寄りましたが……。

”ゴゴゴゴゴゴ！”地割れが聞こえました。

「大変！城が崩れちゃう！」

「皆、脱出よ！」

『判った。』

「でしたら、私にお任せ下さい。」

神は両手を翳すと一行は光になって消滅しました。

東京タワーの近くで光がゆつくりと舞い降りました。その光が地面に着くと光の中からまるんたちが出てきました。

「私達。」

「帰ってきたのね。」

「はい。」

「やったな。」

「終わったんだ。1つ。」

みんなは大喜びしました。

翌日ドラえもんズは22世紀に帰還しました。まるん達は桃栗町に着いて魔王が倒れてよかったねパーティーを開きました。

しかし魔王が言った通り魔王がいてもはぐれ悪魔がいることを忘れてはいません。それでも。

「強気に本気。無敵に素敵。元気に勇氣。」という呪文があればどんな困難を乗り越えられます。

パート3 神（後書き）

1 カ月後さくらちゃんはすべてのクラウドをさくらカードに変えて真実を知ります。そのカードで彼女は新しい敵と戦うことになるでしょう。

パート1 両親からの手紙（前書き）

この話はまるんちゃん達がフィンを取り返してから1週間後のストーリーです。

幻影さんの小説を写したのですが、一応訂正や付け足しも致します。ジャンヌは新たな敵と戦う場面を描いておきます。

パート1 両親からの手紙

「私を受け入れなさい。」

少女の眼の前にもう1人の自分が立ち、こちらを見つめています。同じ髪。同じ制服。同じ声色。

まるで鏡に映っているかのように、全てが自分とそっくりでした。ふな、なんで・・・？

胸中で恐怖する少女に、もう1人の自分が妖しく笑いながら近づいてきます。

「貴方が私を受け入れてくれれば、全ての悲劇をリセットすることができるとよ。」

震えながらも、もう1人の自分の誘惑を否定する少女。

「貴方は私、私は貴方。私を否定することは、貴方自身を否定することになるのよ。ほら、貴方の体が、貴方とは違う別のものに変わってるわ。」

促されて自分の体を見ると、足元から徐々に灰色に変色が及んできていました。

本当に起きていることなのか。それともただの幻なのか。

下半身と両手にまで灰色になり、その部分の自由が利かなくなりま

す。もう1人の自分が、灰色に変わっていく少女の胸に手を当てるのです。

「早く私を受け入れなさい。このまま否定し続けたら、貴方は全く別の存在になってしまう。今貴方の体を石に変えているのは、自分を否定している貴方自身なのよ。」

少女は反論しようと必死に声を出そうとするが、自分の心を浮き彫りにするもう1人の自分と、体が石化していく恐怖と困惑のために言葉にならないのです。

「その石化を解くには、私を受け入れ認めること。大丈夫よ。こ

れは自分自身のこと。何も恐れることはないわ。私が貴方の心の傷を癒してあげるから。」

少女の胸に触れているもう1人の自分の手が、少女へと吸い込まれていく。

その非現実的な光景に、少女がさらなる恐怖を募らせませす。

「怖がらないで。元々1つだったものが別れてしまつて、今それが再び1つに戻るだけ。心配することは何ひとつないわ。」

もう1人の自分が妖しく少女を言いくるめます。

それでも、少女は込みあがつてくる恐怖を拭い去ることができません。

やがてもう1人の自分が、完全に少女の中に入り込みました。

その瞬間、石の殻が弾けるように剥がれた少女は、頭の中が真っ白になつたのです。

眼が覚めると、そこは自分が住んでいるマンションの自分の部屋でした。

「夢、だったの・・・」

悪い夢にうなされたまるんが、来ていたパジャマの袖で汗を拭きます。

「でも、なんなの、今の夢・・・？」

夢に不安を抱きながら、まるんは笑顔を作つてベッドから下りた。

「さあ、今日も元気に勇気でがんばろう！フィン、今何時？」

まるんに声をかけられ、神聖な装束を着た白い翼の天使フィン・フィッシュが、目覚まし時計を抱えてふらふらと飛んできたのです。

「まるん、急がないと・・・」

フィンが目覚まし時計をまるんに見せる。

「ウソツ！？もうこんな時間！」

「早くしないと都ちゃんたちが来ちゃうよ！」

時間に追われて、慌てて部屋を駆け回るまるんは食パンを口の中に押し込んで、制服に着替え終わったところで、インターホンが鳴

り響きました。

「まるん、早くしなさいよ！」

「はい！」

玄関から聞こえた声に、まるんは返事して駆け出したのです。

日下部まるん。

幼い頃から1人暮らしを余儀なくされた女子高生である。

実は彼女は、この桃栗町を騒がせている神風怪盗ジャンヌであり、百年戦争で活躍した少女、ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりでもある。

警察の包囲網を次々と潜り抜ける彼女が泥棒をする目的は、千差万別な品々にとり付いた悪魔を封印するためだったのです。

かつては天使フィンやジャンヌ・ダルクの力を借りてロザリオでジャンヌに変身していたが、聖なる力が目覚めてからは自らの意思で変身することが可能となりました。

現在、彼女の正体を知る人が、まるんの通う学校の中では2人いるのです。

名古屋稚空。

ジャンヌと並ぶ怪盗シンドバットであります。

魔王に堕天使として洗脳されたフィンを助けるために人間界に下りてきた黒天使アクセス・タイムに頼まれ、ジャンヌの妨害を試み、後にジャンヌを守るために体を張り続けてきました。

今ではまるんにとって、かけがえのない人となっているのです。

東大寺都。

まるんとは幼い頃からの親友であるのです。

刑事の娘である彼女は、人一倍正義感が強く、ジャンヌ事件の際には父とともに刑事たちを先導してきた女の子です。

彼女がそこまでしてジャンヌ逮捕に全力を注いでいたのは、一時

期疑いをかけられたまるんを守るためでもあつたのですが、そのまるんが怪盗ジャンヌだったことを知り彼女は戸惑ったが、友を想うまるんと説得されて和解し、お互いその友情をさらに強めたのでした。

まるんや稚空みたいにフィンやアクセスの姿を眼にすることはできなかつたものの、友を想う心が彼女に不思議な力を目覚めさせたのです。都はその日以来は父を手伝うこともなくジャンヌの悪魔封印に協力することを誓ったのでした。

「もう、早くしてよ、まるん！遅刻するよ！」

マンションのエレベーターを降りた都がまるんを急がせます。

ルールにうるさい都は、遅刻することを覚悟でいつもまるんを迎えに来ているのです。

2人の住んでいる部屋は同じ階の向かい合わせであり、稚空の部屋はまるんの部屋の隣にあたります。

稚空とともに、マンションの出入り口で駆け足になっている都をよそに、まるんがメールボックスに向かい合っているのです。

「な〜に？またメールボックス？」

都が呆れるように言います。

両親と離れて暮らしているまるんは、登下校時にはいつもメールボックスを覗き込んでいるのです。

両親からの手紙を待ち望むが、それはいつも入っていないので、最初は稚空のイタズラ書きがはいつていたのです。

その両親の離婚と置き去りが悪魔の仕業だと知ったのは、今から少し前のことでした。

墮天使となったフィンを救い、神が魔王に勝利した壮絶な戦いから1週間がたった今日。

魔界からはぐれ出た悪魔が今も密かにジャンヌたちを狙っていたのですが。

まるんも稚空も都も、この戦いに新たに決意を固めながらも、そ

れぞれ日常へと戻っていたのです。

両親の呪縛が解け、再び会えることを信じて、まるんはメールボックスを開きました。

中には1封の手紙が入っていました。

まるんが慌しく手を入れて、手紙に書かれた差出人の名前を確かめました。

日下部匠・ころん。まるんの父と母の名前だったので。

やっと自分に届いた手紙に、まるんに喜びが込みあがり、眼には涙が浮かんでいました。

「どうした、まるん？」

稚空が訊ねると、まるんが笑顔で振り返ってきました。

「やっと、やっときた。お父さんとお母さんからの手紙が・・・」

「えっ！？ホントか!？」

稚空も歓喜の声を上げて、まるんとその手紙を見つめのですが、都が慌しく口を挟んできました。

「手紙を読むのは学校に着いてから！遅刻しちゃうよ!」

「はい!」

まるんは返事をして、手紙をしっかりと持ったままマンションを飛び出しました。

『まるん、今までお前を1人にしてすまなかった。私たちはお前ともう1度暮らしたいと思っている。すぐにはそちらに戻れないが、今月末には帰るつもりだ。改めて家族の生活を送りたいと思っているので、私たちを信じてほしい。』

匠・ころん』

「お父さん、お母さん・・・」

その日の1時間目の授業の後の休み時間。

まるんは両親からの手紙を広げ、喜びのあまりに涙を浮かべていました。

「ホントに、ホントによかったですね、日下部さん・・・」
稚空、都とともに、手紙の内容に水無月大和も喜びを隠せないでいたのです。

彼はまるんのクラスの委員長であります。

弱気で判断力に欠けている自分を変えようと、またまるんのためにも怪盗シンドバットを捕まえようと奮闘する一面もあります。一回だけは捕まえたことはあるが、すぐに逃げられてしまったのです。

「今月中には帰ってくるのか。」

「そんなときはパーティーを開かないとね。」

稚空と都がまるんの喜びを分かち合うのです。

そのことにまるんは、今までにない喜びを感じていました。

悪魔の呪縛から解放されて自分のもとに帰ってくる両親。これほどに自分を想ってくれている親友たち。

まるんは今、一番の幸せの中にいました。

「ありがとうございます・・・みんな・・・」

まるんは頬を涙で濡らしながら、感謝の言葉をかけました。

「アレ？日下部さん？」

喜びに浸っているそのとき、別クラスの種村と桑島が教室に入り、まるんに声をかけてきたのです。

彼女たちのクラスは、1時間目は体育だったのです。

「日下部さん、学校の外の通りにいなかった？」

「えっ？何言ってるのよ。まるんは学校に着いてからも私たち一緒だったし、教室に入ってからまだ外に出てないわよ。」

都が種村たちに弁解しますが、種村は、

「でも、私たちのクラス、1時間目は体育で校庭に出てたんだけど、外から私たちのいる校庭をずっと見てたわ。」

「授業中だったんで声はかけられなかったけど、あそこから不気味に笑ってこつちを見てたのは確かだわ。」

桑島も話に加わるが、都も稚空も呆れるばかりでした。

「見間違いだったんじゃねえのか？ まろんのそっくりさんだった
りして。」

稚空のからかうような態度に、まろんさえも呆れます。

”私を受け入れなさい。”

そのとき、まろんは昨夜見た夢を思い出ししていました。
もう1人の自分が妖しく語りかけてきた夢。

もしかして、その夢が現実になったのでしょうか。

まろんの胸に、一抹の不安がよぎっていました。

「どうしたの、まろん？」

都が呆然となっっているまろんの様子を気にして声をかけてきまし
た。

「えっ？ ・ ・ ・ ううん、何でもない、何でもない・ ・ ・」

まろんがはつとして、少し慌てた様子で返事をします。

「何考えてるのよ。 あんなのただの夢じゃない。 魔王の力は弱ま
ったし、それに私には、みんながいるじゃない。」

まろんは胸中で自分に言い聞かせたのです。

自分自身を信じることで自分を強くすることができ、さらにたく
さんの人たちが自分を支えてくれます。

たとえどんな困難が訪れても、怯えることは何もないのです。

まろんは自分や仲間たちを強く信じました。

通りから学校を見つめる少女。

彼女のその姿は、紛れもなく日下部まろんでした。

同じ髪型。 同じ制服。 顔の輪郭も背丈も同じ。

まろんそのものでした。

唯一の違いは、瞳の色が紅いことと、本人が見せるとは思えない
ような妖しい笑みを浮かべていることでした。

「随分と楽しそうね、まろん。 お父さんもお母さんも帰ってくる

し、たくさん仲間もいる。これほど楽しいことはないよね。」

彼女にはまるんの思考が手に取るように分かっていたので。まるで姿かたちだけでなく、中身まで同じであるかのように。

もう1人のまるんは、妖しい笑みを浮かべたまま振り返り歩き出しました。

「まるん、私がこの幸せがいつまでも続くようにしてあげる。貴方が何を考え、どのようなものが1番の幸せになるのか、私にははつきりと分かるわ。だって、私は貴方は自身なんだから。」

彼女はそこから立ち去りました。

悪い夢の続きなのか、それとも夢が現実となったのでしょうか。

心の隅で不安を抱えながらも、このときのまるん自身は予想だにしていなかったのです。

パート1 両親からの手紙（後書き）

もう1人のまるんちゃんが出現しました。

もしかしたらまるんちゃんの分身なのかもしれませんが彼女は如何戦うか、暫しの間御期待下さい。

パート2もう一人のまろん(前書き)

今回は稚空くんの元婚約者の少女が登場します。
もう1人のまろんちゃんは何をする気でしょうが。
ちよつと気になりますね。

パート2 もう一人のまるん

「だから、下校のときには注意したほうがいいですよ。」
昼休み、中庭でまるんたちと昼食をとっていた水無月委員長が語ります。

内容は、最近この桃栗町付近で多発している連続誘拐事件についてでした。

被害者のほとんどが女性だが、中には男性も含まれており一貫性がありません。

桃栗警察も警戒体制をとっているが、まだ犯人逮捕には到っていません。

「大丈夫だよ。そんな都合よく犯人と出くわすはずないさ。」

稚空が気さくな笑みを浮かべます。

「もう、稚空ったら無責任なんだから。」

まるんが呆れるように呟きます。

そのとき、稚空がまるんの顔を見つめて呆然となっていました。

「何よ？」

まるんが不審に思っただけです。すると稚空がはつとして、

「あつ、いや、ちょっと、思い出したことがあったんだ。」

「思い出したこと？」

稚空の言葉に都が聞き返します。

「ああ。とても不思議なことなんだけど。」

稚空の話に3人が注目します。

「オレの母さんの日、泣きじゃくってうずくまっていたオレに、女の子が1人、声をかけてきたんだ。母さんが亡くなってとても辛かったから、その女の子にすぎるように、一緒に遊び始めたんだ。遊んでいるうちに楽しくなってきた。ついにオレの家に誘うことにしたんだ。家の中でも楽しく遊んで、夕方になって、その女の子が帰るといってオレは送っていきこうと部屋のドアを開けたんだ。」

ただ、その少しの間に気をそらして、振り返ると女の子は消えてたんだ。」

「消えた？」

稚空の話に水無月委員長が？を浮かべます。

「ああ。窓には鍵がかかってたし、出入口は他にオレが開けたドアぐらいだから、突然いなくなるはずがない。なのに音も立てずにいなくなってた。サヨナラも言わずに。」

「そんな〜！」

都が稚空の話を聞いて震えていました。

遊園地のお化け屋敷などは全く問題ないのだが、本物じみた話になると怖くなってしまふようであります。

その後、稚空がその女の子に会うことはなかったということです。

「夢でも見たんじゃないの？お母さんが亡くなったから、気が動転して・・・」

まろんが稚空の話を否定します。

「う〜ん、そう言われるとそう思えるな。まだ子供だったし、あんまり記憶に残ってない話だし。」

稚空はまろんの言葉を否定しませんでした。

母がなくなつて何かにすがりたかった自分が見た夢物語だったのかも知れません。

「そ、そうよね・・・そんな話がホントのはずないじゃない。」

都が安心して深く息をつきます。

そのとき、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り響いたのです。

「あ、もうこんな時間。急いで戻りましょう。また、先生に叱られちゃう。」

まろんたちは昼食の後始末をして、校舎へと戻っていきました。

夕日の差し込み始めた稚空の前の高校の枇杷高校の体育館。

今日、この体育館を使用する部はありません。

そんな体育館の中央で、1人の少女が新体操の練習に励んでいま

した。

山茶花弥白。

稚空の元婚約者（親が決めた）であり、彼の父やその関係者とは親しい間柄であります。

稚空が眼にかけているまるんを気にかけているようで、彼女に負けられないという思い入れが新体操にも表れていました。

「日下部さん、稚空さんは貴方にあるみたいですけど、体操は負けられません。今度の大会では、絶対に私が勝ちますわ。」
一途な思いを秘めて、部活のない日もこうして自己練習を行っていたのであります。

そんな中で一息入れていたときのことでした。
体育館の出入り口に立つ1人の少女。

弥白はその少女の姿に気付き振り返ったのです。

「あら？日下部さん？」

弥白が少女の姿に疑問を投げかけました。

その少女は紛れもなく日下部まるんでした。

「どうしました、日下部さん？わざわざここまでいらして。」

新体操に使うポールを隅に置いて、弥白がまるんに近づいたんです。

するとまるんは、妖しく笑いながら言葉を発しました。

「山茶花さんは今でも稚空のことを想ってるの？」

「えっ？」

突拍子もないことを言われ、弥白が疑問符を浮かべます。

「貴方のことを想っていないと分かっていながらも、それでも今も稚空を愛している。」

まるんの不気味とも思える態度に、弥白はだんだんと不安になってきました。

「貴方は、日下部ではありませんわね。わたくしの知っている日下部さんは、そんな人ではありませんわ！」

「私はまるんであってまるんでない。元々はまるんと同じ存在だ

けど、今ではまるんとは別の存在となつているのよ。」

「な、何を言っているのですか・・・？」

弥白は恐怖を感じて後ずさりを始めるが、少女が妖しい笑みを浮かべたまま近づいてきます。

「怖がることはないよ。稚空のことを想うのなら、想い続ければいいよ。ずっとね。」

「えっ!？」

そのとき、弥白は自分の異変に気がつきました。

足元から徐々に自分の体が灰色に変わってきていた。それが彼女にさらなる恐怖を植え付けたのです。

「な、何なんですの、コレ!？」

「貴方は今、私の眼を見たことによつて、闇の呪縛を受けたのよ。貴方のその石化は、だんだんと貴方の体をかけ上つて、最後には完全な石像に変えてゆくのよ。」

少女の言葉通り、弥白にかけられた石化が浸食し、上半身に迫ってきていきます。

「ヤダ!私、このまま石になんてなりたくありません!神楽!助けて、神楽!」

弥白は恐怖に駆られながらも、助けを求めて必死に叫びます。

病院の院長を務める稚空の父の秘書であり、弥白の世話係も兼任している神楽が、そろそろ自分を迎えに学校にやってくるはずであるのですが、少女は笑みを崩さないまま、

「ムダよ。貴方は今、私の作り出した空間の中にいるのよ。見た目は現実と変わらないけど、声は外には絶対に漏れないし、外からの声もここには届かないわ。」

「イヤ・・・イヤですわ・・・」

恐怖と悲痛に涙さえ浮かべている弥白に、少女の石化が容赦なく進行し、両手を固め顔にまで及んでいました。

「私の世界にいれば、稚空をずっと想っていられる。これ以上に幸せなことはないはずでしょ?」

少女の言葉に反論することもできず、弥白は恐怖に満ちた表情のまま、完全に灰色に染まりました。

「まるん、貴方が寂しくならないように、私が一生懸命に頑張るからね。もう貴方に辛い思いはさせないから。」

まるんに瓜二つの少女は、石像となった弥白の頬を手で触れながら笑みを浮かべて、学校の体育館から、弥白も少女も姿を消していた。

新体操部の練習を終え、帰宅を始めるまるんと都。

校門で待っていた稚空と水無月が声をかけてきました。

「おっ！ やつと練習が終わったか。」

「もう少して真っ暗になるところでしたよ。」

「あら？ 稚空、委員長、待っててくれたの？」

都が笑顔で2人に声をかけます。

「もちろんですよ！ もしも連続誘拐犯に出くわしたらどうするんですか！ 僕が犯人を発見次第、全力で日下部さんを守りつつ捕まえてみせますよ！」

「あゝら。やっぱりまるんを守りたいだけなのね。」

意気込みを見せる水無月委員長に、都がからかうように水を差します。

「い、いえ、そういうつもりじゃ。」

「じゃ、何なんだよ？」

戸惑う水無月に、稚空もからかいます。

「もう、やめてくださいよ、名古屋くんまで。」

水無月の抗議に、3人が苦笑します。

「オレは委員長に引つ張り出されたんだけどな。」

稚空が手を頭に当てて言います。

自分もまるんたちを守りたいという気持ちがあったので、水無月の強引な誘いをあえて断らなかったのです。

「それにしても、警察の警戒網をかくぐって犯行に及ぶなんて、

敵ながらなかなかね。」

都が真剣な面持ちで呟きます。

警察の威信を賭けた捜索を進めても、被害者の行方も犯人の身元も発見することができなかったのです。

「アレ？ まろんちゃんに、都ちゃんじゃないか！」

そのとき、学校の前を通りがかった1人の男性が声をかけてきました。

「あつ！ 昇さん、昇さんだ！」

都がその男性に笑顔で手を振ります。

あまぎしよつ
天城昇。

都の兄、昇の大親友で、都やまろんが幼いときにはいつも優しくしてくれたのであるのです。

昇が科学の勉強のために外国に行くと言い出したときは両親も反対したが、昇の科学に対する熱意に負け、留学を認めたのだった。

その気持ちに後押しされたこともあり、昇はその後ルポライターとなり、様々な人々の心に触れてきたのであります。

久方ぶりにこの日この街に帰ってきたところ、彼はまろんたちと再会したのでした。

「懐かしいなあ。氷室さんは元気？」

「うん！ 元気も元気！ お父さん、刑事の仕事がんばってるんだから！」

笑顔で昇を迎える都。そこに稚空が口を挟みます。

「知り合いなのか？」

「ええ。都のお兄さんのお友達なのよ。とても友達思いで。」

まろんが言葉を返す。

彼女と都に、昇は懐かしさを感じていました。

「それにしても、時がたつのは早いもんだな。昔は小さく可愛かったのに、今じゃこんなに大きくなって綺麗になって。」

昇が照れながらまろんたちをおだてます。

「今日、ここに来たの？」

都の言葉に、昇が笑顔で答えるのです。

「ああ。ルポライターで南アフリカを回ってきたんだ。これからしばらくは近くの別荘で少し落ち着くつもりだよ。よかったら遊びに来たら？あまりいいおもてなしはできないけど。」

「うん。もし行けたら行くよ。じゃ、またね。」
「都は笑顔で昇と別れ、家路を歩き出しました。」

雑談を繰り返しながら、まろんたちは無事にマンションにたどり着きました。

「では、僕はこれで失礼します。」

水無月委員長が小さく一礼して挨拶します。

「被害者は男も含まれている。委員長も気をつけるよ。」

「分かっていますよ。それでは。」

稚空の心配に水無月いい蝶が笑顔で答え、まろんたちと別れました。

街灯が照らす通りを帰宅のために一人歩く水無月委員長。

「僕だってやればできるってところを、日下部さんたちに見せないと。」

1つの決意を胸に秘め、水無月委員長は帰路を進む。

そのとき、彼の前に1人の少女が姿を現したのです。

「あ、あれ？日下部さん？」

水無月が少女の姿を疑います。

少女の姿は先程別れたまろんそのままですが、まろんは無事に家に着いたことをこの眼で確認しています。まろんがこの場にいるのはあり得なかった。

「見つけたよ、委員長。」

少女は薄っすらと笑みを漏らす。

「く、日下部さんじゃない！」

水無月委員長がはっとして身構え、少女の姿を見据える。
すると少女の眼が不気味に紅く光りだしました。

「大変！大変！」

「てえへんだ！てえへんだあー！」

夕暮れの空を駆け抜ける2人の天使のフィンとアクセスが慌てて飛んでいきます。

2人はそれぞれ、さっき帰宅したばかりのまるんと稚空のベランダにたどり着きます。

窓を叩く天使たちに、安堵の吐息をついていたまるんと稚空が不機嫌そうに窓を開けます。

「何よ、フィン。今やつと帰ってきたところなのに。」

「何だよ、アクセス。そんなに慌てて。」

「大変だよ、まるん！悪魔を見つけたのよ！」

「えっ？」

神が魔王を倒し悪魔の力は弱まったが、ときどき人間界にはぐれ出た悪魔が人の心に付け込んでくることがあります。

フィンとアクセスはその悪魔の気配を察知し、急いで駆けつけてきたのであります。

「天城昇って人が保管している、洗礼の女神っていう像に取り付いてるの！」

「昇さんに！？」

フィンの報告にまるんは驚愕します。

親しい人との再会に、悪魔の気配を察知するプティクレアの警告音に気付かなかったのです。

「昇さん・あの人が悪魔に・・・」

昇とはさっき知り合ったばかりだったが、稚空も困惑を隠せないでいました。

「とにかく、予告状は出しといたから、早く封印チエックメイトしてくれ！」

フィンとアクセスは、すでに2人の怪盗からの予告状を昇に送りつけていました。

「行いこう、まるん！」

「うん！」

稚空とまるんが現場に向かうため、それぞれ玄関に向かいます。
その時。

”ピンポーン”

インターホンが鳴り響き、玄関にいたまるんと稚空が同時にドアを開けると、稚空の部屋の前に、紳士服に身を包んだ1人の男性が息を荒げていたのです。

「か、神楽！？どうしたんだ、そんなに慌てて・・・!?」

父の秘書の神楽の姿に、稚空が驚きの声を上げます。

彼は今頃、弥白を迎えにいつているはずであります。

「ち、稚空さま・・弥白さまが・・弥白さまがいなくなってしまいました！」

「何だって！？弥白が!?!」

神楽の言葉に稚空が驚愕する。

「あつ！まるん、稚空！それに、貴方は・・・」

そのとき、ジャンヌが予告状を出してきたという連絡を受けて、都がドアを開けて飛び出してきました。

パート2 もう一人のまろん（後書き）

もう1人のまろんちゃんが連続神隠し事件を引き起こします。
果たして悪魔は何をする気でしょうか。

パート3 出勤（前書き）

お待たせしました。

46話も半分近くになりました。

今日は多少うっかりしてしまいました。

パート3 出動

「こ、これって、どうなってるんですか……」

水無月委員長は自分の姿に困惑していました。

まるんそっくりな少女の紅く光った眼を見たたん、彼の足元が灰色に変わり、それが上半身に向かって徐々に進行していた。

少女が妖しく笑みを浮かべながら水無月委員長に近づきます。

「何も怖がることはないわ。委員長はまるんのことをいつも気にしてただから。」

「あ、貴方は一体……もしかして、あの連続誘拐犯じゃ!?!」
怖がる気持ちを抑えながら、水無月は必死に声を振り絞ります。

少女は水無月の頬を優しく手で触れます。

「誘拐犯? それはちよつと分らないけど、私がただ言えることは、私はまるんの中にあるもう1人のまるん。」

「えっ!?!? どういうことですか!?!」

「そのままの意味だよ。だから委員長はあまり気にしなくていいよ。だってこれから私の世界に堕ちるんだから。そうしたらまるんと恋焦がれることができる。ずっと、ずっとね。」

少女の甘い言葉と体を覆った石化が、水無月委員長を更に恐怖させるのです。

「や、やめて……く、日下部……さ……ん……」

少女の紅い瞳が見つめる中で、水無月委員長は怯えた表情のまま灰色の石化に変わり果てました。

「これでまた1人、まるんのようにどこかが私の世界の中に入った。早く来て、まるん。私は貴方あなたと出会うのを心待ちにしてるんだから。」

少女は水無月委員長の頬を触れていた手を離し、漆黒の闇を見つめている。

まるで何事もなかったように、少女と水無月の姿はその場から消

えていった。

「えっ！？山茶花さんが!？」

神楽の話した事のいきさつを聞いて、都が驚愕の声を上げます。彼がいつも通りに弥白を迎えに学校にきたとき、クラスメイトに彼女が体育館から突然行方が分からなくなったと言われ、学校とその周辺を必死に搜索したものの、彼女の痕跡さえも見つけることができませんでした。

警察に連絡したところ、連続誘拐事件に巻き込まれた可能性があることを告げられ、神楽はいても立つてもいられなくなつたのです。「とにかく、私は海生さまに改めて連絡を入れます。何か分かりましたら、警察か私に連絡をお願いします。」

そういつて神楽は立ち上がり、稚空の部屋を飛び出していきました。

「まるん、稚空、これつて、悪魔つてヤツの仕業・・・？」
都が不安そうに聞く。

「分からない。このまま放つてはおけないけど、私たちの出る幕じゃないわ。とにかく警察に任せるしかないわ。」

「そうね・・・お父さん・・・」
まるんの言葉に、都がうつむく。すると稚空が、

「都、弥白を心配してるのか？」

「そ、そんなんじゃないわよ！ただ、悪魔が関わってることも考えられるし。」

都は一抹の不安を抱えていました。

兄の親友である昇に届けられた怪盗からの予告状。

それが送られてくるのは、たいていその人が悪魔にとりつかれているケースが多い。

都は、昇が悪魔にとりつかれ、連続誘拐を起こしているという推理を思い描いてしまったのである。

「とにかく、私はお父さんと合流するわ。私もまるんたちをサポート

「トするから。」

「うん。ありがとう、都。」

「でも、これって刑事を目指す私には、立派なルール違反なのよね。まあ、アンタたちとの付き合いも長いからね。」

「まるんが感謝の言葉を送り、都が苦笑いを浮かべます。」

「まるんがジャンヌとして世界を守るために悪魔を封印していることを知った彼女は、いつしかジャンヌやシンドバットに協力の意を示すようになってきました。」

「じゃ、気をつけてね、まるん、稚空。」

「ああ。」

「まかしとけ。」

「うん。都ちゃんもね。」

「都は頷いて、部屋を飛び出していった。」

「さて、オレたちもいくとしますか？」

「そうね、シンドバットさん。」

「続いて、まるんと稚空が部屋を飛び出し、フィンとアクセスが後を追いました。」

「予告状が届いた昇の別荘は、街と草原地帯と海岸を分け隔てる位置に建てられていた。」

「海を一望できるその別荘は敷地が広く、まるで豪邸といっても過言ではなかったのです。」

「都の父、氷室の率いるジャンヌ特捜班を始めとした桃栗警察の警官たちが、庭や門前を筆頭に警戒網を広げていました。」

「まさか、氷室さんとこんな形で再会するなんて。」

「氷室に事情聴取を受けていた昇が苦笑いします。」

「やっとこの街に帰ってきたところすまないな。」

「怪盗ジャンヌ。噂は向こうでも聞き及んでますよ。巧みな動きで警察の包囲網を突破するが、盗む物に共通点が見られない謎の多い泥棒だって。」

「そうなんだ。都も張り切ってしまったて。」

「えっ！？都ちゃんか！？」

氷室の言葉に昇が驚きます。

ジャン又事件が起こる度、都はジャン又逮捕のために様々な戦略を練っていたのですが、ジャン又がまるんだということを知ってから、彼女は逆に警察をあざむく行動を取ることを意識するようになったが、他の警官にはその素振りさえ見せていないのです。

「で、ターゲットとなった洗礼の女神は？」

氷室が昇にジャン又の今回のターゲットの置いている場所を確認。

「僕の寝室に置いてあります。でもあんまり詮索しないでくださいよ。別荘といってもけっこう広いですから、住み慣れてないとすぐに迷ってしまいますし。」

「それは心配しなくていいよ。守秘義務はしっかりと守りますので。」

苦笑いする昇に、氷室が笑顔を見せて敬礼を送ります。

「では、私もそろそろ行かなくては。」

「後で貴方あなたの家に寄らせてもらいますよ。」

事件に向けて動き出した氷室に、昇は笑みを浮かべて見送りしました。

別荘を見下ろせるほどのビル的一角。

その屋上でまるんが双眼鏡で別荘を覗き込んでいます。

稚空はすでにシンドバットに変装していた。

「洗礼の女神の像は、奥の寝室にあるわ。」

フィンがまるんにターゲットのある場所を伝える。

「今回も相変わらず警官がたくさんいるが、都が陰で協力してくれるっていうから少しは気が楽になるかな？」

シンドバットが笑みを浮かべます。

「それでは、今夜もゲームスタートね！」

まるんが胸の前で両手を組み、祈るように瞳を閉じた。

聖なる力が覚醒した彼女は、ロザリオがなくても意思ひとつでジャンヌに変身できるようになっていた。

星が輝く夜空を舞う聖女の姿を、心の中で思い描き、まばゆい光に包まれたまろんが手を広げます。

「強気に、本気。」

薔薇のつるが体中からみ付きます。

「無敵に、素敵。」

包み込んでいた光が、天使の翼を形作ります。

「元気に、勇氣！」

天使の翼が散らばり、巻きついてきた薔薇が鮮明な紅を描いたりボンに姿を変えて、さらりとしたブラウンの髪は金色のポニーテールに変わり、服装は白い聖女の装束となった。

まろんは、ジャンヌへの変身を完了した。

ジャンヌはシンドバットに目線で合図を送り、別荘に向けて夜空を舞います。

「フッフ。やっと動き出したようね、まろん。」

飛び出した怪盗の姿を見つめる1人の少女。

まろんそっくりの少女が妖しく笑みを浮かべます。

「あそこが私の用意したステージ。そして貴方あなたと出会う運命の場所よ。」

ジャンヌの行動と同時に、少女も別荘に向かって歩き出しました。

いつものように予告の現場に来ていた都ですが、膨大な広さのある昇の別荘の中で迷い、長い廊下を彷徨っていました。

「もう、何なのよ、ここは！昇さんもこんな別荘を建てるなんて人が悪いわよ！」

あまりの広さに呆れて、愚痴までこぼすようになってきたのです。廊下には窓がきちんと並べられていたが、いずれも開けることはできませんでした。

その窓の外の騒がしさに気付き、都が外を覗き込む。

ジャンヌが現れたためか、警察の動きが慌しくなっていました。

「現れたわね、まるん。私も急がないと!」

笑みを見せて都は再び廊下を駆け出したのです。

警察の包囲網を突破したジャンヌとシンドバット。

屋敷のような別荘に入り込んだ2人は、悪魔封印のために2手に別れることにしたのです。

プティクレアの反応を頼りに、長い廊下を駆けていくジャンヌ。

「悪魔はいつたいどこなの?」

走りながら扉に閉ざされた部屋の気配を探っていきます。

そして何個目かの部屋に注意を向けたそのときに、プティクレアがわずかだが反応を示した。

「もしかして、この部屋・・・」

ジャンヌはゆっくりと反応のあった部屋の扉を開きます。

その扉は「天城昇氏以外立ち入り禁止」と書かれていました。

だが、今の自分は泥棒。そんな書き込みは関係ない。

ゆっくりと扉を開け、部屋に忍び込んで静かに扉を閉めます。

「えっ・・・?何なの・・・?」

ジャンヌは部屋の光景に眼を疑いました。

その部屋には、何ひとつ衣服をまとっていない女性の石像が何体も並べられていました。

プティクレアは、その石像から発している悪魔の邪気に反応しているようだが、いずれも悪魔が入り込んでいる様子はなかったのです。

悪魔に隣接したときの強い反応ではなく、いずれの石像からも弱々しい反応しか示さなかった。

「それにしても、この部屋は何なの?もしかして、昇さんが・・・?」

「見られてしまったね。」

背後から声が聞こえ、ジャンヌは振り返りました。

部屋の前には、学校で久しぶりに再会したときの態度で昇が立っていた。

「天城、昇さん・・・」

ジャンヌが戸惑いながらも小さく呟く。

「つくづくおかしいな形で再会するなあ。君もいい気分じゃないだろ？怪盗ジャンヌ、いや、まるんちゃん。」

昇の言葉にジャンヌは驚愕します。

どういいういきさつなのか、彼はすでに彼女の正体を知っていたのです。

「知っているんですか、私の正体！？」

驚く気持ちを抑えて、ジャンヌが昇に訊ねます。

「ああ。けど誰にも話してはいないよ。君がああジャンヌだと知ったときは少し驚いたけどね。教えてくれたんだよ。人を心身ともに美しくしてくれる洗礼の女神が。」

「いいえ、違うわ！あれは女神なんかじゃない！悪魔なのよ！」

「悪魔？それでも別にいいよ。女神でなくても死神でも、僕はすばらしい力を手に入れたんだ。他の人たちに本当の美を与えられる力が。」

悠然と話す昇が部屋に入り、ジャンヌの横を通り抜けていきます。

「君には教えておくよ。ここにある石像は、元々は本物の人間だったんだよ。」

「えっ！？本物なの！？」

ジャンヌが再び驚愕の声を上げると、洗礼の女神像にとり付いた悪魔に魅入られた昇は、その与えられた力で女性たちをさらい、石像に変えていたのである。

「女神の洗礼を受けたこの人たちは、更なる美しさを得た。彼女たちも喜んでいると思うよ。」

「違うわ！本当の美しさは、そんなまやかしの中で生まれるものじゃないわ！人と人とのかけがえのない絆こそが美しいのよ！」

不敵な笑みを見せる昇にジャンヌが声を荒げます。

「あつ！ジャンヌ、昇さん！」

そのとき、別荘を彷徨っていた都が、ジャンヌと昇のいるこの部屋の前にたどり着いた。

かなり走っていたため、顔から汗が垂れていた。

「ち、ちよつと・・・これつて・・・」

都も、裸の女性で埋め尽くされたこの部屋の光景に眼を疑った。

「ようこそ、都ちゃん。ここが僕の美の宝庫だよ。」

「昇さん、貴方・・・」

都が悲しい顔でうつむきます。

昔の昇は気さくで不器用だけど、困った人には優しく声をかけ笑顔で対応してくれた人だった。

今の彼からは、そんな優しさは全く感じられませんでした。

都は再び真剣な眼差しを取り戻し、手に持っていた銃を構えます。その銃口はジャンヌではなく、昇へと向けられていた。

「どうしたんだ、都ちゃん？君はジャンヌを捕まえようとしているんだろ？銃を向ける相手が違うよ。」

昇は都の行動が理解できず疑問符を浮かべているのです。

「貴方あなたは昇さんじゃない。昇さんになりすまして、私たちを騙そうとするなんて許さない。」

「おいおい、都ちゃん、こんなときに冗談はやめてくれよ。」

弁解しようとして動き出そうとした昇の足元に都は発砲した。

放たれた弾丸は床にめり込み黒く焦がしたのです。

「冗談なんかじゃないわ。お願いだから大人しくしなさい。」

都は真剣な眼差しのまま、再び昇に銃口を向けます。

「そうかい・・・今日はおかしなことだらけだよ。」

そう言つて昇は駆け出し、部屋を飛び出し廊下を駆け出しました。都が2、3発、銃を撃ち込むが、昇の動きを止めることもできず、壁や天井に当たるだけだった。

「待つて！待ちなさい！」

都は昇の後を追って部屋を飛び出した。

「待って、都ちゃん！」

「1人じゃ危険よ！」

ジャンヌもフィンも慌てて部屋を飛び出しました。

パート3 出勤（後書き）

次は18禁になるかもしれない。
今日はすいませんでした。

パート4 石化された都（前書き）

大変遅くなりました。今回は出来るだけ急がせておきます。

そうすれば、私もゆつくりと休めます。

さて、今回は都ちゃんが悪魔に捕えられてしまう場面から始まりま
す。

みなさんもお見逃しなく。

パート4 石化された都

昇の後を追い、廊下を駆け抜けていく都。それをさらに追うジャンヌ。

昇はまるで彼女たちを誘っているように、かつ追いつかれないように廊下を進んでいきます。

そして都が角を曲がった直後、ジャンヌの前で1つの部屋の扉が開き、そこから黒い煙が巻き起こりました。

「何っ!？」

ジャンヌはとっさに手で口を押さえ、煙を吸い込まないようにします。

煙はさほど害を及ぼすものではなくすぐに治まりましたが、そのためジャンヌは昇と都の姿を見失ってしまったのです。

「しまった!都が!」

ジャンヌは昇と都を追い求めて、すぐさま廊下を駆け出しました。悪魔にとり付かれた昇の気配は、ブティックレアで察知することができる。

都も彼を追いかけていったなら、近くにいるはずであります。

「都、あんまりムチャしないでね!」

都の安否を胸中に秘め、ジャンヌが廊下を駆けていくのです。

昇の別荘の部屋の1室。

来客を迎えるためのこの部屋には、中央に長いテーブルが置かれ、いくつかの椅子が並べられています。

薄暗いこの場所の隅で、少女が闇に溶け込むようにうつすらと笑みを浮かべて立っていたのです。

「邪魔はさせないよ、まるん。せめて都は昇のものにしてあげないと。」

星の瞬く夜空を窓からうかがいながら、少女が呟く。

「彼が手に入れた能力は私は好きじゃないけど、その力をどんな形で使おうとその人の自由。まろんと都がどんな気分になるか楽しみね。」

少女は身をひるがえし、部屋を後にしました。

「さて、私もいい加減動かないと。何もかも私の思い通りに進んでいるんだから。」

都が昇を追って入った部屋。それは彼の寝室でした。

「昇さん、何処なの!？」

都が銃を下ろしたまま、部屋を見回す。

机の上にはノートや資料の本など、昇の私物がいくつか重ねてあり、ベットの隣に1体の彫像が置かれているのが眼に止まります。

一糸まとわぬ肌を背中から生えている翼で覆っている女性の石像。今回のジャンヌのターゲット「洗礼の女神」であります。

「これが、洗礼の女神・・・」

都は女神の像に釘付けになる。

TVや新聞などからの情報でどういふものかは知っていたが、この眼で直接見るのは初めてだったのです。

「君もすばらしいと思うだろ?女神の素肌が。」

発せられた声に都は振り返ると寝室の扉を閉めた昇が悠然と都を見つめていたのです。

「な、何を言ってるのよ・・・?」

都が不安を抱えながらも、銃を昇に向けます。

それでも昇は悠然なその態度を崩しません。

「そんなに気を張り詰めなくてくれ。この洗礼の女神との出会いが、僕の中に隠れていた何かを呼び起こしたんだ。」

「動かないで!動いたら撃つわよ!」

足を動かそうとした昇に向けて、都が銃を構える。

しかし、彼女の忠告を聞かず昇が女神像へと歩き出す。

都は歯を食いしばるように顔を歪め、覚悟を決めて引き金を引き

ました。

その弾丸は昇のわき腹に命中したように見えたのですが。

「えっ!?!」

都は眼を疑いました。

命中したはずの弾丸が奥の壁に着弾したが、当たったはずの昇は何事もなかったようでした。

暫くすると彼の姿が、物を投げ込まれた水のように乱れて消えていきます。

都が身構えて銃を構えなおしたその瞬間、突然現れた昇が、都の持つ銃をはたき落としました。

「ぐっ!」

うめく都の両手を昇が掴む。

「暫く会わない間に都ちゃんも物騒になつたね。いくら刑事の卵だからといっても、高校生なのに人に銃を向けるんだから。」

「は、放して!」

不敵に笑う昇から逃れようと、都が手に力を入れながら足払いを見舞おうとしても、まるで金縛りにあつたように体の自由が利かなくなります。

「ど、どうしたの!?!体が動かない!?!」

胸中で焦る都に、昇が語りかけます。

「女神も機嫌を損ねてしまったようだね。今の君は女神の力で動きを封じられている。」

「そ、そんな・・・!」

「銃を持つにはまだ幼いよ。お仕置きをしないとね。」

不気味に笑う昇に都が恐怖を感じました。

悪魔にとり付かれた彼の眼は水が濁るように邪気が淀み、額に亀裂が入ります。

「これが僕が女神から与えられた力、洗礼の心眼だ。」
額の亀裂から第3の眼が開いた瞬間。

”カッ!”

まばゆい光が都の体を包み込み。

”ドクンッ!”

強い高鳴りが都の胸を打つ。

やっとのことで両手を解放された都は、激しい高鳴りに胸を押さえず。

「何を、何をしたのよ、今!？」

都が困惑する面持ちで笑みを崩さない昇に聞きます。

「何って、僕は今、洗礼の光を君に照らしたただだよ。君は最高の美を開花させる鍵を開けたんだ。まずは君の左胸が美のヴェールに包まれるよ。」

「えっ!？」

昇に促されて都が自分の胸を見つめると、服が弾けるように破れました。

”ピキッ パキッ”

あらわになつた左胸は、白みがかつた灰色に変色し、所々に亀裂が入ります。

「ち、ちよつと、何なのよ、コレ!？」

変わり果てた自分の姿に、都が驚愕と困惑の声を上げます。

その姿をまじまじと見つめて、昇が妖しく語ります。

「やつぱり君も綺麗な肌の持ち主だったんだね。」

「し、昇さん・・・!？」

「洗礼の女神と出会って、僕は本当の美しさが女性の肌にあることに気づいた。だけど、みんな見かけだけの服を着込んで、その美しさを隠してしまっている。だから僕は、この洗礼の心眼まなこで気付かせているんだ。」

昇は女神を偽る悪魔に見入られ、自分の欲望に駆られて女性たちをさらっていたのです。

そしてその魔手が、都の体をも蝕み始めています。

「女神から渡されたのはただの石化の力だ。僕はそれにある思念を送り込んだ。石化する人が身にまとうものを全て破壊しろと。」

昇の送った思念の通り、都の服は石化に巻き込まれてボロボロになり、上半身の肌がさらけ出されていたのです。

「お願い、昇さん！私の体を、みんなを元に戻して！」

悲痛の叫びを上げる都。石化してひび割れた体が小刻みに震えます。昇がそんな彼女の体を抱きしめる。

「ちよつと！昇さん！」

都が昇の抱擁に抗い抜け出そうとするが、石化した体と昇の強い腕の力で抜け出すことができない。

「昔は君もまるんちゃんも、いつも僕にくっついていたんだよ。

あのときの君たちは本当にかわいかった。そして今は、そのかわいさに美しさが加わった。君とまるんちゃんは、ずっと僕と一緒にだよ。」

昇が悲しく都に語りかけます。

気さくで笑顔と努力を絶やさない普段の彼からは考えられない、欲望と激情で満たされた姿がそこにあった。

”ピキッ ピキッ ピキッ”

都の左腕が固く冷たくひび割れていきます。

「イヤ・・・やめて、昇さん・・・こんなの、昇さんじゃない！」

都が涙ながらに昇に訴える。しかし、昇は都の肩を掴んだまま放しません。

「都ちゃん、これが僕の本当の僕なんだよ。洗礼の女神が気付かせてくれたんだよ。女性の肌に隠された美に魅力を感じることできる僕を。」

そして昇が、石化していない都の右胸に手を触れる。

「し、昇さん！」

赤面する都の言葉を無視して、昇が胸を撫でる。

「そんなに怖い顔をしないでほしいよ。都ちゃんとまるんちゃんは最高の肌の持ち主だ。君の顔に怖さを残してほしくないんだよ。」

「あつ・・・ああ・・・」

胸を揉まれ、都があえぎ声を漏らします。女性のさらけ出す肌に

美を感じ酔いしれる昇は、都の柔らかな肌に快感を覚えていた。

「ああ・・・あはあ・・・」

都から漏れる声はもはや言葉になっていなかった。

石化の力に及ばされながらもまだ抗う意を示していた彼女だったが、体の不自由さと昇の快楽に抵抗することができず、自分も快感の海に身を沈めていくのだった。

暫くして昇は都の胸から手を離し、彼女の下半身を眼にやった。

「さて、次は腰から下だ。君のきれいな素足をみせてくれ。」

”ピキキツ　パキツ”

昇が意識を傾けた瞬間、都のはいていたスカートが破れ、灰色に変わった素足と秘所がさらされます。

顔を赤らめる都の裸を見つめながら、昇は腰を下ろします。

「時がたつのは早いものだな。幼くかわいい女の子が、こんなにも美しくなってるんだからね。胸もお尻も膨らみ、手足もサラリとしている。今の都ちゃんは、僕の理想の女性に変わってくれた。」

「イヤ・・・イヤ・・・」

都はただ願うことしかできなかった。

眼からあふれた涙は頬を伝い、石の肌へと流れ落ちていく。

こんな状況なのに、心の奥から歡喜が湧いてきます。

どうしてだろう。悲しく辛いはずなのに。

兄と言っても過言ではない人が、今までとは違う言動で自分を弄び、体を石に変えて胸や肌をさらして手でなぞられているというのに。

今まで感じたことのない快感が、自分の中の恐怖と不安を消し去っていく。

「都！」

そのとき、部屋の扉が勢いよく開け放たれました。

都の石の素足に手を滑らせていた昇が振り返ると、自分たちを追い求めて廊下を駆けてきたジャンヌの姿がありました。

ジャンヌは部屋の中の光景に眼を見開いた。邪気の立ちこめる女

神像の前で、今まで見せたことのない言動を見せる昇と変わり果てた都の姿がそこにあつたのです。ジャンヌが困惑し体を震わせます。「丁度いいところに来たね、まるんちゃん。都ちゃんが最高の美のヴェールを纏うところだよ。」

顔を悲痛で歪めていくジャンヌを見つめながら、昇は再び都の石の素足に触れます。

「昇さん、貴方あなたが今、何をしているのか、分かつてるの！？人の体を、心を弄んでるだけ！都の貴方あなたへの想いでさえ、貴方あなたは裏切つたのよ！」

「それは違うよ。」

何とか声を振り絞るジャンヌの言葉を昇は否定します。

「君も都ちゃんも、周りよりも辛いことを重ねてきたそうじゃないか。僕はそんな君たちを放つてはおけない。だからこの洗礼の力で、君たちをこの辛さから解放させてやりたいんだ！」

「私も都も、確かに辛いことがたくさんあつたわ。だけど、私たちはそれに負けない強さを持つてる！」

「そんなことないよ。」

自分の胸に手を当てるジャンヌに、昇は笑みを浮かべて近づいていき、彼の伸ばした手がジャンヌに届きそうになつたそのとき、その手をさえぎるように、淡い光が火花を散らして昇を阻みました。

しかし、その光は彼を押し留めるには及ばず、ジャンヌの肩を掴んだのです。

「キャッ！」

「まるんっ！」

うめくジャンヌ。自由の利かない石の体でジャンヌに叫ぶ都。

「だって、君を包んでる神の力も弱まつてるじゃないか。」

ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりであるまるんには、聖なる力が表面化した神のバリエーが張られています。

これに悪魔は触れることさえできず、まるんを魔力から守つてくれているのですが、この神のバリエーはまるんの心理状態と連動し

ており、彼女が傷つき心乱れれば、その力も弱まってしまっているのであるのです。

よって、悪魔の魔力に囚われている昇は、拒絶されるはずの神のバリエーションを突き抜けたのであります。

「僕の洗礼を受けるんだ、まるんちゃん。そうすれば君も不幸から解放され、僕も君たちのそばにいられる。だから・・・」

昇の言葉にジャンヌが戸惑います。

もしも昇に身を委ねれば、今までのような苦痛を味わうことはありません。

両親の決別と離婚、悪魔の襲来、ひとりぼっちの夜。辛く苦しい生活から解放される。

「しつかりして、まるん！」

突然響いた声にジャンヌははっとする。

都が必死に自分に語りかけています。

「まるん、アンタは1人じゃない！私だって稚空だっている！フィンもアクセスも！もうすぐまるんの両親も帰ってくる！だから、まるんは決してひとりぼっちなんかじゃないわ！」

都の言葉が、ジャンヌの中にある心の強さと呼び覚ましました。

今まで自分が受けてきた不幸は全て、神を倒そうとした魔王の企みだったのです。

これからは、家族や親友たちとの幸せな生活が送れるのだ。

”パキッ ピキッ”

昇が都に振り返り意識を向け、彼女の右胸と右腕を石化させました。

自分の体がヒビの入った灰色の石に変わった都は、力を入れることができず、驚愕の声さえ出なかったのです。

「都！」

ジャンヌは昇の手を振り払い、一糸まとわぬ姿の都の近寄ります。

「都、ゴメンね。私のせいで・・・」

悲しむジャンヌに、都が笑みを見せます。

「謝るのは私のほうだよ、まるん。結局、何もできなかったんだから・・・」

「ううん。都が励ましてくれなかったら、私はどうにもならなくなってたよ。」

ジャンヌも笑顔を見せて首を横に振る間にも都の石化は首にまで及び、頭部にせり上がってきていたのです。

「都、貴方は私の一番の友達だよ。」

「私も同じだよ。ありがとう・・・ま・・・ろ・・・ん・・・」

浸食していく石化の影響で、笑みを作っていた都の顔から力が抜けます。

”ピキッ　パキッ”

「都・・・？」

ジャンヌの笑みが揺らぐ中、虚ろな表情の都の顔を亀裂が包み、彼女の唇と頬を固めます。

”フッ”

そして、都の瞳から、命の輝きが消えた。

「都・・・みやおー！！！！」

ジャンヌが大粒の涙をこぼして泣き叫び、完全な石像となった都の体を抱きしめました。

改めて感じた友情。それが冷たい灰色となってしまう、友を想うジャンヌの涙が、都の石の肌流れ落ちました。

「まるんちゃん、悲しむことはないよ。都ちゃんは最高の美と苦痛から抜け出す自由を手に入れたんだ。君も洗礼の光を浴びて、自由の翼を広げるんだ。」

悠然と微笑む昇の額から、洗礼の心眼が現れます。

しかしジャンヌは、悲しみに暮れ、昇の行動に気付かず。

”カッ！”

昇の放った洗礼の光がジャンヌを捉えますが、その光はジャンヌを包む光に阻まれる。

「何っ！？」

昇が今起きた出来事に驚愕の声を上げます。

ジャンヌを守る神のバリアーが、昇の石化の光をさえぎったので
す。

「・・・許さない。」

都から体を離れたジャンヌが、怒りのこもった声を投げかけて昇
に振り返ります。

手を強く握り、いきり立って昇を睨みつけます。

「私は悪魔あなたを許さない！封印チェックメイトして助けてみせる！都を、みんなを！」

パート4 石化された都（後書き）

次回はちょっとでも急がせておきます。読者の皆さんのために。悪魔との戦いもそこまです。

パート5 暗黒怪盗レイン（前書き）

遂にもう1人のまるんちゃんが出現しました。彼女はまるんちゃんと融合して何をするつもりでしょうか。

そして都ちゃん達は救い出されるのでしょうか。

パート5 暗黒怪盗レイン

「もお、ジャンヌ、どこ？」

昇と都を追っていったジャンヌについていけず、別荘の廊下で途方に暮れていたフィンが品のない声を上げて、ジャンヌを求めて辺りを見回しています。

天使は普通の人間には見えないので、不審がられることはないのですが、いくら空を飛べると言っても、人間よりも小さい天使は、同じ距離をかなりの労力を要するのです。

「今のジャンヌなら大丈夫だとは思うけど、何か嫌な予感がするのよ。」

フィンは一抹の不安を感じていました。

聖なる力を覚醒させ、揺るぎない心を得たジャンヌは、悪魔には決して屈したりはしない。

そう思ってるはずなのに、何かとんでもないことが起こるのではありませんか。

フィンにはそう思えてならなかったのです。

「あれ？」

廊下を進むフィンの先で、1つの部屋の扉が開きました。

「ま、まるん!？」

扉の陰から現れた少女。その姿は間違いなく日下部まるんでしたが、まるんは今ジャンヌに変身しているはず。変身を解いてこの辺りをウロウロしているはずがないのです。

「貴方は、あなたいったい・うつつ!？」

そのとき、フィンは激痛に頭を押さえた。

少女から発せられる邪気が、フィンの体を蝕んでいます。

神に仕える天使は、悪魔の力に敏感で、邪気に触れるとその聖なる力を汚されてしまうのです。

「うつつ・苦しい・もしかして、悪魔!？」

苦痛にあえぐフィンを少女が妖しく見つめます。

「少し違うわね。確かにこうして魔力を放つてはいるけど、私はちゃんとした日下部まるんよ。」

「えっ！？それじゃ、貴方は!？」

「そうよ。私はまるんの影。心の痛みが生み出した、もうひとりの彼女なのよ。」

少女が体から紫色の邪気を漂わせ、フィんに悪影響を及ぼすのです。

「あああー・・・ああ・・・」

フィンは自分の体から力が抜けていくのを感じました。

必死にもがく手足が灰色に染まって、動かすことができないのです。

「あっ！・・・ああ・・・」

変わりゆく自分の姿にフィンが恐怖を感じます。

「両親の離婚、稚空がシンドバットだということを知ったとき、そして貴方が魔王に従う墮天使としてまるんのもとへ帰ってきたとき。その悲しみと苦しみが積み重なり、もうひとりのまるんを生み出した。それが私よ。」

少女は自分の胸に手を当てて、悠然と語る。

フィンも彼女の話に耳を傾けながらも、邪気と石化の苦痛に苦しめられていた。

「私はこれからまるんに会いに行く。だから貴方には邪魔されたくないわ。天使の力は少し厄介だからね。無事に私の世界に送ってあげるわ。」

「逃げて・・・ジャン・・・又・・・」

必死に声を振り絞り、フィンが完全に灰色の石像へと変わってしまいました。

力を失い落下しそうになった天使の像を、少女が手を伸ばして受け止めました。

「これでまた、私の作る新しい世界の住人が増えたわ。」

少女は石になったフィンを手にとって、出てきた部屋に戻りました。

そこには、彼女の魔力に侵され石化した弥白と水無月委員長が立ち尽くしていたのです。

「まるん、待ってて。苦しみも悲しみもない、私たちだけの世界を作りましょう。」

少女はテーブルの1つに近寄って立ち止まり、後ろを振り返ると「やっと来たのね、シンドバット。いえ、稚空。」

少女の視線の先、部屋の前の廊下には、シンドバットと黒天使アケセスの姿がありました。

「まるん！？どうして・・・！？」

「一体、^{いったい}どうなってるんだよ！？」

まるんそっくりの少女の姿に、2人が疑問符を浮かべます。

「あっ！フィンちゃん！」

アケセスが驚愕の声を上げると少女の手に握られた、石像と化した天使があった。

「委員長！？弥白！？どういうことなんだ！？」

シンドバットも、変わり果てた2人の姿に声を荒げます。

少女がフィンを近くのテーブルに置いて、妖しく語りかける。

「貴方達にも言っておくわ。私はまるんの悲しみや辛さが生み出した彼女の影、もう1人の日下部まるんよ。」

「何っ！？まるんの！？」

「そうよ。私は彼女の心の傷そのもの。だけどその悲しみも辛さも、まるん自身のもの。だから彼女に私を受け入れてもらって、その闇の怖さに打ち勝ってほしいのよ。」

「ふざけるな！」

シンドバットがいきり立ち、ワイヤーを伸ばして少女を見据えます。

「お前のやろつとしていたことは、ただの独りよがりな支配だけだ！まるんのことを想っているなら、ここにいるみんなを今すぐ元

に戻せ！」

「ウフフフフ。そう興奮しないで。お楽しみはこれからだよ。」
あざけるように妖しく笑う少女に、シンドバットは舌打ちをして、手にワイヤーを握りしめたまま飛び出しました。しかし、少女の姿が突然霧のように消えた。

「何っ!?!」

シンドバットは足をとめて辺りを見回した。

部屋には自分とアクセス、石化されたフィンの3人の姿しかない。彼らの耳に少女の声が響き渡る。

「まるんは私と再び一つになるのよ。そして稚空、貴方も私の世界に招待してあげる。」

哄笑を残して少女は完全にこの部屋から姿を消しました。

「まずい!このままじゃジャン又が、まるんが危ない!いくぞ、アクセス!」

シンドバットがはっとして、部屋を飛び出しました。

「あっ!シンドバット、待ってくれよう!」

アクセスが慌てて駆けていくシンドバットを追いかけていきました。

ジャン又は床に落ちているポロボロのリボンを手に取りました。いつも都が神に愛用していた赤いリボンです。

ときどき母親に曲がっていると注意されることもあった、いつも髪に留めているそのリボンは、昇の石化に巻き込まれて引き裂かれ、半壊した状態で床に落ちたのでした。

「都、私、もう大丈夫だから・・・」

ジャン又はそのリボンを服の中に入れ、悪魔を封印するためのリボンを構えます。

昇が不敵な笑みを浮かべて彼女を見つめます。

「まるんちゃん、女神の洗礼を受けるんだ。でないと、ずっと苦しみ続けることになるんだよ。」

「幸せは自分の力で得るものよ！私の未来を決めるのは貴方じゃない！私自身よ！」

ジャンヌはリボンを振り抜き、手を伸ばした昇をなぎ払いました。悪魔にとり付かれた人に対するリボンでの攻撃は絶大でありました。

「ぐわっ！」

弾き飛ばされ壁に叩きつけられた昇がうめき声を上げ、倒れて気を失いました。

ジャンヌはすかさず「洗礼の女神」に振り返った。

「そろそろ正体を現しなさい！」

ジャンヌの声に反応するかのようになり、女神像が形を変えました。別の物体へと変化してうごめき、邪気が凝り固まったような悪魔へと姿を変えたのです。

「あと少しでお前を手中に収めることができたというのに！」
不気味な声を出す悪魔が、口から体と同じ紫色の煙を吹き出してきました。

ジャンヌは素早く飛び上がってこれを回避するが、彼女が元いた場所に視線を移すと、煙を吹き付けられた床と壁が灰色に変色して亀裂が生じました。

「あの煙を浴びたら、何もかも石に……!?!」

ジャンヌは更に警戒を強め、悪魔に向けてリボンを構えます。

「神の名の下に！」

ジャンヌの背に、淡く輝く白い翼が広がります。

「闇より生まれし悪しき者を、ここに封印せん。」

振り切られたリボンが悪魔の体を取り巻き、真紅の薔薇へと姿を変えて。

チエックメイト

「封印！」

「ぐああああー！！！！！」

咆哮を上げながら、悪魔が明白な光に包まれました。悪魔を封印して変化したチエス駒をリボンで引き寄せます。

「回収完了。」

こうして悪魔は封印され、昇によって石にされた都や他の女性たちが元に戻る……はずだったのですが。

「ウソ!? ……どうして……!?!」

ジャンヌは眼を疑いました。

昇に力を与えていた悪魔が封印されたにも関わらず、煙が吹き付けられた床も壁も、都も元に戻っていないのです。

「そんな……悪魔は今チエックメイトしたはずなのに……!?!」

「フツフツフツフ……」

ジャンヌが振り返ると、意識を取り戻した昇が笑いを浮かべていたのです。

「女神によつて洗礼された人たちは、元に戻る必要なんかない。みんなその美に酔いしれているんだよ。」

ジャンヌは困惑していました。洗礼の女神に悪魔が取り付いていたなら、悪魔を封印された今、その偽りの洗礼が続いているはずはない。

青い蝶、ブルーモルフオにとり付いた悪魔を封印したときは、その毒牙にかかって仮死状態となっていた人々は元に戻った。

わけが分からないジャンヌに、昇が満面の笑みを見せて語りかけてくる。

「女神は消えてしまい、君に洗礼を与えることができなくなってしまったけど、僕はまだ君を不幸の底から救い出せる! だから僕と一緒に……」

そのとき、昇の胸を細い閃光が貫きました。

「……がはっ!」

何が起こったのか分からず一瞬呆然となっていた昇が吐血し、鮮血が床にこぼれ落ちます。

「昇さん!」

ジャンヌが声を荒げて倒れ込む昇に駆け寄ろうとしたそのとき、部屋の前の廊下に立つ少女の姿が彼女の視界に入りました。少女の

その姿にジャンヌは眼を疑った。

向けている指先から昇を射抜いた閃光を放ったと思われる少女は、まるで鏡に映っているような、まるん自身に姿をしていました。

「貴方は・・・!?」

混乱するジャンヌが振り絞った声に、少女は妖しく笑みを浮かべて答えた。

「まさか私を知らないはずはないよね？だって私は貴方、日下部まるん自身なんだから。」

ジャンヌは少女のこの言葉に驚愕する。彼女の脳裏に、昨晚見た悪夢が蘇ってきた。

“私を受け入れなさい。”

そう呟いて近づいてくるもうひとりの自分。

灰色の石に変わっていく自分の中に、少女がうつすらと笑みを浮かべて溶け込むように入り込んでいきます。

そして頭の中が真っ白になった瞬間、夢が覚めたのでした。

「もしかして、あれって・・・」

ジャンヌに夢で感じた恐怖がこみ上げてきます。

その姿を見つめて、少女が笑みを強めます。

「そう。あれは私が見せた夢。以前、貴方はおかしな夢を見たはず。あれはノインが見せた夢。それと同じ原理よ。」

まるんは以前、ジャンヌ・ダルクが孤立し、シンドバットもその意を示すという夢を見たことがあったのです。

それはジャンヌ・ダルクの魂を取り戻すために、悪魔に魂を売り悪魔騎士としてまるんに迫った、ジャンヌ・ダルクと愛を誓い合った男、ノイン・クロードの仕業だと少女は言いました。

それと同じようにして、少女は夢を通じてまるんに接近していたのである。

「貴方が、昇さんを・・・」

戸惑いを隠せないジャンヌが少女に訊ねます。

「彼も十分楽しんだはずよ。洗礼の女神に魅入られていたので、

力を与えてあげたのよ。最高の美が手に入る洗礼の力をね。彼はその力に、力をかけた相手の身に付けてるものを全て破壊するということ念を加えたみたいだけど。私は少し納得いかなかったけど。だって、洗礼された人は結局は裸にされちゃうわけだから。」

少女は笑みを消さずにジャンヌに近寄ってきます。

「全てはまるん、貴方に会うためよ。」

「私に？それじゃ、そのために昇さんを利用して、都やみんなを・」

「そうよ。ただ貴方に会うだけじゃ面白くないから、とっておきのゲームを用意したのよ。そして昇さんは十分その役目を果たしてくれた。」

突然近づくと足を止めた少女は、体から薄黒い煙を発し、背中から黒い翼が生えてきます。

その翼に包まれ、次に姿を現した少女は、ジャンヌと同じ姿容をしていたのです。

違う点は、髪の色が透き通るような銀色をして、体から命を脅かすような邪気を纏っていました。

「ジ、ジャンヌ！？貴方は、いったい・・・！？」

困惑するジャンヌに、彼女そっくりの姿をした少女が口を開きます。

「私は暗黒怪盗レイン。日下部まるん、神風怪盗ジャンヌの心の闇よ。」

「私の、心の闇！？」

妖しく笑う闇の怪盗レインの言葉に、ジャンヌが驚愕の声を上げます。

レインはさらに話を進めて。

「両親の決裂と離婚、稚空やフィンの裏切り。それらの出来事で心を傷つけられたときに生じた、あなたの悲しみや苦しみが外に飛び出して形となったのがこの私。」

「私が、貴方を生んだ・・・」

「でも思いつめることはないわ。貴方の喜怒哀楽は、内にあつても外に出ても、結局は貴方自身のものよ。さあ、改めてひとつに戻りましょう。貴方と私が、あるべき姿で。」

レインは右手を伸ばして、ジャンヌへと歩み寄ります。

リボンを構えながらも、ジャンヌは困惑を隠せないでいました。

パート5 暗黒怪盗レイン（後書き）

ついに悪魔怪盗のレインが現れました。フィンちゃんも石になってしまい大ピンチです。

ジャンヌの運命はいかに。どうなるジャンヌ。

パート6 ジャンヌとレイン（前書き）

まるんちゃんはレインという少女に魂を取り込まれてしまい、シンドバッドは絶対絶命のピンチに陥ってしまいました。今回はシンドバッドが主人公という形になりました。実質的ヒーローの活躍が今、始まります。

パート6 ジャンヌとレイン

ふとにかく、このままじゃ私までやられてしまう。私と同じ存在であつても、昇に魔力を与えたのなら、チエックメイトすれば、今度こそ都たちを救える。」

ジャンヌは集中し、レインにリボンを向けます。

「神の名の下に!!」

「チエックメイト封印してもいいのかな？」

レインの言葉に、ジャンヌの動きが止まる。

「どういうことよ・・・？」

「私は貴方の心が形となったもの。影である私が封印されて消滅したら、その影の宿主の心も傷つけてしまうのよ。だから、貴方のやろうとしていることは、貴方自身を壊すことと同じ。」

「ウソよ! そんなこと・・・」

ジャンヌは首を横に振って、レインの言葉を否定しました。

そんなことない。そんなはずはない。

影といつても、それが周囲の人たちを遅い、自分自身を狙って姿を現したなんて。

ジャンヌは、まるんは今起きている現実を、完全に信じきる事ができないでいたのです。

「何も怖がることはないわ。分かれていたものが1つになるだけ。貴方が私を受け入れてくれることで、完璧な日下部まるんに戻るのよ。」

レインが笑みを浮かべてジャンヌに手を伸ばす。

彼女を守る神のバリアーに触れ、電撃のような衝動が起こるはずでしたが、その手はバリアーに拒絶されることなく、レインは平然とジャンヌの肩に手を置いたのです。

何事もなく進んだレインの行動に、ジャンヌの動揺はさらに強くなりました。

魔力を帯びているレインが、何の拒絶もなくジャンヌに触れられるはずがありません。たとえジャンヌの心が乱れ神の力が揺らいだとしても、何らかの抵抗が生じるはずです。

「おかしなことじゃないわ。私はあなた。あなたを守るための神の力を、私が通れないはずはない。」

レインは神のバリアーに阻まれることなく、困惑しているジャンヌの腰に腕を回しました。

「今までの悲しみは、全て私が背負ってあげる。これからの辛さも、全て私が受け止めてあげる。だから、私のところにおいで。」

妖しく囁くレインに抱かれながら、邪気に侵されたジャンヌの手足が灰色に変わり始めました。しかし、レインに全てを握られている感覚に陥っているジャンヌは、自分のその変化に気付かず怯えています。

「大丈夫よ。これからは私がついているから。今まで一人ぼつちにしてゴメンね。私が貴方を守る。だから、私を受け入れなさい。」
その言葉に、ジャンヌの動揺は頂点に達したのです。

見開いた瞳が小刻みに揺れ、わずかに開いた唇も震えます。

その恐怖を表面化させるように、灰色の変色が徐々に手足から体へと進んでいきます。

レインがかけた石化が、ジャンヌの感覚を奪い、いや、その前からジャンヌの動揺は、彼女の肉体の感覚を越えてしまったのかもしれません。

「さあ、おいで、まるん。」

レインの手に導かれるように、下半身と両腕が石に変わっているジャンヌの体から、半透明で全裸のまるんが引きずり出されました。

「これがまるんの魂・ジャンヌ・ダルクの魂を受け継いでいるということを変更して実感できるね。けがれのない美しく輝きを放つ肌。」

レインがまるんの魂を抱き寄せる。

白く輝くまるんの肌を通じて、彼女が悲劇を繰り返して付けられ

た心の傷が、レインは痛々しく伝わるのを感じていました。

一糸纏わぬ姿の魂が抜け出ていくに連れて、ジャンヌの体を石化が蝕んでいきます。

そして魂が完全に体から引き出された瞬間、ジャンヌにかけられた石化が彼女の虚ろな顔にまで及びます。

唇を灰色に固め、混乱ですでに焦点を外れていた瞳をも包み、ジャンヌは呆然と立ち尽くしたまま白みがあった灰色の石像と化したのです。

「ジャンヌ！」

悪魔の魔力とジャンヌの聖なる力を感じ取って、シンドバットとアクセスが昇の寢室に駆けつけてきました。

「・・・ジャンヌ・・・!？」

シンドバットは部屋の中の光景に眼を疑ったのです。

思い空気が漂うその部屋には、半透明に輝いている裸のまろんと、彼女を抱きしめている銀髪のジャンヌ、そして灰色に染まって立ち尽くしているジャンヌと、一糸纏わぬ姿で石にされた都、血を流して床に伏している昇の姿があり、シンドバットの見つめる中で、まろんの魂が溶け込むようにレインの中に吸い込まれていきます。

レインの魔力が完全にまろんの聖なる力を取り込んだ瞬間だったのです。

「ど、どうなってるんだ・・・？」

何が起こったのか分からず、シンドバットが困惑して、部屋の中に足を踏み込めずにいました。

まろんの魂を取り込んだレインが妖しい哄笑を上げます。

「フッフッフッフ。私はもう幻の中の私じゃない。まろんの残留思念でもない。私は現実（じゆん）にいる。私が、日下部（ひさ）まろんなのよ。」

レインは広げた自分の両手を見つめながら、宿主であるまろんと1つになったことを実感します。

外に出て行った心の闇が、その宿主のもとへ還る。レインはまる

んの魂を受け入れて、本来あるべき形へと戻ったのでした。

「やつとここまで来たわね、怪盗シンドバット。いいえ、名古屋
稚空。」

レインが呆然となっていたシンドバットに振り返ります。

何とか声を振り絞り、彼は彼女に訊ねます。

「お前、そこまでして何を企んでいるんだ!? フィンを、委員長
を、弥白を、そして都やまるんまで魔力で支配して、どういつつも
りなんだ!？」

「私は私の世界を作っているだけよ。」

「理想の世界!？」

「私はまるんの傷つくのを見たくない。だから私が力を貸してあ
げたのよ。そして、1人で寂しくならないように、みんなを連れて
きたというわけよ。」

「そのために、弥白や委員長にまで手を出したというのか!？」

「そうよ。でも都は昇さんが彼女たちを想ってやったこと。裸に
して石にする趣味は私にはないわ。」

「とにかく、お前を封印して・・・」

「私を封印したら、まるんも消えるわ。」

黒いピンを具現化して手に取ったシンドバットを、レインの言葉
が止めます。

「私はまるんの心が生み出した存在。しかも今は、まるんは私の
中にいる。彼女の心の一部である私が封印されて消えてしまったら、
彼女の心が傷つくばかりか、彼女自身の存在まで消えてしまうのよ。」

妖しく笑うレインに、シンドバットは悪魔を封印するためのピン
を投げることで舌打ちをする。

「だったら、まずはお前の動きを止めるまでだ!」

シンドバットはピンを投げ捨て、ワイヤーを両手で握りしめてレ
インに飛びかかりました。このワイヤーにも、魔力を押さえ込む力
を備えているのです。

しかし、ワイヤーが捉える直前に、レインは素早く跳躍してそれをかわします。

「どっちにしても、貴方の動きでは私には追いつけないわ。」
着地したレインが、振り返ったシンドバットに語りかけます。

「それはどうかな！」

今度はシンドバットが両手に力を集めて、何本ものピンを具現化します。

「だから、封印したらまるも消えるって言ったはずよ。それとも、貴方はやっぱりそんな非情な性格なの？」

レインの言葉に耳を貸さないのか、シンドバットが両手の中に収束しているピンの大群を放ちました。

しかし、そのピンの群れはレインの足元の床に突き刺さるだけでした。

不審に感じるレイン。彼女の動きが一瞬止まったのを狙って、シンドバットが素早く彼女の背後に回り込んだ。

「このピンは囿!？」

レインが背後に視線を移したと同時に、シンドバットが彼女の両腕を掴んだのです。

「油断したな。このまま腕の関節を外して動きを封じた後、まるんをお前から引きずり出す。」

そう言ってシンドバットは、レインの腕を掴む手に力を込めますが、レインは苦痛に顔を歪めることもなく、悠然とした表情を崩そうとしません。

「ムダよ。」

「何っ!？」

レインの体から紫色の邪気が吹き出し、シンドバットは危険を察知して掴んでいる腕を放して飛びのきます。

そこにその邪気をすぐさま打ち消したレインが右手を伸ばし、荒々しい衝撃波がシンドバット目がけて飛びます。

「ぐっ!」

腕を構えて防御の体勢をとりましたが、シンドバットは衝撃波に押されて壁に叩きつけられます。

「シンドバット！」

アクセスがシンドバットを援護しようと、額の宝玉から閃光をレインに向けて放ちます。

レインは平然と、それを左手で受け止め弾き飛ばしました。

「天使の力でも私には勝てないけど、いろいろ面倒だし。」

小さく呟いたレインの左手から紫色の邪気がアクセスに向けて吹き出されました。

「うわああー！！！」

吹き飛ばされないようにアクセスは腕を組んで身構えるも邪気の影響でその体勢のまま彼は灰色に変わって硬直しました。

「ア、アクセス！」

右手で左肩を押さえて、シンドバットが苦痛を混ぜた声を上げるのです。

レインの邪気を浴びて石化したアクセスが、飛行する力を失って寝室のベットの上にふわりと落ちるのです。

レインが満身創痍のシンドバットを見下ろします。

「さあ、残ったのは貴方だけよ、稚空。貴方を引き込めば、まろんは寂しさから解放されるのよ。」

「まろんはもう、寂しくなんかない。一人ぼっちなんかじゃないんだ！オレがいる。都がいる。フィンやアクセス、たくさん仲間たちがまろんを支えているんだ！」

言うことを聞かない左腕とボロボロの体に鞭を入れて、シンドバットが必死に声を振り絞ってブーメランを握ります。

「だから、まろんは決してお前に負けたりはしない！」

「負ける？これは勝ち負けの問題じゃないわ。元々1つだったまろんと私が、1つの姿に戻るの当たり前なこと。そして私はまろんが寂しくならないように、私の世界にみんなを招待することにしたのよ。」

シンドバットの決意を、レインがあざけるように哄笑します。

「それとも、誰かが貴方を助けに来てくれると期待しているの？ ムダよ。見た目は全然変わらないけど、ここはもう私の世界。私たち以外の人には、この世界にいる私たちに気付くこともできないわ。」

レインたちがいるこの場所は、すでに彼女が作り上げた世界へと変わっていたのです。

外の世界と完全に隔離されたこの世界は、周囲からのあらゆる介入を阻もうとします。

「オレは誰かに甘えてるわけじゃない。オレを支えてくれるまるんやみんなの信頼に答えるためにも、ここで倒れるわけにはいかなんだ！」

シンドバットは鋭くレインを睨み、そしてふと笑みを溢します。

「強気に本気、無敵に素敵、元気に勇気。まるんの受け売りだけど、この言葉がオレに力を与えてくれる！」

まるんの思いがシンドバットを、稚空を後押ししてくれているのです。

昔の自分だったら、体の痛みと相手に対する恐怖で、諦めの気持ちのほうが強くなっていたことだろう。

彼女を助けたいという気持ちを中心に誓ったシンドバットは、まだ戦いの意を捨ててはいませんでした。

不敵に笑う彼の姿に、レインもうつすらと笑みを漏らします。

「なるほどね。まるんもたくさんの人々の心を解き放ったのね。でも、今はこの私が日下部まるんなのよ。みんながこれ以上辛い思いをしないように、私がみんなの時間を止めて楽にしてあげるのよ。」

「そんなことを望んでいるのはお前だけだ！ 都だつて委員長だつて、まるん自身それを望んでいない！ お互いが助け合い、喜びや悲しみを分かち合えることを望んでいるんだ！」

「私には分かるわ。まるんは望んでいる。みんなといつまでも一緒にいられる世界を。この友情の変わらない世界を。」

「お前はまるんの影でありながら、まるんのことを全く理解していない。」

「あとは稚空、貴方だけよ。貴方を導くことで、私の作る世界は完璧になるわ。」

シンドバットの悲痛の叫びにも耳を貸さず、レインは右手を突き出して妖しく笑みを浮かべました。

パート6 ジャンヌとレイン（後書き）

次回は感動のフィナーレです。レインちゃんを無事に封印することは出来るのでしょうか。

まるんちゃんが立ち直ってくれと助かります。

パート7 帰ってきた両親（前書き）

ようやく感動のフィナーレです。まるんちゃんはレインという少女に融合されましたが、心の強さは消えていませんでした。

こうして見るとマジック騎士の主人公の光ちゃんとノヴァさんみたいです。

まるんちゃんは無事にレインを救えるのでしょうか。

パート7 帰ってきた両親

「うっ！」

そのとき、今まで悠然としていたレインの表情が苦悶で歪みました。

彼女は自分の体を抱きしめ、ほとばしる激痛に爪を肌にくい込ませています。

何が起こったのか分からず、シンドバットが呆然とします。

「こ、こんなことって・・・」

苦痛にあえぐレインの背中から、まばゆいばかりの白い光が浮き出て、その中からレインに取り込まれたはずの、まるんの姿がありました。

「まるん・・・」

シンドバットが一糸纏わぬ彼女の魂に見入ります。

「まるんっ！」

「そんな・・・私から出ていこうとでも言うの!？」

シンドバットとレインが声を荒げます。

光と影の天使の体が、きらめく閃光とともに分離し、その反動でレインが床に倒れ伏すのです。

影に囚われていたまるんの魂が、石化したジャンヌの体にゆっくりと近づき、淡い光を発しながら溶け込んでいきます。

魂が戻った宿主の体は、生気を失った灰色の石に命の輝きを取り戻しました。

石化の呪縛から解放されたジャンヌは、2、3度瞬きをしてからレインに真剣な眼差しを向けました。

「どうして・・・どうして私から出て行くの!？私と分かれたままじゃ、貴方はさらに辛い思いをすることになるのよ！」

苦痛から解放されたレインが、息を荒げてジャンヌに悲痛の叫びを上げます。

「そんなことないよ。私にはみんなが、仲間がついている。だから、もうどんな困難にも負けたりはしない。自分の世界わたしなんか作らなくたって、私は辛さを心に抱えたりはしないよ。」

ジャンヌの顔から笑みがこぼれる。彼女の眼からは涙の雫が浮かんでいます。

レインがジャンヌに向けて更に泣き叫びます。

「私は、ただまるんに幸せになってほしただけなのよ！だから、みんなを連れてきて、私自身も貴方を守ろうと・・・」

「私、改めて自分の弱さを知ったわ。置き去りや離婚、裏切りや死、これらが私の心に闇を生み出し、外に呼び出してしまった。昇さんを死なせてしまったのも、都たちを石に変えてしまったのも、全て私・・・」

レインの言葉を遮って語りかけるジャンヌの顔から、だんだんと笑みが薄れていきます。

自分の弱さ、自分の心の闇が、都や昇たちを脅かしてしまった。ジャンヌはそう自分自身を悔やんでいたのです。

「もし、貴方が現れてくれなかったら、私は自分の弱さに気付かないまま、どこかで間違いをしていたかもしれなかった。貴方との出会いを、私は感謝してるよ。」

ジャンヌのこの言葉が、苛立ちに打ちひしがれていたレインの心を強く打ったのです。

必死に気持ちを伝えようとした彼女の眼から涙があふれ、その場に力なく膝を突き、呆然となっているレインの前に、ジャンヌはゆっくりと歩み寄ります。

「貴方も辛かったんだね。分かるよ。だって、私と貴方は一心同体だから。」

涙を流しながらも優しく微笑むジャンヌに、レインは泣きじゃくるように抱きついたのです。

自分の宿主にしがみ付き、悲しみの混じった声で枯れるくらいに泣き叫ぶ。

「私、辛かった！寂しかったの！気がついたら、まるんがいなくて・・・」

レインが自分の思いをジャンヌに伝えます。

悲しみや辛さによって生み出された彼女も、悲しみや辛さを抱えて彷徨っていたのです。

「いつも辛い思いをしているまるんをほっとけなくて、だから、みんなといつまでも一緒にいられるようにして、私もまるんを守るうと・・・」

「私のためにいろいろしてくれたんだね。だけど、それは間違ったことだよ。そんなことをしたって、誰も喜んでりはしない。それに、もうひとりぼっちじゃないよ。私も、貴方も・・・」

ジャンヌは優しく微笑み、涙を流すレインの銀の髪を撫でた。

「私は私が好き。そして、私の心である貴方も。」

「私も？こんな私でも、好きになってくれるの？」

虚ろな表情で聞くレインに、ジャンヌは小さく頷きました。

そのことがとても嬉しく感じ、レインはジャンヌに寄り添いました。

「ありがとう・・・まるん・・・」

「戻っておいで。もうひとりの、私・・・」

頷いたレインは、ジャンヌにさらに体を寄せました。

黒い翼の天使として現れていた心の影は、きらめく光の粒となつて、白き天使へと入り込んでいき寂しさや辛さによって生まれ外に飛び出していった心の一部は今、宿主のもとへと還っていったのであります。

「レイン・・・私の心・・・」

ジャンヌは立ち上がり、胸に両手を当てました。

今気付いた自分の闇の上に、その形が重なって心に重く押し掛かります。

「まるん・・・本当に、まるんなのか・・・？」

その光景を呆然と見つめていたシンドバットが、何とか声を振り

絞ってジャンヌに訊ねます。

「うん。もう大丈夫。」

ジャンヌが振り返り笑顔で答えます。

「レインは私の心が生んだもの。だから私が強く願えば、都たちを元に戻せるかもしれない。」

そう言ってジャンヌは眼を閉じ、神に祈るように手を組みました。彼女の脳裏に、たくさんの思い出が蘇ります。幼い日の友情。共に新体操で競い合った友。泥棒と刑事としての対立。そして、待ち焦がれていた両親からの手紙と、その喜びを分かち合った仲間。様々な思いがジャンヌのまるんの心の中で交錯します。そして彼女の背からまばゆいばかりの白い天使の翼が広がり、神風を伴って散りばめられたのです。

別荘の周辺に、天使の羽根が雪のように舞っています。ジャンヌを追って奮闘していた刑事たちも、この光景に見とれます。

昇のコレクションルームで立ち尽くしている裸の女性の像に、その光の粒が吸い込まれていき、一糸纏わぬ女性たちから、取り付いていた石の殻が剥がれ落ちます。

「あつ！あたし・・・」

「キャツ！」

「あわわ、どうしたらいいの!?!」

石化が解け元の姿に戻った女性たちが、いろいろな様子を見せています。

別室でも、レインの邪気に侵された弥白と水無月委員長、フィンも元に戻っています。

「あ、あれ？僕、何でこんなところにいるんですか・・・？」

「私、まだ悪い夢でも見ているのでしょうか？体が石に変わって、気がついたらこんなところに・・・」

2人がこの状況を理解しきれないでいた。彼らは近くの机で疑問

符を浮かべているフィンの姿は見えていないのです。

「アレ？私、どうなってるの？ジャンヌ、ジャンヌ〜！」

わけが分からなくなり、フィンはジャンヌを探し求めて再び飛び上がりました。

昇によって裸の石像にされていた都も、その石化の呪縛から解放されたのです。

「えっ？私・・・」

どういう状況に自分が置かれているのか理解できなかったが、周囲を見回して記憶がはつきりしました。

洗礼の女神に魅入られた昇の闇の力で石にされ、衣服を剥がされて全裸にされていたのです。

「あっ！ジャンヌ！」

ジャンヌの姿を捉えた都は、安堵の息をついてその場に腰を下ろし、彼女はジャンヌに助けられたことを悟ったのです。

「あっ！稚空!?!」

視線を移した都は、近くにいたシンドバットとアクセスの姿を捉えた直後、顔を赤らめて自分の体を抱きしめました。

素肌をさらけだした体を何とか隠そうと必死でした。シンドバットも思わず赤面し、後ろを振り返ったまま常備している白のコートを都に差し出した。

「は、早く着てしまえよ。恥ずかしくて見ちゃいけないよ。」

「わ、私のほうが恥ずかしいわよ！」

愚痴をこぼしながら、都はコートを羽織って肌を隠した。

「もう・・・でも、これでよかった・・・」

その様子を呆れながら見ていたジャンヌが、うつすらと笑みを溢しました。

かけがえのない友が無事に帰ってきた。仲間存在を心強く感じているジャンヌにとって、そのことがとても嬉しかったのです。

「そろそろいくぞ。警官たちが来るぞ。」

「えっ?・・・あ、うん。」

涙さえ浮かべていたジャンヌに、シンドバットが声をかけてきました。

「ジャンヌ!」

「シンドバット!」

そのとき、レインの石化が解けたフィンとアクセスが飛んできました。

「ジャンヌ、大丈夫?」

「うん。もう大丈夫だよ。」

フィンの心配に、ジャンヌが笑顔で答えますが、その笑顔がすぐに曇った。

レインの閃光で胸を撃ち抜かれた昇が、床でぐったりとしていて動かない。

「ここは私たちに任せて。警官たちに私たちの姿は見えないから。」

「う、うん。頼んだわ、フィン。」

フィンとアクセスに都と昇を任せ、ジャンヌはシンドバットとともに別荘から脱出します。

「さあ、こつからがおいらたちの本領発揮だぜ、フィンちゃん!」
活気を見せるアクセスにフィンは頷きました。

「まだかすかに息があるわ。私たちの力を与えれば、息を吹き返すかもしれない。」

フィンとアクセスは昇に意識を集中しました。

額の宝玉からまばゆい光が輝き、昇に命の炎を呼び起こします。
力を注ぎ息を荒げる2人の天使。その視線の先で、瀕死に陥っていた昇がゆっくりと体を起こしました。

「あっ!昇さん!」

昇の生還に都が歓喜の声を上げます。

「み、都ちゃん・・・」

虚ろだった昇の表情が、都に眼をやった直後に悲しみに濡れた。

フィンとアクセスは都の体を覆っている白い上着の中に隠れます。

「ゴメン、都ちゃん！僕、どうかしてたみたいだよ！僕は、君やたくさんの女性たちに甘えていたみたいだ！ゴメン、こんな目にあわせてしまって・・・」

昇は打ちひしがれて大粒の涙を流す。その姿に都は笑って答えません。

「私は、もう大丈夫だよ、昇さん。こうしてあのときの昇さんが戻ってきてくれただけでも、私は嬉しいわ。」

「都ちゃん・・・」

都の言葉に、昇は涙を流しながらも笑顔に戻ります。

洗礼の女神に魅入られた彼は、女性の肌に美を感じて欲望に駆られてしまいました。が、ジャンヌが女神像にとり付いた悪魔を封印し、レインという心の闇を受け入れたことで、彼はその呪縛から解放されたのであります。

「ジャンヌはどこだ！」

そのとき、ジャンヌを追い求めて警官たちが別荘の廊下を駆けて都の父、氷室が昇たちのいる彼の寝室で足を止めた。

「都、昇くん、大丈夫か！？」

「お父さん！」

氷室は一瞬困惑した。自分の娘の恥らう姿がそこにあったからです。

昇は氷室に駆け寄り、声を振り絞りました。

「氷室さん、僕を逮捕して下さい。」

「昇くん！？」

どういうことだか分からず、氷室が驚きの声を上げる。都も突然のことに言葉を失いました。

「あの連続誘拐事件、僕が起こしたものなんです。洗礼の女神に魅入られた僕は、さらなる美を求めて女性の肌に執着してしまっただけです。」

彼の言葉を悲しげに聞いた氷室は、しばしの沈黙の後、差し出さ

れた彼の両手に手錠をかけたのです。

「昇さん！」

氷室に連れ出される昇を、女性警察官に介抱される都が呼び止めます。

昇はうつすらと笑みを見せて、

「都ちゃん、僕のことは心配しないで。僕はこの罪を償って、この人生を一からやり直そうと思ってるんだ。これは、僕の心の弱さを乗り越えるためでもあるんだ。」

「昇さん、また、帰ってくるよね？ 昴お兄ちゃんやみんなにも会ってくれるよね？」

「うん。もちろんだよ。」

都の笑顔で頷く姿を見て、昇は氷室に促されて別荘を後にしたのです。

その後、昇やレインに誘拐された人々は救出され、裸の女性たちも女性警察官たちによって保護されたのでした。

別荘の寝室からは洗礼の女神は姿を消していました。

不可解な連続誘拐事件は犯人の自首によって幕を閉じたが、ジャン又は予告どおりに女神像を盗んでいったと警察は認識しました。

これはまるん自身の越えるべき障壁だったのです。

彼女はそれを取り越え、新たに自分の心の在り方と仲間存在を噛み締めたのです。

壮絶な事件が幕を閉じて、その月の最後の日曜日の早朝。

インターホンがマンションの廊下に響いた。

1回鳴らされた後、2回続けて再び鳴る。

その音に起こされるまるんと稚空。

朝早く起きている東大寺家では朝食を取っている中、都と氷室がその音に気がつく。

鳴り続けるインターホン。

3つの玄関のドアがいつせいに開かれます。

「うるせえ！」

熟睡していたところを起こされて不機嫌になったのか、稚空が怒鳴り声で顔を出してきたのです。

同時にまるんと都がそれぞれの玄関から顔を出す。

まるんの部屋の玄関の前に、2人の男女が立っていたのです。

「ただいま、まるん・・・」

男性は笑顔をまるんに向けたました。

彼女は2人に見覚えがあった。いや、今まで忘れたことなどなかったのです。

まるんの両親、匠とところんだったのです。

「お父さん・・・お母さん・・・」

まるんは喜びのあまり、眼から涙が浮かびました。

「今までよくがんばったわね。心配かけて本当にごめんなさい、まるん。」

「今までお前に寂しい思いをさせた分、私たちに甘えてくれ。これからは、家族3人楽しい日々を過ごそう。もちろん、お前の友達も仲良く過ごしたいと思っっている。」

優しく語りかける両親に、まるんは涙を流して寄り添ったのです。久々に再会した両親にすぎる娘の背中を、匠は優しく撫でてあげます。

「やっと、やっと戻ってきてくれたんだね・・・」

幼い頃に離れ離れとなった両親が今、間違いなく自分の傍にいます。

ジャン又抹殺のために悪魔に取り付かれ、バラバラになっていた3人の家族が今ここにいます。

その光景を目の当たりにした都も涙を浮かべ、稚空も喜びを隠せないでいた。

「おかえり・・・お父さん、お母さん・・・」

涙ながらに笑顔を作り、まるんは両親の再会を喜びました。

両親と仲間たちとともに、日下部まるんの新しい生活が今、始まるのでした。

パート7 帰ってきた両親（後書き）

これでまるんちゃんはお親とめでたく再会しました。これもみんな
稚空くんたちのお陰です。

後は数対のはぐれ悪魔を退治するだけです。

今までまるんちゃん達を応援してくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047r/>

神風怪盗ジャンヌ

2011年10月6日20時26分発行